別れと出会い

勝目博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
別れと出会い

【Ｎコード】
Ｎ３１６８Ｄ

【作者名】
勝目博

【あらすじ】
時間と女にルーズな浩二。別れを決心した恵美の前に現れたのは・・・。新たな出会いに結び付くのか・・・。恋の予感は・・・。

序章

時間はすでに４０分を過ぎていた。周りの人はそのほとんどが待ち合わせの相手が現れ、みな笑顔でどこかに消えて行った。恵美だけが取り残されていた。浩二はまだ来ない。携帯に電話をしたが繋がらない。『約束したのに。何度目だろう、浩二のすっぽかし』恵美は駅に向かって歩き始めた。付き合って2年。恵美はいつも待たされた。時間にルーズな浩二。もう沢山。恵美は思った『もう許さない、終わりにしよう』浩二の身勝手さに恵美は疲れ果てていた。ルーズなのは時間だけではなかった。女にもルーズ。恵美と付き合いながらも、何度浮気したことか。確かに浩二はかっこよく、女にもてた。でも、お洒落な服も、売れないバンド活動に熱中できるのも、全て恵美のお陰だというのに、浩二は完全にのぼせ上がっていた。出会ったとき浩二はまだ学生で、就職すら決まっていなかったが、バンドがあるから就職しないと言い切っていた。バイトの金はほとんどをバンド活動に費やしていた。当時は学生だったため、仕送りも有ったが、今では恵美に頼っていた。ギターの腕は恵美にはよく分からない。でも、下手ではないらしい。当初は、浩二に目もくれなかった。恵美には好きな人がいたのだ。しかし実際はその男に振られ、自棄酒を飲んだときに付き合ったのが浩二だった。よく訪れたバーのカウンター。その中でも浩二は注目を浴びていた。恵美の友人が浩二目当てで一緒に通いだした店。それでも浩二はほかの客とは違う恵美に興味を持っていた。そして自虐に陥ってる恵美と、仕事が終わってから飲みに行ったのだ。その時浩二はしきりに『そいつは馬鹿だ』と連呼していた。『恵美さんを振るとは見る目がないなあ』と恵美を励ましてくれたのだ。それがきっかけとなり、いつの間にか付き合いだしたのだ。だからお互い好きとも言わずに、時間だけが過ぎていった。駅に向かう恵美の足どりは、次第に早くなっていった。恵美は怒ると早足になるのだ。喧嘩をした日には、

決まってヒールを駄目にした。切符売り場は混んでいたが、恵美には定期がある。真っ直ぐに改札を抜けようとした時、早足の恵美は誰かの足に引っかかり、つまずき転んだ。またもヒールを駄目にしたようだ。

「痛〜い」どうやら、足首もひねったらしい。目の前には、ぶつかった相手の定期入れが落ちていた。足首を摩りながら定期を拾い、表を見て驚いた

「山田浩二！？」

「あっ、すいません僕のです」声の主は、恵美の知る浩二とは、似ても似つかなかった。同性同名にしても、何もかもが違っていた。学生でも通りそうなほど可愛い顔をしていたのだ。

「大丈夫ですか」こっちの浩二は甘い声をしていた。

「ええ、大丈夫」そう言って立ち上がろうとしたが、足首の捻挫はひどかった。結局、初めて会った浩二に送ってもらう羽目になった。タクシーで送ってもらったが、初めて会った浩二は、一言も喋らなかった。気が弱いのか、恥かしがりやなのかは分からないが、下を向いたまま顔も上げなかった。恵美は興味をもったが、新、浩二は恵美の名前さえも聞かなかったのだ。

「どうもありがとう」アパートまで送ってもらったが、新、浩二は、軽く頭を下げただけで、そのままタクシーで去って行った。新たな出会いを予感したが、思い過ごしで終わったようだ。恵美は小さくため息をついて、自分のアパートに入っていった。旧、浩二のことは、既に頭から消え去っていた。

1章（1）

翌朝、携帯の呼び出しで起こされた。
「もしもし」いきなり起こされた恵美は、発信者も確かめずに電話に出た。
「恵美か？悪い、悪い。仲間と飲んでさ～約束してたっけ」恵美は、無言で電話を切った。5時半、恵美は猛烈に頭にきた。ほんとうに、自分勝手な男。どうせほかの女とホテルにでも行っていたのだろう。恵美は浩二の番号を着信拒否にし、アドレスを消去した。昨夜の怒りも覚めやらぬうち、1時間も早く起こされ、恵美の怒りは頂点に達した。もう寝むれない。恵美は仕方なしに起き出した。
「イタ、イタタ」足首に手を伸ばすと、足はかなり腫れ上がっていた。浩二に対する怒りで、すっかり足のことなど忘れていた。しかし、仕事を休むほどではなかった。いや、休めなかった。誰かのせいで、財政難にも陥っていたのである。救急箱から包帯を引っ張り出し、腫れた足首に強く巻きつけた。動かさないための包帯だが、靴は履けそうもなかった。天気は良い。これで雨でも降られた日には目も当てられない。ところがテレビの天気予報では、夕方には雨になると放送していた。踏んだり蹴ったり。全てあいつが悪い。「浩二のバカヤロー」恵美は何度も呟いた。食欲も湧かずコーヒーだけを飲み、出かける支度に取り掛かった。化粧のノリも悪い。お洒落な服を着てもヒールが履けない。恵美は心底落ち込んだ。元凶は浩二。恵美は呟いた。「浩二のバカヤロー」・・・・。
　恵美は早くに家を出た。この足では、通勤に時間がかかると思ったのだ。かと言ってタクシーを使う金銭的余裕はない。またも誰かのせいである。アパートの前には、タクシーが止まっていた。黒塗りのハイヤーだ。客待ちらしく、ほかの車が動き出しても、ハイヤーは止まっていた。ボロアパートには珍しい。そう思ったが、恵美は気にせず通り過ぎようとした。ところが突然、恵美の前で扉が開

いた。
「どうぞ、乗ってください」昨夜の浩二。新、浩二だった。恵美が戸惑った様子でいると、新、浩二が降りてきて、頭を下げながら名刺を差し出した。
「うっかりしてました。驚きますよね」名刺には、名前の上に取締役専務、と書かれていた。会社名は知らないが、ＩＴ　系の会社のようだ。
「かなり、悪そうだったので、心配で来て見ました」昨夜の、新、浩二とは別人みたいに見えた。昨夜は下を向いたまま、名前さえ聞かなかった。
「どうぞ、会社まで送ります」恵美は、戸惑いながらもハイヤーに乗り込んだ。正直、歩くのが辛かったからだ。ハイヤーの座り心地は最高だった。
走り出しても、滑るような感覚で違和感は少しも感じなかった。
「でも、いいんですか」恵美は尋ねた。
「ええ、もちろん。昨日はすいませんでした」
「いえ、私がいけないんです」恵美は慌てて答えた。予感は見事的中したようだ。恵美の関心は目の前の男へと注がれていた。見れば見るほど可愛い顔をしている。それでも専務なのだ。取締役専務。結婚したら専務婦人。恵美は思わずにやけてしまった。昨日とは別人と思えるほど、よく話しよく笑っていた。どうやら親が社長らしい。うまくいったら社長婦人。恵美はまたもにやけた。単なる出会いでは無さそうだ。恵美はそう信じ込もうとした。声も優しく話しているだけで、心の優しさまでもが伝わってきそうだった。旧、浩二は何度かけても繋がらない携帯にイラつき、恵美のことを気にはしたが、やがてバンドの練習へと向かった。しかし、振られたなどとは微塵も思わない、心底めでたい男だった。

1章（2）

ハイヤーは、恵美の会社の目の前で止まった。社の役員でも来たのかと、出勤中の社員は皆立ち止まった。恵美は失敗したと思ったが、今更どうすることも出来なかった。スリッパ姿の恵美は、注目を浴びてしまったのだ。恵美は新、浩二に頭を下げた。

「ありがとうございました」

「いえ、仕事は何時まででですか」新、浩二は尋ねた。

「えっ、5時ですが」

「じゃあ、5時に来ます」そう言うと、ハイヤーは走り去った。

「あ、待って・・・」恵美の言葉は届かなかった。出勤途中の社員は、怪訝な表情で恵美を見ていた。大方、一介のＯＬが何でハイヤーなんかで・・・。そんな考えだろう。恵美は足を引きずり社屋に入った。守衛のおじさんも、不思議な表情で恵美を見ていた。

「見たわよ。ねえ、どうしたの」同期の友人、雅子が近寄ってきた。興味津々。そんな表情がありありと浮かんでいた。うるさいのに見られた。恵美はそう思った。仲はいいのだが、とにかく噂好きで、口は軽いのだ。恵美は仕方無しに足を見せ、昨夜の経緯を話した。

「すごいじゃない。玉の輿かもよ」

「もう、そんなじゃないわよ」

「でも、帰りも迎えにきてくれるんでしょ。可能性ありじゃない」やはり雅子に言ったのは、失敗であったと恵美は後悔した。京子もいつの間にか話を聞いていた。同期の中では一番仲がいい。

「浩二君は」京子には、浩二を紹介したことがあった。

「もう、あいつなんて知らない」恵美ははっきりそう答えた。

「別れちゃうの」京子は心配そうに尋ねた。

「私は、もう別れたつもり。携帯も着信拒否したし、アドレスも抹消してやったわ」恵美は得意げに携帯を見せつけた。不思議と怒りは収まっていた。新、浩二のお陰だろうか。恵美はにやついた。

「そう、浩二君かわいそう」京子は小さく呟いた。
「えっ」京子の言葉は、聞き取れなかった。
「ううん。なんでもないの」京子は明るく答えた。しかし顔には無理があった。
「ほら、いつまで話してる。始業時間は過ぎてるぞ」課長に見つかった。
「それから、恵美君、ちょっと」課長の小言が始まるのかと、恵美はげんなりとした。ところが課長は何も言わずに部屋を出て行こうとするのだ。
「えっ、か、課長」恵美は戸惑い課長に声をかけた。
「あー、ちょっと会議室まで来てくれ」恵美は驚いた。なぜに会議室なのか、恵美には想像もつかなかった。足を引きずり会議室に入ると、部長に専務までが顔をそろえていたのだ。
「まあ、座って」部長に言われて、恵美は空いている席に腰をおろした。
「恵美君、山田さんとは、どういった関係だね」課長が尋ねた。今まで聞いたこともないような話方だった。何か、まずいことでもあるのかと、恵美は緊張した。しかも口ぶりからは新、浩二を知っているようだった。しかし、やましいことは1つもない。恵美は出来事の全てを話した。もちろん旧、浩二の事は黙っていた。
「では、帰りも会うんだね」
「そのようです。迎えに来るようです」恵美にはそう答えるしかなかった。しばらく専務と部長が話していたが、やがて恵美に顔を向け話し始めた。
「実は、新しいプロジェクトの協力を求めているのだよ。彼の会社に」課長の優しい言葉使いの意味が、はっきりと理解できた。自分を利用しようと目論んでいるらしい。
「どうだろうか、新規プロジェクトに参加したくはないかね」やはりそう言う事か。恵美は呆れた。自分を交渉の窓口にする気らしい。恵美は平然と答えた。

「プロジェクトの内容も知らされていませんし、興味もありません。それに、参加してもお役に立てるとは思いませんが」部長は眉をひそめ、眉間にしわを寄せた。しかし、部長が何かを言おうとしたとき、専務が話し始めた。

「これは失礼した。君の言うとおりだ。内容も話さずにすまんね。プロジェクト内容は、部長から説明させよう。そのあとで参加するかどうか決めてほしい。君の為になることは保障しておくよ」初めて話した専務は優しかったが、恵美にはどうも受け入れなれなかった。

「はい、お聞きした上で決めたいと思います」恵美はそう答えた。早くこの場から逃げ出すには、十分な答えだと思ったのだ。思惑通りに恵美は無事解放された。普通ならば大抜擢になるだろう。しかし、会社の考えは、恵美を利用すること以外にはないように思える。恵美は憂鬱になった。雅子たちの顔が頭に浮かんだ。ほかの男性社員からも、嫉妬の目で見られるのはあきらかだった。

1章（3）

「どうしたの？」デスクに戻るなり雅子が尋ねた。雅子の詮索好きにも困ったものだ。恵美は適当に誤魔化した。折角誤魔化したところに、今度は部長が呼びに来た。苦笑いを浮かべながら、恵美は仕方無しに部長についていった。雅子も京子も不思議な表情で恵美を見ていた。部長の説明は易しく丁寧だった。おそらく、専務に言われたのだろう。しかし、専門的な話になると、恵美には理解できないことばかりだった。要は、当社の技術とＩＴとを組み合わせ、どこかに売り込みたいようだ。ところが恵美は単なる経理事務。ＩＴも、技術もほとんど解らないのである。そう答えても、部長は必死に参加させようとしていた。専務の命令だろう。必ず参加させろと・・・。恵美は考えます、とだけ答えた。仮に参加しても、窓口になれるかさえ解らないのだ。新、浩二の意図がつかめぬうちは、軽々しく返事は出来ないと思った。

説明は午前中一杯かかった。昼食時、恵美は皆から質問攻めにあった。当たり前のことだった。技術畑の部長に呼ばれれば、不思議に思われても致しかたない。しかも午前中をつぶした上に、課長はニコニコしていたのだ。

「ねえ、どうしたの。何か言われたの」雅子は興味深そうに尋ねた。

「うん、ちょっとね」恵美は笑って誤魔化した。

「水臭いな～。どうしたのよ」雅子には言いたくない。そう言ってやりたかったが、恵美は笑うしか出来なかった。京子は何も言わない。言いたければ言うだろう。そんな表情で見ていた。結局は、口を開かない恵美を諦め、雅子は昼食を食べ始めた。いかにも不満そうな顔だが、今の段階では、とてもいえなかった。雅子は午後、ほとんど口をきかなかった。京子はそんな雅子を見て、肩をすくめて恵美に笑いかけた。京子はわかってくれたようだ。問題は帰りだ。本当に迎えに来たら、話はもっと大きくなりそうに思えた。出来る

ことならば来てほしくはなかったが、心のどこかでは、来てほしい気持ちがあった。連絡を取ろうと思えば取れたのだ。名刺はバッグには入っている。それでも恵美は連絡を入れなかった。新、浩二は、5時ぴたりにやってきた。朝と同じハイヤーが玄関前に止まったのだ。守衛は慌てて飛んでいった。ところが名刺でも見せたのか、守衛はお辞儀をすると、守衛室に戻っていった。恵美の後ろの窓から、その一部始終が見えていた。更に、おせっかいなことに、課長が終業時刻を恵美に伝えた。

「恵美君、時間だよ。上がってくれたまえ」笑顔だ。皆は驚きの表情で見ていた。

「すいません、お先に失礼します」恵美は肩を丸めて出て行った。

「ちょっと、どういうことよ」雅子は京子に食って掛かった。京子は静かに首を振るだけだった。

「お疲れ様でした。足はどうですか」新、浩二は優しかった。雅子など、足のことなど一言も言わなかったのだ。恵美は微笑みながら答えた。

「はい、だいぶよくなりました。ありがとうございます」新、浩二は安心したように頷いた。

「それはよかった。ところで、これから時間はありますか」

「えっ」恵美は急な質問に戸惑った。

「お食事でも、と思いまして。予定でもありますか」

「予定はないですが、ご迷惑になります。送っていただくだけで十分です」恵美は焦った。

「いえ、ちょっとあってほしい人がいるので、是非、御一緒に」ほとんど強引だったが、嫌味は少しも感じなかった。それどころか、小さな期待まで膨らみ始めた。

「は、はい」誰だろう。まさか親御さん？恵美はそんな考えを振り払った。第一、新、浩二は独身なのかさえ聞いていない。もしかしたら、悪い人？そんな考えまで浮かんだが、その考えだけはすぐに捨て去った。ハイヤーは暗くなりかけた街中を、静かに銀座へと向

かって走って行った。

1章（4）

恵美は銀座が初めてだった。銀座のイメージは、金持ち、重役、年配。そう思っていたのだ。自分とはかけ離れた場所と思っていた。ところが、車の窓から見た通りには、若そうなサラリーマンも多くいた。浩二だってまだ若い。そう見えるだけかも知れないが、若き重役は多くいるのだ。それに、立ち並ぶビルの看板とは違って、安そうな店もかなりありそうだった。浩二から銀座でと言われたときには幾分緊張したが、店の多さを除けば、ほかの街とは大して変わりはしなかった。浩二が連れて行ったのは、小料理屋風の店だった。恵美はいつの間にかこの浩二から、新、とつけるのを止めていた。それには驚いたが、旧浩二には、未練さえないどころか存在さえ忘れていた。

「いらっしゃいませ」品のよい女性が二人を出迎えてくれた。浩二はここの経営者だと紹介してくれた。若そうだが、銀座で店を開くほどだ、それなりの貫禄さえ窺えた。

「まだかな」浩二は、店内を見回した。狭い店内には、カウンターとテーブルが3つしかなかった。その割には、カウンター内には、多くの板前が揃っていて、恵美に笑顔を向けていた。

「まだ、お見えでないですね。席は用意してあります。どうぞ」女性は先に立って歩き出した。案内も何も・・、と思っていると、店の奥には個室が用意されていた。個室は１０部屋はあろうか、恵美は驚いた。あの若さで、すごい。やはり、よく言うパトロンでもいるのかとさえ思った。

「彼女は、京都で老舗の料亭の娘です。次女だから東京に進出したんです。でも、やり手には違いないね。何飲みますか。来るまで一杯やっていましょう」恵美はビールを頼んだ。

「じゃあ、ちょっとつまみも注文しますか」浩二に差し出されたメニューに、恵美はまたも驚きの声を上げそうになった。値段がつい

ていないのだ。恵美には初体験だった。一体いくらで食事ができるのか、想像すらつかなかった。恵美は黙ってメニューを返した。
「お任せします」
「そうですか。嫌いなものはありますか」恵美は小さく首を振った。
「じゃあ、適当に頼みますね。あとで、食事も出るから少しにしましょう」浩二はビールと2品ほどを頼んだが、恵美にはきいたこともない料理名だった。恵美はお酒が嫌いではなかった。どちらかと言えば、好きな部類に入るだろう。酒飲みの父の影響で、学生時代から父に付き合い晩約をしていた。ビールは程よく冷えていた。料理は驚くほどに美味しかった。いくらでもお酒が進みそうだと思った。
「あの、誰がいらっしゃるのですか」恵美は恐る恐る尋ねた。心境としては本当に恐ろしかったのだ。プロジェクトの件もある。下手をしたら、一緒に仕事をするかも知れないのだ。それよりも恐ろしいのは、浩二の家族に会うことだった。ところが、浩二の答えはその恐ろしい答えだったのだ。
「ちょっと、兄弟に会ってほしいのです。実は・・・」その時その兄弟らしき人物が現れた。恵美は咄嗟に下を向き、黙って震えていた。なぜ、震えるのかわからなかったが、身体が自然と震えてしまったのだ。浩二の兄弟は何も言わない。慌てて浩二が座るようにいった。
「これは、僕の兄です」ほら来た。恵美は軽率な行動を悔やんだ。部長や専務にあんなこと言われなければ、食事の誘いも丁重に断われたはずだと思った。
「こ、こんにちは」やけに自信無さそうに浩二の兄は答えた。恵美は仕方無しに顔を上げ、兄に挨拶をしようとした。ところが、恵美は口を開けたまま固まってしまった。なぜならば、そこに座っているのは浩二だった。伏せ目がちに落ち着きなく座っているが、浩二、いや浩二と瓜二つだったのだ。
「兄の、浩一です。もう、わかりましたか。ぶつかって怪我をさせ

たのは、兄なんです」いきなり頭を床につけ、浩一は謝った。
「すいませんでした」恵美はポカ～ンと、口をあけていた。
「無理もないですね。実は兄は女性に前だとまるっきり話せなくなってしまうのです。そこで私が代わりに伺ったのです。でも、どうしても謝りたいというので、ここに来て頂いたのです」どうりで、最初の印象と違うわけだと恵美も納得した。
「いいんです。お気になさらないでください」恵美は優しく声をかけた。
「ほら、兄さん。いい人だろ。顔を上げなよ」浩二に言われて、浩一は顔を上げた。そして名刺を差し出し、もう一度頭を下げた。名刺には、取締役副社長の文字が、燦然と輝いていた。
「でも、定期には・・・」恵美が疑問を口にすると、浩二が答えた。
「キセルですよ。子供の頃から、二人でよくやってました。遊びですよ。双子の特権ですね」浩二は大きく笑った。浩一も笑ったが、緊張した面持ちは変わりはしなかった。恵美は、トンでもない事になったぞと、内心思ったが、反面二人に俄然興味がわいてきた。どちらも美男子で、重役。しかも独身らしかった。薬指のチェックを、恵美はしっかりとしていた。指輪のあとらしきものは、二人の指ともなかった。

1章（4）（後書き）

初めて双子とわかった恵美。このあと恵美を取り巻き様々な出来事が起こっていくのである。

2章（1）

ご飯と味噌汁、玉子焼き。京子の夕食はいたってシンプルだった。ご飯も味噌汁も朝に作ったものだ。料理が嫌いなわけではないが、一人きりだとつい面倒になるのだ。テレビも消してしまった。最近は、面白いと思う番組がなくなったと感じていた。静まり返った部屋での、たった一人の食事。味気なかった。京子は大きくため息をついた。その時、京子の携帯に電話がかかって来た。恵美の彼氏の浩二だった。元と言ってもいいかもしれない。

「すいません。恵美を探してるのですが」かなり動揺しているように思えたが、恵美の態度から、相当ひどい目に遭わせたのは想像できた。

「どうしたの？恵美、すごく怒ってたわよ。携帯も着信拒否にしたって」浩二は声に出して驚いた。

「そんな・・・。確かに、僕が悪いんです。待ち合わせをすっぽかしたから・・・」落ち込んだ様子は容易に想像できた。しかし、恵美の友人としては、一言、言いたかったのだ。

「それだけではないでしょ？」

「・・・・・」浩二は返事をしなかった。出来なかったのだろう。京子はちょっと不憫に思えた。

「恵美には伝えておきます。また、明日にでも、電話をちょうだい」

「すいません。お願いします」浩二はがっかりしたように電話を切った。浩二を恵美に紹介されたの1年前。二人が付き合い始めてしばらくしてからだった。浩二は今風の若者で、確かにいい男だった。少しの嫉妬もあったが、恵美の彼氏と言うことで、それ以上は考えなかった。京子も1人。浩二も今では1人。なぜかこの状況が、偶然ではないように思えた。そして彼からの電話が有った事。何かの暗示にも思えたのだ。しばらく考え込んでから、恵美は携帯に手を伸ばした。そして、着信履歴の浩二の番号をプッシュした。浩二は

すぐに電話に出た。
「明日、会える？5時半に迎えに来て」
「行きます」二人の会話はそれだけだったが、心が通じたように思えた。
　その頃恵美は、美味しい食事を堪能していた。
「足は、大丈夫ですか」浩一は真赤になりながらも、恵美と話すようになっていた。恵美も緊張が有ったのか、足のことなどすっかりと忘れていた。
「はい、大丈夫です」二人のやり取りを見ながら、浩二が笑った。
「へ～、兄さん、話せるじゃない」
「こ、こら、恵美さんの前で・・・」赤い顔は、更に赤くなった。
「恵美さん、ありがとうございます。こんなに話す兄は、初めてです。もしかして兄は・・・・」
「浩二、恵美さんに、失礼だぞ」浩一はむきになって怒り始めた。恵美はそんな二人を羨ましそうに眺めた。恵美には兄弟はいない。一人っ子だ。子供の頃には、弟がほしいと親を困らせたこともあったが、結局は、兄弟を持つことは出来なかった。恵美はどちらとは言えないが、好意を持ち始めていた。活発だが優しく、兄思いの浩二。女性には弱いが優しい兄、浩一。二人とも、可愛い美男子。恵美はあらためて、自分がすごい席にいることに驚いた。しかし、いつまでも、送り迎えをしてもらう訳には行かない。もう、楽しい時間を過ごすことも出来なくなるだろうと思えた。もし、恵美がプロジェクトに参加すれば、少なくとも浩二には会える。そう思ったが、参加しても役に立たないと思われるのは辛かった。恵美の寂しそうな表情に気がつき、浩二が兄、浩一に促した。
「も、もし、よろしければ、三人で飲みに行きませんか」相変わらず真赤になるが、そこもまたかわいく思えた。大の男に向かって可愛いとは失礼かも知れないが、この二人は本当に可愛らしい顔つきをしていた。恵美は一瞬戸惑ったが、もう少し、2人と居たかった。
「喜んで、お供しますわ」恵美の返事に浩一は大喜びだった。浩一

の喜び様は、これで仕事が出来るのか、とさえ思えるほど、子供のように無邪気な喜び方だった。浩二も満足そうに笑っていた。
二人が恵美を連れて行ったのは、見るからに高そうな高級クラブだった。入り口のドアには（会員制）の札が掛けられ、カウンターの中には、クリスタルのボトルが並び、着飾った女性が沢山働いていた。
「まあ、いらっしゃいませ」店のママが三人を迎えてくれた。よく来るようだ。
「どうぞ、こちらへ」通された席は、中でも一番大きく立派なテーブルだった。あっという間に、ママと４人の女性が席に付いた。出されたボトルは、カミュのＸＯ。
「あら、女の方が同伴なんて、どう言う事？どこお店かしら」中でも、一際綺麗な女性が浩一に話しかけた。浩一は、慌てて言い返した。
「馬鹿、普通のＯＬさんだ。水商売じゃないぞ」恵美には話の内容が理解できないと同時に、普通に話す浩一が疑問に思えた。女性とは真赤になって話せないのでは・・・。
「兄にとっては、水商売の女性は、女ではないんです。だから、普通に話せるんですよ」浩二の説明は、恵美には理解出来なかった。普通の女性とどこが違うのだろうか。
「もう、ひどいわね。さあ、乾杯しましょ」ママの音頭で、グラスがいい音を響かせた。
「僕らの、オヤジの口癖なんです」浩二が理解に苦しむ恵美に、説明してくれた。
「僕らは、若いときからオヤジと飲みに歩いていました。そしていつも言うのが『飲み屋の女性は女性にあらず、仕事の道具と思え』ってね。接待で使うも、商談で使うも、自分は溺れるな。という意味でしょう。そんな、ことばかりを聞いていたので、飲み屋では兄も大丈夫なんです」
「失礼しちゃうわね。でも、いいわ。浩二さんがいるから」綺麗な

女性は、ジュンと名乗った。ジュンは浩二に寄り添い、しっかりと腕を絡めた。恵美には、挑戦的な視線を送っていたが、恵美にはその視線の意味さえ判らなかった。事実、その後の会話も恵美には想像も出来ない世界であった。

2章（2）

恵美が迎えた朝は幸福感に包まれていた。2日酔いまで心地よく感じられたのだ。結局昨夜は午前様。三人で過ごした時間は、あっという間に過ぎたのだった。飲み屋のお姉さま方は、最初は恵美に敵意さえ持っていたが、一生懸命に浩一がかばってくれた。そのうち恵美の存在理由がわかり、皆とも仲良くなった。ピアノ伴奏で歌ったり、ダンスをしたりと久しぶりに楽しんだのだ。しかも、次の約束まで交わしたのだ。恵美は思わず踊りそうになった。気がつくと、歯を磨きながら鼻歌まで飛び出していた。足も腫れが納まり、痛さもほとんどなくなっていた。今日1日はローヒールで我慢しても、明日には普段どうりに着こなせそうだった。しかし、出社した恵美を、憂鬱な影が取り囲んだ。専務と部長と課長だ。荷物を置く前に、3人は恵美を会議室へと連れ込んだ。

「昨日はどうだったかね」と専務。

「プロジェクトの参加を考えてくれたかな」と部長。

「素敵な、青年だね」と課長。

「はあ？、ちょっと、待ってください」恵美は、まくし立てる3人を必死に制止した。どうやら、どこかの窓から見ていたようだ。恵美がハイヤーに乗るところを。なんと言う上司だ。恵美は呆れた。

「昨日は、食事をしただけです。まだ、決めてません。素敵な人です」恵美は順番に答えた。それから3人の制止も聞かずにスタスタと、会議室を出て行った。ところが、ほっとしたのもつかの間、詮索好きの雅子が待ち構えていた。

「どう言う事。ちゃんと説明してよね。私なんか2時間も残業させられたのよ」怒りの矛先は恵美にと向けられていた。残業などは、恵美には関係がないことだが、こうなっては、説明するより仕方なかった。この状態で説明しなければ、何を騒ぎ出すかわかったものではなかったからだ。昼食時に話すと言うと、雅子は吐き捨てるよ

うに言った。
「じゃあ、昼ね。絶対よ」その場はどうにか切り抜けたが、側にいた京子の態度は否によそよそしかった。
「なんで、恵美がプロジェクトに参加させられるの」恵美は浩一と浩二のことは、話さなかった。
「わかんないわよ。だから、何度も呼ばれているの」
「それで、参加するの」嫌味な言い方だったが、恵美は気にしないように勤めた。
「するわけないでしょ。私には未知の分野だもん」恵美はとトマトを口に放り込んだ。
「そうよね。あんたに出来るのは、経理だけでもんね」雅子は大笑いした。どうやら怒りは収まったらしい。ところが、急に雅子の顔が変わった。
「じゃあ、昨日の帰りはなんなの。誰かが来たんじゃないの」
「ち、違うわよ。病院。病院にいきますって、課長には言っておいたから」恵美は一瞬焦った。
「なんか、怪しいな。まあ、今日はこの辺で許してあげるけど、なにかあったら話しなさいよ」雅子はしっかりと恵美に釘をさした。どうにか、雅子の攻撃はしのげたものの、しばらくは、安心できそうもなかった。京子は一緒にいながらも、一言も話をしなかった。雅子みたいに詮索好きではないが、笑って見ているだけとは思いもしなかった。しかも、どこか落ち着きもなかったのだ。まるで一緒にいるのが苦痛のようにさえ見えたのだ。午後も何かと理由をつけては、部長が顔を出した。経理課では、徐々に噂が広がり始め、恵美は頭を抱えた。同僚達の目は、完璧に疑いの眼差しだった。とうとう恵美は参加を承諾した。明日もこの調子でやられたら、部長の愛人説まで、飛び出しそうな雰囲気だった。プロジェクト参加者には、特別に部屋が割り当てられていた為、恵美は一時的に部屋を移った。お陰で、皆の視線を浴びることはなくなったが、それだけでは安心できなかった。ほかの参加者だ。なぜ、恵美が選ばれたのか

は、皆知るよしもない。あきらかに、疑惑の目が恵美に注がれた。失敗だった。恵美はつくづく思ったが。後の祭りに奇跡は起こらなかった。

2章（3）

「貴方はどこの部署から来たの」なるべく目立たないようにはしていたが、所詮は無理な話だった。プロジェクトチームと言っても、この部屋にいるのは、僅かに１０人ほどで、とても身を隠せる場所などなかった。話しかけてきた女史は、恵美でも知っているプレゼンテーションの達人だった。そのほかにも、知った顔はあったが、恵美を知るものはいなかった。皆は一斉に注目している。恵美の答えを待っているのだ。ところが恵美には、自分のすることが分からなかった。ましてや、専務が利用したとはとても言えない。恵美は立ち上がってとりあえずは、頭を下げた。

「わ、私は・・・」恵美が言葉につまずいた時、丁度専務と部長が現れた。

「みんな、座ってくれたまえ」全員が部長に注目し、がたがたと席に着いた。専務が部屋の重苦しい雰囲気に気がつき、恵美をよんだ。

「みなさん、紹介しよう」恵美は身をかがめた。専務がどう紹介するのかが心配だったのだ。

「えー、皆さんも知っての通り、わが社の命運を掛けたプロジェクトには、莫大な予算を見越しています。特別に、各部署からエキスパートを募り、ここに終結したわけですが、まだ足りないと判断しました。それが、彼女です」全員がどよめきたった。

「あー、静かに。経費もだいぶかかるだろうと言うことで、このチーム専用の経理を増やしました。彼女を怒らすと、経費で落としてもらえなるぞ。まあ、仲良くやってください」全員のどよめきが収まった。と同時に、ため息が漏れた。緊張の場が、専務の一言で和らいだのだ。伊達に人の上には立っていないな、と恵美は感心した。皆の視線も、刺すような視線から、笑顔と期待の入り交ざった視線に変わっていった。恵美は、深く頭を下げて、自己紹介をしてから席に戻った。部長が話しはじめると、先ほどの女史が小声で話しか

けた。
「それならそうと言ってよ。さっきはごめんね。私は、下田孝子。よろしくね、領収書が溜まってるの。あとでお願い」そして、右手を差し出した。
「個人的な挨拶は後にしてくれんかね」部長に言われて、孝子はペロッと舌を出した。人は良さそうだ。
「それから、明日はの午後は、時間をおけておいてくれたまえ。顔合わせで出向くことになった」全員の顔に緊張と不安が浮かんだが、専務の一言でそれも解消された。
「単なる、顔合わせだ。緊張するな。美味しいものを食わすぞ」その後は、落ち着いた雰囲気の中、仕事が進んでいった。チームは10人だがそれぞれに部下がいるようで、恵美の元には大量の領収書が持ち込まれた。恵美は自分にも出来ることがあったのが嬉しく、一生懸命に電卓を弾き続けた。終業時、恵美が経理課に戻ると、一斉に注目を浴びた。課長は困った顔をしていた。どうやら、課長にはなにも知らされいないようだ。問いただされても、課長は何も言えなかった様だ。恵美は書類ケースから領収書の束を取り出し、課長の机に置いた。
「プロジェクトチームの領収書です。明日にでも決済をお願いします」恵美は、皆に聞こえるように話した。課長は、一瞬で状況を把握し、ごくろうさんと一言だけ発した。
「なに？経理の仕事なの？」やっぱり、雅子は聞き耳を立てていた。
「なんだと思ったの？私は、経理事務員よ」
「そうよね、ほかには出来ないものね」正直、恵美はむかついたが、頷くだけに留めた。
「なんか、安心したらお腹が空いちゃった。今日、三人でご飯に行かない？」何を安心したかは、おそらく恵美の想像通りだろう。しかし、ここで断われば、またも変な勘ぐりをしかねなかった。恵美は行くわと答えた。ところが、京子は用事があると、急いで帰宅準備を始めたのだ。そして逃げるように帰って行った。恵美も雅子も

呆気に取られてしまった。普段のおっとりした京子からは、想像もつかないほどの急ぎようだったのだ。
京子は二人に悪いと思いつつも、浩二との約束に心が弾んでいた。京子が会社を出たときには、浩二は既に待っていた。二人はぎこちない挨拶を交わしたあと、暗くなりかけの街へと消えていった。
雅子と二人の食事はつまらなかった。それよりも、京子の態度が理解できずに、恵美は考え込んでしまったのだ。京子とは何でも話せる関係だったが、さっきの京子はまるで別人だった。雅子はそんなことにはお構いなし。美味しいね～と、一人で料理を平らげていた。恵美はカラオケの誘いをどうにか断わり、家路についた。部屋に戻って一息ついてから、浩二に連絡を入れた。一応は、伝えておきたかったのだ。
「そう、じゃあ、一緒の仕事が出来ますね」意外なことに浩二は喜んでくれた。
「でも、私はただの経理ですから、一緒には無理だと思います」恵美は答えた。
「そうですか、残念です」がっかりする様子が恵美にも伝わったが、なぜ、そこまでがっかりするのかは、わからなかった。
「でも、次の約束は忘れないでくださいね」
「はい」恵美はにこやかに返事を返した。足の腫れも完全に引けて、痛みも治まっていた。恵美は次回の約束を考えながら、心地良い眠りへと引き込まれていった。

2章（4）

久しぶりのハイヒールに、恵美の気持ちは引き締まった。大丈夫足は痛くない。どんな形にしろ、新規のプロジェクトに参加したことで、こころなしかキャリアウーマンになった様な気がした。皆の誤解も解け、新規のチームにも受け入れらた様子で、自然と恵美の足どりは軽くなっていた。ただ1つ、京子のことは心に引っ掛かりが残った。

「どう、調子は」雅子が恵美の元を訪れた。

「まあまあよ」とは言ったものの、溜まった書類に目を回していた。

「はい、これね。それにしても、すごい経費の使いようね。ほかの部署だったら大変よ」雅子は、昨日の領収書の決済を持ってきた。

「何にもないところから、創めたみたいだからね」恵美はまだ手元に残る領収証などの束を見せた。

「ところで、京子、知ってる？」雅子は声を低くして尋ねた。

「えっ、なにを？」

「休みなの。無断みたい」どうやら、課長にも聞かれたようだ。

「そう・・。昨日から会ってないわ」京子への心配は、大きくなり始めていた。

「そうか。うん、じゃあね。頑張って」雅子を見ながら、昨日の京子を思い出していた。よそよそしい態度で逃げるように帰った京子。悩みでもあるのか？難題にぶつかっているのか？自分にも言えない事情があるのは恵美にもわかった。でもそう考えると、仲の良かった京子が急に遠い存在に思えた。昼食のとき、恵美は何度も京子に連絡したが、無情な答えが繰り返されただけだった。「電源が、入っていないか・・」5度目のメッセージを聞いたとき、孝子が恵美を迎えに来た。

「ほら、早く。もう出発するって」

「えっ？私もですか」恵美はてっきり、留守番だと思っていたのだ。

「専務の命令よ。全員ですって」図られた。専務の計略にしっかりと、乗せられていたのだ。午後は浩二たちの会社に向かい、顔合わせがあるのは知っていた。しかし恵美は、単なる経理で、顔合わせの必要などないと思っていたのだ。専務のニヤけた笑いが頭に浮かんだ。しかし、ここで断わったら、せっかく打ち解けた仲間から、疑惑の目が向けられるのはわかっていた。目立たぬようにするしかなかった。

玄関ホールには、専務をはじめ、部長と新規チームの皆が集まっていた。恵美が駆けつけると、専務と部長はかすかな笑みを浮かべていた。想像通りだ。恵美は諦めた。この状態で騒ぎ出すわけにもいかず、黙って皆のあとに続いた。社の前には、５台のタクシーが待っていて、皆は分乗して乗り込んだ。専務と部長は２人だけで乗り込むと、そのまま発進していった。あきらかに恵美を避けていた。

浩二たちの会社は、新しい立派な社屋が建っていた。４階あたりまでガラス張りの吹き抜けになったエントランスがあり、座り心地の良さそうな待合所が隅に設けてあった。恵美の会社よりも数段立派な作りだった。専務達が必死になるのも、なんとなく理解は出来るが、やり口には理解しようとも思わなかった。専務が受付に来訪理由を告げると、受付嬢は笑顔で対応した。恵美の会社にも受付はあるが、ほとんどは誰もいないのが現状で、歴然とした差があった。受付嬢が社内電話を持ち上げたとき、浩二が現れた。どうやら来訪者を送りに来たらしい。浩二は専務に気がつくと、両手で静止の合図を送ってきた。浩二は玄関先で来訪者と別れると、そのまま専務のほうにやってきた。恵美はすかさずみんなの後ろに引き下がった。もちろん浩二に見つからないためだった。

「どうも、よく来て頂けました。今、案内させますから」浩二は握手を求めた。

「すいません。お世話になります。皆、こちらが山田専務さんだ。今回のプロジェクトの総責任者だ」みんなは一斉に深くお辞儀をしたが、恵美は出遅れてしまい、浩二と目が合ってしまった。

「や～恵美さん」無視してくれればいいものを、浩二は親しげに恵美に挨拶を送った。
「どうも、お邪魔してます」ほかに言葉が浮かばなかった。
「こないかと思ってました」浩二の親しそうな口ぶりに、チームの皆が目を丸くしていた。
「先に行ってて下さい。すぐ行きますから」浩二はそう言って部下に合図を送った。案の定、専務と部長はニヤけた笑いを浮かべていた。みんなは、不思議そうに恵美を見ていた。
「どうぞ、こちらへ」浩二の秘書だろうか、若い男性に案内されてエレベーターに向かった。４基のエレベーターは全てが忙しそうに動いていた。そのうち１基が到着し、みなはそこに移動した。扉が開かれ乗り込もうとしたが、数人が降りてきた為、みんなは扉の前を開けた。浩二の秘書が緊張の表情で、深くお辞儀をした。
「副社長。お疲れ様です」浩一だ。恵美は身を隠すところを探した、・・・なかった。
みんなは驚き、一斉にお辞儀をした。どうやら専務も部長も、浩一のことは、知らない様だ。
「うん？そちらは？」秘書が答える前に、浩一は恵美に気が付いた。
「恵美さん！！どうしたの」その場の一同が驚きの表情で恵美を見た。それどころか、浩二の秘書、エントランスにいた全員までもが恵美に注目したのだ。なぜならば、福社長が自ら女性に声を掛けることなど、今まで一度も見たことが無かったからだ。

3章（1）

浩一と、浩二の会社は、いわゆる一族会社だ。しかし、社長の席は、外部の人間だった。馴れ合いを防ぐためにも外の空気が必要だ。と、会長職に座る父がスカウトした人材だった。元は、祖父が立ち上げた会社で、創業当時は小さな電気屋だった。電気屋といっても、当時はまだそれほど普及はされてなく、厳しい経営状態だった。それでも、庶民の間に電化製品が普及しだすと、それなりに忙しくなってきた。父の代で会社は大きく飛躍した。海外との提携を結び、国内大手とも取引が盛んに行われた。そして浩一、浩二のＩＴ戦略でも、大きな進展が得られたのだ。恵美は自分の勉強不足を痛感した。まさかここまで大きな会社とは思ってもいなかったのだ。

　みんなの視線を気にしながらも、会議室まで案内された。浩二の秘書がいなくなると同時に、恵美は一斉にみんなからの質問攻めにあった。

「ちょっと、どういう関係なの？」孝子だ。

「副社長とも面識があるのかね？」専務だ。

「どういう関係だね？」部長だ。そのほかにも、数々の質問が飛び交った。

「え～とですね。それは・・・。実は・・・・」恵美は困り果てた。なんと言っていいのか説明に困ってしまった。恵美が何も言えないのを見ると、攻撃は更に強まった。

「え～とですね。飲み、飲み仲間です」恵美は銀座での夜を思い出して答えた。

「へ？飲み仲間？」

「なに、それ？」みんなは呆気にとられていた。孝子などは、居酒屋で騒ぐ三人を想像したが、とても信じる気にはなれなかった。

「飲み仲間って何よ？三人で飲み歩いてるの？」孝子は食ってかかった。

「そうですよ」いつの間にか浩二が部屋にいた。
「さあ、どうぞ、席に付いてください。うちのメンバーも紹介します」浩二の後ろには、7人ほどが立っていた。みんなは慌てて席についた。
「恥かしいところを、面貌ありません」専務が頭を下げて謝った。
「いえ、こちらも不注意でした。知っていれば驚きもしませんが、ちょっとビックリしただけです」言葉は優しいが、目は専務を睨んでいた。恵美を利用しているのがばれたらしい。
「では、こちらから、自己紹介させます」浩二はそう言って、メンバーの紹介を始めた。一瞬、恵美に目を向け、笑顔で片目を瞑った。末席に座る恵美が、最後の自己紹介を始めた。
「え～、私の担当は経理です。それから・・・・」恵美が言葉に詰まったとき、浩二が立ち上がった。
「先ほどの話ですが。私と兄、そして恵美さんは、仲のいい飲み友達です。不思議に思われている方もいらっしゃると思いますが、それは事実です。深い意味はありません」浩二は恵美のメンバーに釘をさした。恵美は軽く頭をさげて着席した。その後は、プロジェクトの重要性、見込める販売シュア、将来性やアフターフォローなどの話が出たが、いたって穏やかな話し合いだった。夕刻になった時、全員で食事に出かけた。事前に専務が言っていたとおり、立派な料亭が用意されていた。女性、と言っても、孝子と恵美だけだが、男性のお酌に走り回った。せめてもと思い、恵美が始めたのだが、本心は浩二と話がしたかったのだ。浩二もそれを待っていたらしい。
「このあとどうですか？」浩二はグラスを持つ動作をした。
「皆さんは？」
「うちのメンバーは、ここで終わりです。でも、どうかな、私抜きで行くでしょうけどね。兄も合流する予定です」恵美は笑顔で頷いた。
「では、御一緒しますわ」仲が良さそうに話す二人を、メンバー全員が見つめていた。食事が終わったとき、浩二が席を立った。

「みなさん、次回からは、厳しい意見や指摘があると思いますが、ここにいる全員が仲間だ、と言うことを忘れないでください。衝突も、喧嘩もあるかも知れませんが、最終目的はプロジェクトの成功です。あらためてここで、乾杯をしたいと思います。音頭は、専務。お願いします」浩二の急な名指しに、恵美の専務は気を引き締め、大声で音頭をとった。

「専務、私はこのまま失礼します」帰り支度をする専務に恵美が言った。

「2次会もあるぞ」そう言ってからはっと気がついた。

「うむ、気をつけてな」小さな咳払いとともに、専務は頷いた。

「それでは」恵美はスタスタと店を出て行った。外では浩二が待っていた。

「大丈夫？無理しないで」浩二はわざと仲がいいところを見せたかったようだが、恵美は少々酔ったらしく浩二の腕にしがみついた。走り回ったせいだろう。

「大丈夫ですよ。行きましょ」楽しそうに立ち去る二人を、みんなは呆然と見送るだけだった。

3章（2）

「ごめん。仕事休ませちゃったね」

「ううん。いいの・・・」京子と恵美の元彼浩二は、まだホテルのベッドの中だった。どうしてこうなってしまったのか・・・。浩二と京子は食事をしながら話し合っていた。落ち込む浩二を励まそうと、その後にカラオケに行ったのだ。しかし、元々、浩二に好意を寄せていた京子は、次第に浩二に惹かれていった。恵美とは別れた。そう言い聞かせながら、京子は自分の行動を認めようと努力した。そのうち浩二も京子の魅力を感じ取り、互いに距離を近づけていったのだ。京子は思った。いまさら後悔はないが、恵美には多少後ろめたい気持ちが残った。

「お腹、空かないか」浩二は照れくさそうに尋ねた。浩二も相談に乗ってもらおうとは思っていたが、京子とこうなるとは、想像もしなかった。京子は恵美とは違いおしとやかだったが、昨夜の二人は、ただ求め合うだけの肉の塊と化し、浩二はその世界におぼれていった。酔ってはいた。話をしながらも、二人はかなりのお酒を喉に流し込んでいた。だが、今となっては、酒のせいにするつもりは毛頭なかった。

「そうね、ご飯、食べに行こう」京子がバスタオルを身体に巻いて、風呂場に向かった。バスタオルから覗く透き通るような白い肌が、ベッドに横たわり、京子を見つめる浩二の脳を刺激した。浩二は裸のまま京子の後を追いかけた。二人の影はガラス越しに重なり、やがて崩れるように影は床に転がった。

恵美と浩二が向かったのは、あの銀座の店だった。『来夢』恵美は初めて店の名前に気が付いた。夢が来る店。今の恵美には新鮮に思え、どこか気持ちが安らぐように感じた。恵美は浩二を見上げた。エレベーターの中には二人きり。恵美は急に心臓の鼓動が気になった。早く激しい。『浩二が好き?』恵美は自問してみた。『うん』

心の声ははっきりと答えた。
「いらっしょいませ」ママのドレスは今日も輝いていた。スパンコールのちりばめられたドレスは、店内の照明を一身に受け、光の欠片を解き放っていた。
「あら、いらっしゃい」ジュンの赤いドレスも光っていた。浩一は既に来ていた。恵美はお辞儀をしながら、浩一の待つ席へと向かった。
「やあ、恵美さん、ひ、昼間はすいませんでした。き、気が付きませんで」浩一の照れ笑いを見た時、恵美の心臓は、さらに激しく鳴り響いた。『えっ、どういうこと』『わかるでしょ』心の声はそう答えた。その途端、恵美の顔は真赤に高潮した。恵美は二人が好き。でも、浩一に対する気持ちのほうが強いようだ。恵美は浩二と浩一の間に座らされた。浩二はそんな恵美に気が付いたのか、ジュンを隣りに呼び寄せ、楽しそうにじゃれ合い始めた。恵美は乾杯の後も、うつむき加減だったが、浩一は優しく見つめるだけだった。しかし、ジュンの一言で、雰囲気は一転した。
「恵美ちゃん、今、化粧品持ってる？」
「は、はい」なぜとは思ったが、恵美は素直に答えた
「ちょっと貸して」そう言うと、恵美の化粧バックを覗き込んだ。
「結構、いいもの持ってるわね。おいで」ジュンは恵美に手を差し出した。恵美は理由もわからずに、その手を握った。どこかに連れて行くらしい。ぐっと引っ張り、恵美を立たせた。
「どこ行くんだ」浩二はジュンに尋ねた。
「へへ、お楽しみ」ジュンは恵美を化粧室の連れ込んだ。化粧室といってもかなり広い。４，５人入っても大丈夫なほどだった。浩一と浩二は互いに見つめ、首を振った。男には理解出来ない世界らしい。１０分ほど経ったとき、二人が戻ってきた。
「ほら、見て。綺麗でしょ」ジュンは恵美に化粧を施したのだ。恵美も、鏡に写った自分が信じられなかったが、浩一と浩二の驚きの顔から、まんざらではないのかもと、思い始めた。

「恵美さん、すごく綺麗です」浩一の顔も真赤だった。どうやら、浩一も恵美に気があるようだ。浩二は微笑ましそうに二人を見るだけだった。

「恵美さんは、元がいいんだから、もっと、お洒落しなくちゃ」ジュンも自分の作品を見るかのように、満足そうな笑顔を浮かべていた。恵美は浩一に寄り添い、ジュンは浩二に寄り添い、ピアノの弾き語りに耳を澄ましていた。懐かしいラブソングだが、恵美には新しく聞こえた。あたかも新しい人生が始まったような想いがしたのだ。実際のところ、たったの数日間で、恵美の人生は大きく変貌を遂げようとしていた。

3章（3）

翌日からの恵美は別人だった。精力的に仕事に取り組み、みんなの信頼を得ていった。理由の第一は、浩一兄弟との関係だとは恵美にもわかっていたが、誰もその事には触れなかった。専務の一声があったのは間違い無さそうだ。短期とは言え、プロジェクトの完了まではどのくらいの期間が掛かるのかは解らない。無事終了すれば恵美は経理課に戻るだろうと、昼食だけは雅子や京子と摂るようにしていた。

京子の無断欠勤は1日だけだったが、理由については一言も話さなかった。雅子はしつこく問い詰めたが、京子の口は堅かった。恵美は平静を貫いた。京子ならば、問題を抱えて困っていれば、話してくると信じていたのだ。しかし、京子はいつも通りに接していたが、恵美にはどこか他人行儀に感じられた。プロジェクトも、本格的に始動を始めた。和やかだったチームにも、程よい緊張感が生まれ、活発な意見が交わされるようになってきた。そうなると、残業時間もおのずと増えだした。半分以上はサービス残業。給料には反映されない残業だが、恵美もなるべくみんなと一緒に残った。それでも浩一と浩二との約束がある日は急いで帰宅をしたが、誰一人文句を言うものはいなかった。浩一たちとの約束の日は、恵美の化粧が違うのだ。ジュンに教わったように化粧をするため、どんなに鈍い男でもデートの日だと気が付いた。慌しい中、顔合わせの日からは、2週間が過ぎようとしていた。

「ちょっと、休憩しましょうか」孝子の声で、みんなは手を休めた。

「あっ、私、お茶入れてきます」恵美は急いで立ち上がった。午後7時。ほとんど毎日が残業だった。

「どうだ、腹は空かないか。出前でもとるか」その声は、残業の延長を意味していた。

「部長のおごりですか」どこからとも無く声が響いた。

「たまにはいいだろう。好きなもの選べ」部長は吐き捨てるように言ったが、その顔は笑っていた。何件かの出前メニューを広げ、みんなが覗き込んでいるところへ、恵美がお茶を持って戻ってきた。
「すまないね」部長はニコリと笑顔を向けた。
「恵美君も選びなさい」
「いいえ、私は・・・」恵美は断わろうとしたが、部長の後ろの光景に目を奪われた。丁度、向かいの建物から、京子が出てくるところだった。こちらは４階。京子は気づきもしない。そして、その横には・・・浩二。恵美の元彼浩二の姿があった。かなり離れてはいるが、浩二の羽織るジャンパーは、恵美が買ってあげたものだった。そして肩にはギター。疑いの余地は無かった。
「どうしたんだ、恵美君」部長は呆然とたたずむ恵美に尋ねた。声を掛けられ、恵美は部長に言った。
「今日は上がってもいいですか。急な用事を思い出しまして・・・」
「それは、構わないが・・・。なにか問題・・・」部長の言葉を最後まで聞かずに、恵美はお辞儀をして帰り支度を始めた。上着も羽織らずにバックを持つと、恵美は足早に部屋を出て行った。『何で二人が』
恵美は走りながら思った。『なぜ、京子は言わないの』恵美は無性に腹がたった。付き合っていることにではない。京子が秘密にしていたことが許せなかったのだ。そう思うと涙さえこぼれそうになった。恵美が建物を出たときには、二人の姿はどこにも見当たらなかった。恵美は大きく息を吸ってから歩き出した。ところが２歩目でつまずいた。またもヒールを駄目にしたようだ。内緒にされると、影で悪口を言われているのでは、と思えて仕方が無い。『ちゃんと話してくれれば、応援したのに・・・』恵美は思った。恵美は一人家路についた。ヒールがむかつく。家に着くと早速恵美は京子に電話を掛けた。電源を切っているらしく、何度かけても繋がらなかった。『そこまで深い関係なの』恵美の想像は大きく膨れ始め、巨大なスクリーンが頭に浮かんだ。二人がホテルに入る場面。仲良くシ

ャワーを浴びる場面。そして二人が絡まりあう場面。想像の輪は歯止めが利かなかった。終わるとすぐに煙草を吸った浩二。その浩二が京子に恵美の癖を話しているのだ。『恵美は結構声がでかくてさ～』『ここを刺激すると、すぐにいくんだぜ』『それと、必ずシーツを掴むのさ』浩二は煙草を咥え、恵美の痴態を次々に話し始めた。京子はそれを聞いて笑っていた。全ては恵美の想像に過ぎない。しかし、京子が秘密にしたことで、恵美の想像は果てしなく広がってしまった。恵美はいつの間にか泣いていた。大粒の涙が頬を伝い、嗚咽をまじえて泣いていた。『なぜ。なぜなの』恵美はそのまま泣き崩れた。

その頃、京子と浩二は食事をしていた。浩二はビールを飲んでいたが、京子は飲み物を頼まなかった。浩二との関係をはっきりとさせ、恵美に対してどう話すかを聞きたかったからだ。

「ねえ、私達、どうなるの」京子は浩二に尋ねた。

「どうって、京子はどうしたいの」京子は浩二の答えに少々がっかりとした。

「私は、浩二が好きになったの。浩二の気持ちが知りたいわ」

「俺か？う～ん、嫌いじゃないけど。まだ解らないよ」浩二は答えをはぐらかした。

「じゃあ、やっぱりただの遊びなんだ」京子は呟いた。

「いや、そうじゃなくて。ほ、ほら、恵美のこともはっきりしてないし・・・」恵美に聞いていた通り、優柔不断な浩二の答えに、京子は自分の馬鹿さ加減を呪った。

「まだ、解らないの。恵美はもう浩二の事なんか、何も考えていないのよ」京子の言葉は激しかったが、浩二はそれでもはっきりとはしなかった。

「そうだとしても、まだ、分かれるとも聞いてないし・・・」最後は声にはならなかったが、京子はスプーンを投げつけ席を立ち、バッグを掴むとそのまま店を出て行った。『浩二なんて嫌い』京子は呟いた。しかし、心のどこかでは『追いかけてくるわ』そう言って

いた。京子は歩く速度を遅くし、後ろを振り返った。浩二の姿はない。『きっとレジが混んでるのよ』心の声が言った。更に歩速を落とし、京子は振り返った。浩二の姿はどこにも無かった。涙がこぼれるのを必死に押さえ、５，６歩歩いて振り返った。結局浩二は後を追いかけては来なかった。涙は京子の意思とは無関係に流れ始めた。流しのタクシーを捕まえ、京子は夜の街から姿

3章（4）

翌日、始業後まもなく、雅子が恵美の元へ飛んできた。
「ねえ、聞いた？」雅子はこれでもかと、目を見開いた。
「えっ？何を」恵美は答えた。
「なにって・・。どうしたの目が真赤よ」雅子は恵美の顔を覗き込み、眉間にしわを寄せた。
「うん、ちょっと・・・。朝方まで本を読んでたから・・・」咄嗟の返事だった。
「ならいいけど・・・。そうそう、京子が辞めちゃったのよ」雅子は恵美の机を2，3度叩いた。
「うそ？何で？」そうは言ったが、恵美にはその理由が思い浮かんだ。『浩二だ』それしか考えられなかった。昨夜のことを見ていなければ、想像もしなかっただろう。しかし恵美は見てしまったのだ。そして、浩二の性格もある程度は把握している恵美だからこそ、直感で思い浮かんだのだ。
「わからないわよ～、今朝、課長から聞いただけだもの」
「携帯は？」恵美は雅子に言った。
「まだだけど、休み時間に掛けてみるわ」
「うん、私も暇をみて掛けるわ」雅子の手前そう言ったが、おそらく京子は電話には出ないだろうと思った。電話を掛けて出るくらいならば、やめる前に、京子から連絡が来るはずだと思ったのだ。
「じゃあ、頼むね」雅子はそう言って戻っていった。恵美は１０時になるのを待った。午前の休憩時間だ。京子に電話を掛けるつもりは無い。浩二に掛けるつもりでいた。京子を追いやったのは、浩二しか考えられなかったからだ。１０時５分前。恵美は携帯を持って席を立った。屋上に出ると、既に何人かが煙草を吸ったり、雑談を交わしていた。隅の手摺に寄りかかり、恵美は浩二の番号をプッシュした。浩二のアドレスは消したが、番号はしっかりと覚えていた。

2年。長いようで短く感じた。
「もしもし」浩二の声は懐かしく思えたが、同時に平然と電話に出る浩二に、多少なりの怒りが起きた。
「浩二、一体どういうこと？」
「え？あ？恵美か？うるさくて聞こえない。ちょっと待ってて」バンドの練習中らしく、電話越しにも騒音としか思えない音楽が聞こえた。表に出たのだろうか、次の言葉は静かなところから聞こえた。
「なんだよ」あきらかに、すねた話方だった。
「京子と何があったの？」恵美は冷静に尋ねた。
「えっ？なにって、なんだよ」動揺は隠し切れない。
「見たのよ。二人を」怒りを抑え、恵美は尋ねた。
「見たって？・・・・。だ、だからなんだよ」浩二の息が荒くなった。
「恵美には関係ないだろ！！俺は恵美に振られたらしいから」京子から聞いたのだろう。ふてぶてしい言い方に怒りは大きくなるばかりだった。しかし、今はそんなことなどどうでも良かった。
「京子。会社辞めたわよ。あんた以外に考えられないわ。何をしたのよ」恵美の声も荒くなってきた。
「えっ、ま、マジかよ。やべえ・・・」浩二は心底、驚いている様子だった。
「京子は、私と違って繊細なの。傷つきやすいのよ。何かあったら、あんたのせいだからね」恵美は冷たく言い放った。浩二の狼狽ぶりが、手に取るようにわかった。
「と、とにかく、俺からも連絡してみる」浩二は慌てて電話を切った。恵美の目には涙が浮かんできた。浩二が京子を弄んだのは、間違い無さそうだ。京子はそれを話せずに、ずっと悩んでいたんだろう。あの、よそよそしさがその証拠だと恵美は思った。昨日の京子に対する怒りは、微塵も感じなかった。恵美はそのまま、浩一に連絡を入れた。
「珍しいですね。どうしました？」優しい声が恵美の心を和ませた。

「浩一さんでも、浩二さんでもいいんです。お名前を貸してください。お願いします」恵美は思わず携帯を握りながら頭を下げた。
「えっ？どうしたんですか」浩一は、言葉の意味が理解出来なかった。
「どうしても早退したいんですが、仲間の手前もあるし・・・」恵美は言葉に詰まった。とんでもない電話を掛けたと気づいたのだ。相手の迷惑を少しも考えていないことに気がついたのだ。
「いいですよ」ところが浩一はなんの疑いも持たずに答えた。
「すいません、わがままを言って・・・、じゃあ、電話で私を呼び出してください」迷惑とは思いながらも、京子のことが心配で、浩一の優しさに甘えることにした。
「ええ、構いませんよ。でも理由を聞いても差し支えないかな？」恵美は一瞬戸惑ったが、京子のことを差し障り無く伝えた。元彼、浩二のことは話には入れなかった。
「う～ん、心配ですね」浩一はしばらく考えてから、話を続けた。
「いいでしょ。迎えに行きます。連れ出したほうが真実味があるでしょうから」浩一はやけに喜んでいるようだった。浩二との定期のキセルと同じような遊び心かも知れない。
「いえ、でも迷惑が・・・」しかし恵美は戸惑った。
「構いません。どうせ今日は暇だし、お友達も心配ですから。一緒に行きますよ」
「変な噂が立つかも・・」
「恵美さんとの噂なら、僕は大歓迎です。３０分で迎えに行きます」浩一は嬉しそうに電話を切った。浩一の優しさはしっかりと恵美の心に届いた。暇だと言うのは嘘だろう。恵美にはそう思えて仕方なかった。それでも恵美には浩一の言葉が嬉しく、浩一への愛が、次第に大きくなるのを感じ取った。約束通り、３０分後に浩一は恵美を迎えに来た。仕事の打ち合わせ、とは名目で伝えたが、誰一人として信じてはいない。浩一にはそんなことは解り切っていた。しかし、浩一は躊躇することなく平然と恵美を連れ出した。その後は消

えた二人のことで、部屋全体の騒ぎは収まらなかった。

4章（1）

浩一は、流しのタクシーで来ていた。会社専用のハイヤーを使わなかったところに、浩一の京子に対する配慮が窺えた。会社のハイヤーを使えば、会社と無関係な京子の住まいが知れてしまうからだ。

「どちらに行きますか？」浩一はタクシーに乗り込むなり、恵美に尋ねた。

「友達の家に行きたいんです。居るかも知れないし・・・」浩一が来る前に、恵美は京子の住所を総務課から聞き出していた。同僚が病欠しているため見舞いに行きたい、と伝えたのだ。総務には、京子の退職願はまだ届いてないらしく、同課ということで恵美に丁寧に教えてくれたのだ。渡された紙には、目黒区八雲とあった。恵美の会社からはそう遠くは無いが、タクシーだとかなり料金がかかりそうだった。しかし浩一は、恵美から受け取った紙を、そのまま運転手に渡した。

「高速を使ってください」浩一はそう言って、シートに深く座りなおした。

「お仕事いいんですか？」恵美は尋ねた。

「大丈夫です。浩二もいるし、優秀なスタッフが揃ってますから、僕なんか、居ても居なくても同じなんですよ」浩一は恵美の心配をよそに、満面の笑顔で答えた。確かに、浩一の言うことには間違いはない。

ただ最終決断の時には、浩一の洞察力、統率力、先見の明などの能力に頼らざるを得なかった。それだけの能力があったお陰で会社は大きくなったが、同時に浩一の責任は非常に重かった。恵美はそれらを理解しながらも、屈託無く笑う浩一にあらためて尊敬の眼差しを向けた。首都高環状線から、首都高渋谷線に

針路変更し、三軒茶屋で高速を降りた。午前中のせいか、国道２４６号線は比較的空いていた。環状７号線から目黒通りに折れ、タク

シーは都立大学の校舎前を通り過ぎたところで止まった。
「ここいらあたりなんですが、アパート名とかわかりますか」タクシーの運転手が浩一に尋ねた。
「コーポ〇〇です」浩一がそう伝えると、運転手はナビゲーションのスイッチを入れた。
「こんなもの、普段は使いませんが、細かいところはね」運転手はさも面倒臭そうに言った。タクシーの運転は任してくれ。でも、機械は苦手で・・・。運転手の白髪交じりの頭が、そう呟いているように思えた。しばらく機械と格闘していたが、やがて場所を確認できたのか、タクシーは速度を速めた。
「ここの２０２号室です」２人が降り立ったのは、閑静な住宅地にたたずむ小さな建物だった。２階建てで全部で６戸しかないが、緑に包まれ居心地は良さそうに思えた。広めの階段を上ると、目の前が２０２号室だった。恵美が何度かドアホーンを鳴らしたが、中からの返事は無かった。見上げると、電気メーターはゆっくりと回っていた。ドアに耳をつけても、中の様子はわいかった。恵美は不吉な想像をかなぐり捨てようとしたが、どうしても変な方に考えてしまい、自分自身にイラついていた。恵美は京子との会話を思い出した。『うちは環境はいいけど、大家さんがとなりなの。ちょっと気になるの』たしか、そう言っていた。その事を伝えると、浩一が隣りの大家のところに行ってくれた。しばらくして浩一が1人の女性を連れて戻ってきた。
「そんな事情なら開けますが、お二人は入らないでくださいね」年配の女性が合鍵で部屋を開けてくれた。どんな事情を話したかは知れないが、女性は恐る恐る部屋に踏み込んだ。
「誰も居ませんよ」女性はホットしたようにそう言って部屋を出ようとしたとき、浩一は恵美の手を引っ張って中に入った。
「ちょっと、困りますよ」年配の女性は慌てて止めようとした。
「すいません、ちょっとだけ」浩一は強引に部屋に入っていった。部屋はきちんと整頓されていた。綺麗好きの京子らしい部屋で、幾

つかのぬいぐるみも飾ってあった。浩一も恵美も、部屋を荒らす気配が無いのをみて、年配の女性は安心したようだ。
「これは？」浩一が1枚の紙を恵美に見せた。食卓テーブルに置かれていたメモだった。
「電話番号だけど、わからないわ」恵美は見覚えの無い番号に首を傾けた。市外局番は、首都圏ではないことを物語っていたが、どこかは見当もつかなかった。ほかに目ぼしい手掛かりも無く、2人は京子のアパートをあとにした。ここからだと、大きな通りは駒沢通りの方が近く、タクシーを捕まえる為に2人は歩き出した。しかしタクシーはなかなか来なかった。浩一は手提げ鞄からモバイルコンピュータを取り出し、先ほどの番号を入力した。小さな画面には、すぐにその番号の情報が写しだされた。
「ここ知ってる？」浩一に見せられた場所は、恵美にも見覚えがあった。しかもその答えはすぐに見つかった。去年、雅子と京子と3人で訪れた温泉旅館の案内ページだった。恵美は携帯を取り出し、旅館に電話を掛けた。京子を装い、予約の確認をしたのだ。『はい、本日承っております。お気をつけていらしてください』どうやら京子の行き先がつかめたようだった。『でも、なぜ？』恵美の頭を不安がよぎった・・・。

4章（2）

ようやく通りかかったタクシーに、恵美と浩一は慌てて乗り込んだ。恵美は乗り込むやいなや、先ほどの旅館に電話を掛けた。恵美は京子を追うことに心を決めたのだ。幸いに平日とあって部屋は空いていた。恵美は自分の予約も入れたのだ。浩一は、電話のやり取りを聞いてはいたが、声は掛けれずにいた。本当ならば一緒に行きたいのだが、それは恵美との外泊を意味していた。友達の京子のことも心配だが、浩一は結果的には口をつぐんでしまった。真っ直ぐに向かうことも出来たが、女一人で荷物も無ければ、不審に思われる。恵美は一度アパートに戻ることにした。

「今日はほんとにありがとうございました」アパートが近づいたとき、恵美は浩一に頭を下げた。

「とんでもない、気にしないでください。それより、お友達と会えればいいですね」浩一は出来る限り優しく答えた。普段でも優しい声が、恵美の心をいたわる様に包み込んだ。

「ええ、馬鹿なことをする前に・・・」恵美はつい考えが口から出てしまった。

「あっ、すいません。変なことを・・・」京子の性格からいえば、どちらとも言えないように感じたのだ。京子が雅子みたいな性格ならば、恵美もここまでは心配しなかっただろう。

「いえ、心配な気持ちは解ります。気をつけて行って下さい。何か、あれば連絡をください」浩一は付いて行きたい気持ちを抑え、恵美を励ました。まるで、親鳥が巣立つわが子を見守るように、浩一は恵美に寂しげな視線を投げかけた。

「大丈夫です。ありがとうございました」恵美は深く頭を下げ、アパート前でタクシーを下りて行った。

少しの着替えと化粧道具をバックに押し込み、恵美はすぐに部屋を出た。旅館は熱海。横浜まで行けば、特急電車に乗れるはずだっ

た。品川駅でも乗れるかも知れない。しかし、知らない工程で失敗はしたくなかった。あの時も京子の合流に合わせて、横浜駅で待ち合わせをしたのだ。今から向かえば2時間とはかからない。夕刻には旅館につくことが出来そうだ。恵美の心配は少し薄らいだ。仮に変なことをするにしても、明るい時間には行動を起こさないと思ったのだ。暗くなるまでに、どうしても京子と合う必要があった。横浜発、スーパービュー踊り子7号、１５時５１分発。京子はその切符を買った。到着予定は１６時３６分。旅館に着くのは夕方の5時前。どうにか暗くなる前に着きそうだった。座席に座って落ち着くと、恵美は携帯をとり出した。乗客はほとんどいない。デッキに向かおうとしたが、恵美はそのまま雅子の連絡を入れた。

「え～、マジ？」雅子の声は電話口でもよく響いた。

「しーっ、静かに。もう・・・。で、これから行ってみる事にしたの」

「そう、会えればいいけど・・。何かわかったら、連絡ちょうだい」雅子も雅子なりに心配しているようだった。恵美は連絡を入れる約束をしてから、雅子との電話を切った。恵美はそのまま浩二に連絡を入れた。元彼の浩二だ。呆れたことに、浩二はバンド練習の真っ最中で、ばつが悪そうに答えた。

「悪いな。頼むよ。一緒に行きたいけど、バンドも仕事も休めないからさ～」浩二に期待はしていなかった。それでも、浩二の態度は恵美の怒りを爆発させるには十分すぎた。

「どうせ、探してもいないんでしょ。2度と京子に近づかないで。もう沢山」恵美は携帯を投げつけそうになった。今の声で、数人の乗客が恵美に振り返った。恵美は慌ててデッキに向かい駆け出した。涙がこぼれて来たのだ。こんな男と付き合っていた自分が情けなく、京子の心配からも涙が溢れたのだ。デッキの扉に寄りかかりながら、恵美は必死に嗚咽を堪えた。

「もしもし」いつの間にか恵美は、浩一の番号を押していた。

「もしもし、恵美さん？恵美さん大丈夫？」携帯からは浩一の声が

優しく流れた。
「こ、浩一さん・・・」恵美は涙を堪えたが、言葉は詰まってしまった。自分が京子に会っても、救う自身すらなくなっていたのだ。今は、誰かにすがりつきたい気持ちで一杯だった。
「恵美さん、恵美さん」
「お願い、来て」無駄な願いとは思いつつも、そう言わずにはいられなかった。ところが、浩一の答えは、恵美を驚かすには有り余った
「わかりました。そこにいてください」恵美は言葉の意味が判らなかった。まさか、今から追ってくるのかと考えもしたが、そこで待てとはどう言う事？恵美は思わず携帯を見つめた。耳を澄ますと、どうやら浩一も電車に乗っているようだ。まさかと思いながらも涙を拭き、まわりをみると後ろの車両に浩一の姿があった。通路に立って恵美に笑顔を向けていたのだ。恵美の目からは大粒の涙が流れ出した。喜びと安心感から来るもので、不快感は微塵も感じなかった。浩一がデッキに来ると、思わず恵美は抱きつき、声を出して泣き出した。
「すいません、心配で付いてきました。何事も無ければ帰るつもりでした」恵美は浩一の胸で、何度も首を振った。やっと自分の帰る場所を見つけたように思えたのだ。その後二人は座席で寄り添い、一言も言葉は交わさなかった。浩一も何も聞かない。恵美も何も話さない。それでも2人の心は1つになっていた。落ち着きを取り戻し、熱海に着く頃には恵美の涙もすっかりと消えてい。

4章（3）

季節柄、日の光は薄れ始めていた。駅前のタクシー乗り場から、恵美と浩一はタクシーに乗り込んだ。行き先を告げると、僅かに運転手は喜んだ。それもそのはず。近場の温泉場に比べると行き先はかなり遠い。長距離とまでは行かないが、市内を流すよりは売り上げにつながるからだった。国道１３５号を海沿いに南下する。熱海城は山の中腹で夕日を一身に浴び、壁面を朱に染めていた。見える海面は穏やかで、こちらも日の光を受け無数のきらめきを放っていた。熱海城を越え、道は急激に海に近づいた。錦ヶ浦。恵美の脳裏に不安がよぎる。ここは、自殺の名所でもあるのだ。

「すいません、ちょっと止めてください」恵美が言うと、タクシーは無料駐車場へと滑り込んだ。よくあることなのだろう。運転手は心得たとばかりに微笑んだ。もしかしたら京子がいるのでは？そう思ったのだ。駐車場の手摺のむこうはすぐに海。しかも断崖絶壁の海岸線だ。恵美は恐る恐る覗き込んだ。２０メートル。いや、もっと、３０メートルくらいだろうか、眼下では波が絶えず絶壁に打ち寄せ、白く泡立っていた。髪は吹き上げる風で激しく乱れていたが、恵美はただじっと打ち寄せる波を見つめ、そこに立ち尽くしていた。引き込まれそうな不思議な気持ちを抑え、恵美はゆっくりと歩き出した。髪を押さえながらあたりを見回す。場内には４，５台の車と２組のカップル。家族連れに若い集団。女一人の京子は見当たらなかった。恵美は小さく胸を撫で下ろし、浩一に向かって僅かに微笑んだ。浩一はその一部始終をタクシーの脇に立ち、黙って見守るだけだった。恵美はぶつかる様に浩一の胸に額を押し当て、静かに深呼吸を繰り返した。浩一はそんな恵美の肩を優しく、そして呼吸の邪魔にならない程度に軽く抱きしめた。タクシーは更に南下していった。左手には誰もいない海水浴場がゆっくりと通り過ぎる。恵美は浩一の腕を抱きしめた。やがてタクシーは山に向かって上り始め

た。くねる道は、徐々にその高度を上げていった。５時１０分。タクシーが旅館の玄関に滑る込むと、３人の女中さんが出迎えてくれた。

「いらっしゃいませ。遠いところありがとうございます」そう言って招きいれると、恵美と浩一をフロント手前のゆったりとしたソファーに案内した。すぐにお茶と小さな和菓子が出された。浩一は軽く頭を下げ、予約の旨を伝えた。熱海に着く前に、電車の中から追加の予約は取っておいたのだ。

「はいはい、承っております」そう言って、フロントから宿帳を持ってきた。

「それでは、こちらのほうに、御記入をお願いできますか」浩一は宿帳に記入しながら一瞬戸惑った。同伴者の記入欄だ。浩一は自分の名前と、ただ、恵美とだけ記入した。普通に見れば夫婦に見えるだろう。だが、恵美のフルネームを記入することには抵抗があった。女中さんは顔色一つ変えずに、宿帳を受け取るとフロントに戻っていった。熱いお茶は、冷えた身体をゆっくりと温めてくれた。駐車場で冷えたのか芯から暖かさが広がった。やがて女中さんは１つの鍵を持ってきた。

「よろしければ御案内いたします」恵美は少し身体を乗り出し、女中に尋ねた。

「すいません。友達と待ち合わせなんですが、もう着いていますか」そう言って京子の名を告げた。

「女性お一人のお客様ですね、少々お待ちください」どうやらこの女中さんは見ていないらしい。フロントに戻り、すぐに引き返してきた。

「はい、予約は承っておりますが、まだお着きでは無いようですよ」

「そうですか・・・」京子はどこかに寄り道でもしているらしい。

「お着きになりましたら、お部屋の方にご連絡を差し上げます。それまでごゆっくりとどうぞ」女中さんはそう言ってニコリと笑った。

「お願いします」恵美は軽く頭を下げた。２人が通された部屋は離

れの立派な部屋だった。どうやら浩一の手配のに依るものだった。
「お夕食は何時頃がよろしいでしょうか」女中は座卓にお茶を並べながら、浩一に尋ねた。浩一は恵美を見てから尋ねた。
「友達の分もこちらで一緒に食事が出来ますか」恵美の気持ちを察して尋ねた。
「ええ、大丈夫ですが」女中さんは嫌な顔一つ見せない。
「では、とりあえず、7時頃でお願いします」二人が通された部屋は、3人どころか6人でも泊まれそうな広さがあった。3人分の食事など雑作も無いことだった。浩一が小さく折った紙幣を渡すと、女中さんは深々と頭を下げて部屋を出て行った。恵美は立ち上がり窓に近づいた。山腹に建つ旅館の窓からは、海も遠くまで見渡せた。
『京子・・・』恵美は呟いた。いつの間にか浩一も恵美の後ろに立ち、一緒に海を眺めていた。浩一は無駄な話は一切せずに常に恵美の後ろにいた。つまずき転びそうになる恵美を、いつでも助けられるように、付かず離れず、守っているようだった。恵美はゆっくり振り返り、浩一の胸に顔を埋めた。そして恵美は静かに浩一を見上げ、眠るように目を閉じた。夕日を浴びた浩一の顔がゆっくりと近づき、無言のまま恵美の唇に重ねられた。今にも溶けだしそうな感覚に包まれ、恵美の身体は静かに崩れた。

4章（4）

京子の頭は真っ白とまではいかないが、霧に包まれたようだった。アパートを出た後の記憶はほとんどない。手探りで歩き続け、手に触れるものに引き寄せられ、自分の意志とは関係なく行動しているようだった。京子が旅館に着いたのは6時を回っていた。『熱海に行かなくては』そんな思いだけで辿り着いたのだ。京子を出迎えた女中さんは、恵美たちを応対した女中だった。『驚かせたい』と、恵美たちの到着は内緒にされていた。しかし、女中はいくばくかの不安を感じた。それほどまでに、京子の様子は異様だったのだ。青白い顔で言葉少なく、発した声も消え入りそうなのだ。もしも恵美たちがいなければ、それこそ警察に通報するところだった。自殺志願者に共通する何かを女中は感じ取っていた。京子を部屋に案内しお茶を入れている間も、京子は黙ってソファーに座り外の景色をじっと眺めるだけだった。部屋を出ると女中は慌ててフロントに戻り、浩一たちの部屋に連絡を入れた。

「はい、たった今お着きです。でも、ご様子が・・・」女中は言葉をにごした。

「わかりました、ありがとうございます。部屋はどこですか」浩一はそれに気づき、言葉を早めた。

「わかりにくいでしょう、御案内いたします」この旅館には部屋番号はない。花の名や山の名、伊豆名所の名が付けられているため、不慣れな人には探しづらいのだ。

「では、フロントまで行きます。待っていてください」浩一は受話器を置くと恵美を見た。それまでの恵美の顔は不安で一杯だったが、とりあえずは京子の到着で安心したようだった。

「はい、お待ちしております」女中は安心したが、京子の様子は気になった。長い女中経験の間には、夕刻に会ったお客が翌朝遺体となって発見されたり、いまだに行方知れずのお客をその目で何度も

見てきたのだ。そのお客達の生前の様子は、今しがた案内した京子と似たりよったりだった。恵美と浩一がフロントに現れると、女中は急いで飛び出し足早に二人を案内した。

「失礼します」そう言って京子の部屋に入ったが。京子の姿は部屋には無かった。

「お風呂ですかね」そう言って部屋を見回したが、京子が持っていた小さな鞄すら見当たらなかった。

「あれ見て」浩一に言われるままに座卓を見た恵美は、引き付けられる様に部屋へと踏み入った。そこには1枚のハンカチが置かれていた。小さくたたまれた白いハンカチには、赤と黄色の花の刺繍が施され、いかにも京子が好みそうな柄だった。恵美はあらためて部屋を見回した。荷物らしきものは1つも無い。出されたお茶さえ、手付かずのまま冷め切っていた。なぜだか寒気を感じた。恵美はハンカチを取り上げた。ひらりと開かれたハンカチには、口紅らしきものが付着していたがどこか不自然だった。恵美は浩一にハンカチを見せた。浩一はハンカチを手に取ると、赤いシミに鼻を近づけた。隅の方に僅かに残る赤色は口紅ではなかった。血だ。京子のものかは分からないが、その赤いシミは確かに血だった。恵美と浩一は部屋を飛び出した。女中も浴場を見ると言って走り出した。

玄関から飛び出すと、表はすっかり闇に包まれていた。玄関前から見える範囲に京子の姿は無い。旅館の敷地は広い。池もあれば裏山に通じる道もある。以前来たときに、3人で散策したのを思い出した。

「ここで待ってて」そう言うと、浩一は建物の裏手に向かい走り出した。玄関前でオロオロする恵美のところへ、女中も戻ってきた。しかし、女中は静かに首を振るだけだった。やがて浩一が反対側から戻ってきた。どうやら敷地を1周したらしかったが、息を切らせながらやはり首を振るだけだった。女中はフロントに戻ると、車のキーを差し出した。

「運転出来ますよね」浩一はしっかりと頷いた。

「裏にトラックがあります」女中の考えも恵美と同じのようだ。恵美もずっとあの名所が気になっていたのだ。あの、自殺の名所が・・・・。曲がりくねった坂道を、二人を乗せた車は勢いよく下って行った。国道１３５号の交通量は少なかった。熱海方面に向かい走り出したが、浩一は急に速度を落とした。

「どうしたの」恵美の問いかけに、浩一はダッシュボードの時計を指差し答えた。

「まだ３０分足らずです。徒歩であそこまでは行けないでしょう」浩一の言うとおりだった。京子は運転免許を持っていない。レンタカーにしろ車で来ることは無いはずだ。徒歩であるならば、到底３０分であの名所までは歩けないだろう。恵美も浩一の意見に賛成だった。ならば、あそこに向かいまだ歩いているか、どこかほかに向かったとしか考えられなかった。浩一と恵美は京子の姿をさがして、ゆっくりと走る車から歩道に目を凝らした。時折後続車が激しくクラクションを鳴らして、恵美たちの車を追い越した。やがて、右手には人気の無い海水浴場が見えてきた。

「あそこ・・・」恵美はなんとなくその場所が気になった。入り口には鉄の鎖が張られていた。恵美と浩一は車を降り、徒歩で海水浴場に足を踏み入れた。砂が小さく音を立てる。２０軒ほどの海の家はそのまま残ってはいるが、荒れ果てたまま人の気配は無かった。砂浜には多くのゴミも流れ着いていた。流木はもちろん、タイヤやバケツ、そして無数の缶類。それらが所狭しと転がっていた。

「気をつけて」砂に足をとられ、つまずきそうになった恵美を浩一は優しく押さえた。

「ありがとう」恵美は小さく微笑んだが、顔には絶望感が漂っていた。『京子を見つけるのは無理なのでは・・』そう思い始めていたのだ。恵美の瞳に涙が光った。月明かりに照らされた涙は、それこそ真珠のように光っていた。不謹慎だと思いながらも、浩一は恵美の姿に見とれてしまっていた。月に厚い雲がかかり始め、あたりは更に暗くなりだした。しかし、その最後の月明かりが消える前に、

砂浜を動く何かの影を、浩一は視界の隅で捉えていた。振り向いたが影は見えない。恵美にも見えてのか、浩一と同時に振り向いた。だが、あたりは完全な暗闇に包まれ、波の打ち寄せる音だけが闇に響いていた。

5章（1）

結局、京子は見つからなかった。二人が見た黒い陰は、どこへともなく消え去ったのだ。声を出して呼んではみたが京子の返事はなく、無限に広がる闇が二人の声を掻き消した。あの名所にも行ってみた。2台の車が駐車していたが、曇るガラスからはカップルと思われる声が聞こえていた。あたりをくまなく探してみたが、どこにも京子の姿は見つけられなかった。恵美は断崖を覗き込んだ。名前を呼ばれた気がしたのだ。しかしその声は風の悪戯で、白く砕けた波だけが黒い世界に浮かんでいた。二人が旅館に戻ったのは、１０時近くだった。女中も心配していたのか、二人が戻ると駆け足で出てきた。恵美が首を振ると、女中は小さなため息をついた。そして、恵美に尋ねた。

「一応、警察には連絡しましょうか？」

「そうですね・・・・」恵美はそれ以上言葉が出てこない。涙が言葉を封じ込めたのだ。

「お願いします」代わりに浩一が答えた。

「分かりました。お風呂でも入ってください。その間に、お食事の用意をしておきます」どうやら、食事も遅らせてくれたようだ。浩一は丁寧にお礼を言って、恵美を部屋へと抱えていった。

「お風呂は？」浩一の言葉に、恵美は首を振った。

「そう・・・。一人で大丈夫？僕は入ってきます」走り回った浩一は、汗と砂とで汚れていた。

「ええ、入ってきてください」恵美はどうにか答えた。浩一が心配そうな顔を残して部屋を出て行くと、すぐに食事が運ばれてきた。運ばれてきた料理はどれも出来立てらしく、厨房にも迷惑を掛けた様だった。恵美は深く頭を下げ、お礼の言葉を伝えた。

「良いんですよ。・・・お友達、心配ですね」女中は料理を並べながら言った。

「ええ、彼女は、優しすぎるから・・・」京子はどこに行ったのだろう。恵美は自分の無力さを呪った。
「きっとお友達は元気ですよ。ビールでもお持ちしましょうか」できるだけ明るく尋ねる女中に、恵美は力なく笑ったが、気持ちはありがたく受け取った。
「じゃあ、2本ほどお願いします」浩一にも迷惑を掛けてしまった。せめて風呂上りの一杯は飲ませてあげたくてビールを頼んだ。女中はにっこりと笑って部屋を出て行った。程なくして浩一も部屋に戻ってきた。風呂上りで垂れた前髪は、浩一を余計に幼く見せていた。
「ありがとう」恵美のお酌でビールを貰い、浩一は笑って答えた。
「恵美さんは？」浩一が差し出したビールを、恵美は断わった。それでも無理して笑顔を作り、食事に手を伸ばした。お刺身に煮物、綺麗なお皿に並べられた数々の料理。普段の恵美ならば喜んで頬張ったことだろう。それでも1口食べて、恵美は呟いた。
「おいし・・・」料理は美味しかった。だが、空腹のはずだがそれ以上恵美の箸は動かなかった。悲しそうな表情で浩一は恵美を見ていた。その代り浩一は食べられるだけを口に詰め込んだ。厨房の心配りへの感謝だろう。料理を残すことが出来なかったのだ。そんな浩一を見て、恵美の箸も少しずつ動き始めた。恵美の残りも浩一が片付け、出された料理は綺麗に片付き、下げに来た女中も驚くほどだった。少しでも料理を口にしたのが良かったのか、恵美は僅かだが元気を取り戻した。
「私も、お風呂行ってきます」笑顔もずっと明るくなってきた。浩一はそんな恵美の気丈さに心を打たれ、一つの決心に至った。『恵美を嫁にする』そして、愛情が大きく膨らむ自分に言い聞かせた。
『必ず幸せにする』
　化粧を落とした恵美は美しかった。銀座でジュンが施した化粧もいいが、浩一の好みは薄化粧だ。恵美はほんのりと頬を朱に染め、敷かれた布団に座り込んだ。お互いに恥かしがり新婚夫婦のようだった。時折見せる恵美の悲しそうな表情さえなければ、おそらく浩

一は恵美を奪っていただろう。しかし浩一は黙って電気を消し、自分の布団に潜り込んだ。恵美の布団から嗚咽が聞こえたのは、しばらくたってからだった。浩一は自分の判断が正しかったと、そ知らぬ素振りで寝たふりを続けた。そのうち小さな寝息が聞こえ、浩一も深い眠りに落ちていった。

恵美は夢を見た。広い草原に雛菊が咲き乱れていた。浩一と手をつなぎ草原を歩いていると、遠くに京子の姿が現れた。恵美は駆け出そうとしたが、浩一は恵美の手を離さなかった。顔には深い悲しみが浮かび、浩一は黙って首を振った。京子は恵美には気が付かない様子で、ドンドンと遠くに向かい歩き続けている。恵美は浩一の手を振り解き、京子に向かって走り出した。どんなに必死に走っても、京子の姿は更に遠く小さくなっていき、やがて立ち込める霧に隠れてしまった。『京子～』恵美は叫んだ。おそらく声に出したのだろう。浩一が恵美をゆすり起こした。

「大丈夫？」浩一が恵美の顔を覗き込んでいた。

「うん」恵美は布団に顔を隠して答えた。

「うなされたみたいだから」

「夢を見たの・・・。もう大丈夫。ありがとう」あたりは明るくなり始めていた。

「もう少し、寝たほうがいいね」そう言って浩一が布団に戻ろうとした時だった。

「一緒に・・・」か細い恵美の声が浩一の動きを止めた。一瞬戸惑った浩一だが、ゆっくりと恵美の布団に潜り込んだ。恵美は後ろを向いていた。浩一は後ろから恵美を抱きしめ、ゆっくりと振り向かせた。恵美は目を閉じている。浩一は優しく唇を重ね、恵美の背中を愛撫した。恵美の中で何かが弾けた。浩一にすがりつき激しく唇を吸い上げると、自ら寝巻きの帯を解いた。白く弾力のある肌があらわになり、浩一もその肌にすがりついた。二人の行為は激しかった。我慢が最高潮に達していたのだろう。堰を切ったように感情がぶつかり合い、お互いを深く求め合った。そんな二人を、朝の日差

しが優しく包み始めた。

5章（2）

二人は浅い眠りについていた。恵美は浩一の胸に顔を埋め、規則正しい寝息を立てていた。浩一は恵美の髪の匂いを楽しむように、僅かに笑いながら目を閉じていた。そんな至福のときだった。部屋の電話が静寂を破った。浩一は恵美の布団から飛び出した。恵美も気が付き眼を開けたが、眼前の裸の浩一に目を背けた。浩一も慌てて寝巻きを巻きつけ、照れくさそうに笑った。しかし、電話に出るなり表情は険しくなった。恵美は電話の内容を一瞬で理解し、急いで起きだした。受話器を置いた浩一が、恵美を優しく抱きしめた。そして、諭すように恵美に話しはじめた。

「よく聞いて。京子さん・・見つかったよ」恵美は次の言葉を息を飲み込み待った。

「病院にいる。命には別状は無いようだよ」恵美は身体から力が抜けるように感じた。それでも京子の無事を知り、恵美は泣き出した。

『良かった』恵美は心から祈った。誰に祈ったかは分からない。それでも誰かに祈りを捧げたかった。

「今朝、浜辺で見つかったそうだよ」浩一は恵美を抱きかかえて言った。

「じゃあ、やっぱり・・・」京子は入水自殺を図ったと、恵美は直感した。

「あの海水浴場だった」二人が見た影かは分からない。ただ、昨晩京子もあそこに居たのは確かだった。

「食事を済ませたら行ってみよう」恵美は頷いた。それでも、安心したせいか朝食はいつも通りに食べられた。昨夜の女中もしきりに『よかったですね』と、繰り返していた。恵美は宿泊をしばらく延長した。

場合によっては、数日は京子に付いていようかと思ったのだ。浩一には帰ることを強く要望した。

「もう、大丈夫。本当にありがとう」恵美の笑顔に浩一は安心したように、チェックアウトをしてから宿を出た。京子が収容された病院は伊東市の総合病院だった。車でも２０分とかからない。タクシーを呼んでもらい国道１３５号を南下した。女中から二人の事を聞いたのか、病室の前では、私服の警官が二人の到着を待っていた。

「昨夜のうちに連絡をもらって助かりました。ただ、身元の証明が出来ませんで・・・。旅館の電話番号を持っていたので、分かった次第です」警官は手帳を取りだし、恵美に質問を始めた。恵美としては、一刻も早く京子に会いたかったが、焦る気持ちを抑えて返答を繰り返した。警官は丁寧にお礼を言って、病室前から去っていった。

京子は静かな寝息を立てていた。どことなく顔には安らぎさえ浮かんでいるようだ。恵美は静かに京子の手をとった。『辛かったんだね』呟いた途端、恵美の目から涙が溢れた。浩一が後ろから抱きしめ、恵美を椅子に座らせた。恵美が落ち着くと、浩一は病室を静かに出て行った。恵美の会社に連絡を入れる為だ。連れ出した以上は、責任があると浩一は思っていた。恵美の部長はことの重大さに驚いていた。そして社内のトラブルに巻き込んでしまったことを、浩一にしきりに謝っていた。『恵美さんを責めないでください』浩一は恵美のファローも忘れなかった。そのまま浩二にも連絡を入れた。

「そうか。大変だったね。連絡が付かないから心配してたんだ」そう言いながらも、浩一が携帯の電源を切っていたことを責める口調ではなかった。

「心配かけてすまん。昼頃にはこちらを発つつもりだから、夕方には戻れると思う」

「ああ、こっちのことは心配しなくて良いよ。兄貴が居なくてもちゃんとやってるから」浩二の笑いがこぼれた。浩一にも笑いが伝染したようだ。しかしすぐに浩一は真剣な顔つきに変わった。恵美のことを話すかどうか迷ったのだ。迷った挙句に浩一は浩二に話し始

めた。
「恵美さんと・・・・結ばれた」浩一は小声だが、はっきりと言葉に出した。浩二の反応はない。無いと言うよりは、驚きで言葉を失っているようだった。
「本当なのか？」浩二の言葉は力なく暗い感じだった。
「すまん。・・・でも、無理にというわけではない」浩一は弁解めいた言葉で答えた。
「約束したのに・・・」浩二の電話はそこで切れた。怒りや悲しみの理由はよく分かっていた。浩二も恵美が好きだったのだ。そして二人で出した答えが（1、抜け駆けをしない。2、告白は同時に行う。3、よほどの事情がない限り3人で会う）だった。今回3はクリアーしても、1と2は完全に約束違反だった。浩一にもそのことが分かっていたから、浩二に言うのを迷ったのだ。しかし黙っていることが出来なかった。いや、言わなければならないと思ったのだ。言わなければ、浩二を騙すことになるからだ。なぜならば、一番祝福してほしいのは双子の浩二だったからだ。しかし結果は、傷つけ怒らしてしまったようだ。浩一は兄とはいっても所詮は双子。二人は常に対等であり、たまたま世にでた時間が少しだけずれただけのことで、二人の名前すら一時は問題になったほどだった。『何で、兄貴は一で、僕は二なの』子供の頃に浩二がよく口にしていた疑問だ。子供の心には小さなことが気になるものだと、今になって思えてきた。　病室に戻った浩一を恵美は不思議な目をして向かえた。
「なにかあったの」恵美が驚くほどに、浩一の顔は暗く沈んでいたのだ。
「ううん・・・。恵美さんの会社に連絡しておいたよ」恵美はこの時初めて気が付いた。
「あ～大変。私からも連絡入れてきます」恵美は慌てて病室を出て行った。恵美の座っていた椅子に浩一は腰を下ろした。京子の顔をじっと見つめて呟いた。『感謝しています』理由や経緯はどうあれ、恵美と結ばれたことは、京子のお陰だと思ったのだ。そのことに関

しては、浩一はお礼が言いたかった。静かに眠る京子は天使にさえ見えたのだ。浩一にとっては愛のキューピットに見えたのだ・・・・。

5章（3）

京子はうっすらと目を開けた。しかし目を開けただけで、意識は朦朧とし、思考もほとんど働かなかった。視界に入った浩一の顔を京子は無表情で見つめるだけで、意識はどこか遠くに引き離されているようだった。浩一は思わず声をかけた。

「京子さん、大丈夫ですか」京子は2，3度ゆっくりと瞬きをしたが、その表情からは何も読み取れなかった。浩一は京子の手をとり、ゆっくりとだがはっきりと話しかけた。

「大丈夫ですか。言葉がわかりますか」京子の表情は相変わらずだが、その手は僅かに浩一の手を握り返した。浩一はひとまず胸を撫で下ろした。言葉は聞こえているようだ。

「京子？」恵美も病室に戻ってきた。恵美も京子の視界に飛び込んだ。

「京子、聞こえる？」何度か呼びかけたが、うつろな表情は変わらなかった。浩一はナースコールを押した。駆けつけた看護婦が京子の顔を覗き込み、脈を取り聴診器を胸に当てた。恵美は心配そうに看護婦の動きを目で追った。やがて優しく微笑むと浩一に説明をはじめたした。

「大丈夫でしょう。薬で意識ははっきりとしていませんが、脈も呼吸も正常です。そのうちに話せるようになります」浩一と恵美は深く頭を下げた。『良かった』恵美は何度も呟いた。京子はいつの間にか眠りについていた。規則正しく上下する胸が、京子の無事を死からの生還を実感させた。

「じゃあ、帰るけど、何かあたら連絡して」浩一はそう言い残し、東京に戻っていった。11時を少し回ったときだった。浩一が病室を出る前に、二人は熱い口付けを交わして別れた。

「今の人は？」恵美は驚いて振り返った。京子が目を開け恵美に話しかけたのだ。

「大丈夫？」恵美は顔を覗き込み尋ねた。
「うん、・・・恵美、ごめん」京子の目から流れた涙が、枕に小さな輪ジミを作った。
「ううん、いいの。ビックリしただけ。だって・・・だって・・・」涙が恵美の言葉を遮った。何度涙を拭えども、流れ出す涙は押さえ切れなかった。
「ごめんね・・・。ごめんね・・・・・」京子は何度も呟き、２人は長い間抱き合い泣き続けた。
　浩一が会社に戻ったのは、３時近くだった。当然、多くの社員が働いており、エントランスホールにも多くの社員がいた。その社員が浩一に気がつき挨拶をするが、目は驚きで見開かれていた。昨日と同じスーツ。浩一が同じスーツで出勤したことはなかったからだ。それは外泊を意味し、ショックを受ける女子社員も多くいた。先だっての女性への気楽な挨拶。その話が社内で広まってからは、女子社員の間では密かな待感も広がっていたのだ。ところが、そんな事など些細に思える事件が、今、目の前で起こったのだ。イラついた表情で座っていた浩二に、何かを話そう近づいた浩一をいきなり浩二が殴り、さっさと何処かへ消えてしまったのだ。異様な雰囲気のホールで浩一は注目を浴びた。しかし動じた様子もなく、口元の血を拭うとゆっくりとした足どりでエレベーターに乗り込んだ。浩一の姿が見えなくなると同時に、ホールは喧騒に包まれ数々の憶測が飛び交った。双子といっても、この点だけはあきらかに違ったのだ。行動的な浩二は手が早い。喧嘩をすれば、先に手が出るのはいつも浩二だった。しかも今回、非は浩一に有った。そのため、浩一は殴られたことには少しの怒りも感じなかったのだ。ただ今回は、浩二の機嫌が直るには、かなりの努力が必要だと浩一は覚悟した。
　恵美は一人で旅館に戻った。京子の母が駆けつけたのだ。もちろん自殺未遂とは言ってはいない。足を滑らせ転落したと説明をしたのだ。警察も余分なことは言わなかったらしい。恵美は小さな部屋に移っていた。１人だからと、朝の時点で変更したのだ。浩一はそ

のまま使えばいいと言っていたが、広すぎる部屋に一人では心細さもあり、本館の小部屋に移ったのだ。昨夜の女中が引き続き恵美の相手をしてくれた。ゆっくりと風呂に浸かり恵美は疲れを癒した。部屋に戻ると女中が食事を並べていた。

「でも、よかったですね。お友達」

「はい、今は落ち着いたみたいで、お母さんも駆けつけてきました」

「お母さんが・・・」女中は自殺のことを気にしていた。

「大丈夫です、言ってませんから」恵美の答えに、女中は笑顔になった。

「さあ、お風呂上がりに一杯」そう言ってビールを傾けた。恵美は恐縮しながらもグラスを持ち上げた。

「いえ、お気遣いなく」恵美はなぜビールがあるのか不思議に思った。恵美の視線を感じたのか、女中がビールを注ぎながら話した。

「お昼頃、ご主人が寄られまして、頼んでいったんですよ。いい、御主人ですね」恵美は顔が真赤になるのを感じた。そう見られても仕方ないが、いざ面と向かって言われると、全身に鳥肌が立ち、首筋はくすぐられているような錯覚に襲われた。気分はいい。恵美は一気にビールをあおった。

「そうそう、お友達のも宿代も頂いております。気を使わないように言って置いてください」

「京子の分ですか」恵美は驚いた。

「はい、忙しい時期でもないし、お泊りにならなかったのでいいと言ったのですが・・・」恵美は浩一の心遣いに感謝すると同時に、浩一の優しさを感じた。あらかた料理が片付くと、恵美は眠気を覚えた。それを察してくれたのか、早々に布団の用意をし女中は部屋を出て行った。恵美は疲れていた。しかし、充実感もあり幸せな気分で布団に潜り込んだ。二人が結ばれたときを思い出し、恵美はクスクスと笑い、やがて眠り落ちていった。

5章（4）

恵美が寝付いて一時間ほどした時に、部屋のドアが静かにノックされた。時間はまだ9時前だが、訪れる人などいないはずだと、恵美は眠い目を擦りながらドア越しに話した。

「どちら様ですか」

「すいません。僕です。浩二です」恵美の眠気は一瞬で消え去った。

「はい、今開けます」恵美は自分の衣服を整え、ゆっくりとドアを開けた。確かに浩二だ。でも、なぜ？そんな疑問を持ちながらも、恵美は浩二を招きいれた。

「すいません、お休み中に・・」心なしか緊張しているようにも見えた。

「いえ、どうぞ」女中はなんの疑いもなく浩二を通したのだろう。浩一と思い込んでも仕方なかった。恵美は布団を押しのけ、座卓を中央に引き寄せ浩二を座らせた。

「どうしたんですか。こんなところまで・・・」浩二が来た理由は見当もつかなかった。『まさか浩一さんが、言いふらした？』そんな考えも浮かんだが、すぐに打ち消された。兄弟として報告したかも知れない。しかし仮に話したとしても、浩二がわざわざ来る必要などないと思ったのだ。恵美がお茶を入れ始めると、浩二は姿勢を正して恵美に向き合った。

「兄を好きですか？」いきなりの質問に、恵美はお茶をこぼしそうになった。しかしその顔はすぐに真赤に染まっていった。恵美は返事も返せずうつむいてしまった。浩二は恵美の気持ちを察したらしく、弱々しく答えた。

「そうですか・・・。残念です」浩二の言葉の意味はわからない。なぜ、残念なのか・・。

「浩二さん・・・」恵美の言葉を浩二は遮った。

「僕も貴方が好きでした」その声はいつもの浩二に戻っていた。そ

う感じただけかも知れない。
「でね、兄と約束したんです。抜け駆けはやめようって」恵美はさらに赤くなった。浩二の言っている事は、浩一とのあらたな関係を示していると解ったからだ。
「頭に来て、兄を殴ってやりました」浩二は大きく笑い出した。
「浩二さん、ごめんなさい」恵美には謝るしか出来ない。浩二はそんな恵美に優しく微笑んだ。
「あの兄が女性に惚れるなんて、始めは信じられませんでした。兄には幸せになってほしい。しかも相手が恵美さんならば、僕は何も言いません。兄を、兄をよろしくお願いします」浩二は畳に額が付きそうなほど頭を下げた。そしていきなり立ち上がると、踵を返しドアに向かった。
「夜遅くに、すいませんでした」そう言って部屋を出て行った。浩二の後姿は力なく寂しそうに見えた。しかもチラリと見えた横顔には、涙さえ光って見えたのだ。『ごめんなさい』恵美は心の中で何度も浩二に詫びた。突然の浩二の来訪と告白で、恵美の心は激しく揺れた。浩一が好きな気持ちに偽りはない。しかし浩二に対する気持ちはどうなのか？恵美は浩二の気持ちを知ったがために、考えもしなかったことが頭を占領し始めた。もし、今回浩一ではなく、浩二が同行していたらどうなっていただろう？恵美はそんなことを考え始めた。浩二も、浩一に劣らず優しい心の持ち主だ。浩一と同じ様に恵美に付いて来たかも知れない。そして同じように宿に泊まり、同じような配慮と優しさを示しただろう。そうなれば、浩二と結ばれていたかも知れないと恵美は思った。恵美は2人を同じように愛していたからだ。浩二が求めればおそらく拒むことなく受け入れただろう。いや、浩一と同じく恵美から誘ったかも知れない。浩二も浩一も抜け駆けはしないと約束を交し合っていたからだった。
　恵美は眠れぬ夜を過ごした。いくら頭から拭い去ろうとしても、浩二の言葉と涙。浩一の肌と温もり。3人で飲んだ銀座のクラブ。それらの映像や感覚が頭を駆け巡り、疲れているにも関わらず、一

睡も出来なかったのだ。浩一と結ばれはしたが、恵美の不安定な心は恵美の疲れ切った身体を容赦なく痛めつけた。女中が床上げに来たが、恵美は丁寧に断わった。寒気と激しい頭痛が恵美を襲い、とても起き上がることが出来なかったのだ。薬はもらったものの、食事もとらない恵美には効かなかった。恵美は携帯を引き寄せた。浩一の携帯を呼び出そうとしたが、恵美は戸惑った。昨夜の浩二の言葉が思い出され、恵美の手を止めたのだ。京子は病院。残るは雅子？無理だ。恵美は布団をかぶり寒さに震えた。用意された昼食も取れずに恵美は布団に包まっていた。3時過ぎ。いつもの女中が出勤してきて、恵美の状態を知ると慌てて部屋にやってきた。

「大丈夫ですか」女中は恵美の額に手を当てた。

「ひどい熱・・・。今、医者を呼びますからね」慌しく部屋を出て行く女中を、恵美はぼんやりと眺めるだけだった。

6章（1）

医者はすぐに現れた。旅館という業種柄、常にお客の不調には、迅速に対応が出来るようになっていた。
「大丈夫ですよ。きっと、疲れたんでしょう」医者は補聴器を診療バッグにしまいながら女中に言った。
「そうですか、ありがとうございます」女中は丁寧に頭を下げた。食後に飲ませるようにと、医者は数種類の薬を置いていった。恵美も起き上がりお礼を言おうとしたが、医者は両手で恵美の動きを制した。
「寝てなさい。寝てなさい、いいから　いいから」深く刻まれた皺は、笑うと一層その数が増えた。その笑い顔は、長年患者に尽くした誇りと優しさが溢れていた。
「何か、召し上がってください」薬を飲むためにも、女中は軽い食事を恵美に勧めた。
「すいません。お世話になりっぱなしで」恵美はすまなそうな顔で答えたが、女中は少しも気に病んではいなかった。やがてお盆に粥を持って戻ってきた。卵だけが入ったお粥だけだが、さすがに美味だった。食欲のない恵美でもすんなりとお腹に収まり、心なしか力が湧いて来るような気になった。
「じゃあ、お水、置いておきますから、しばらく経ったら薬を飲んでくださいね」女中はそう言って部屋を出て行こうとしたが、思い出したように振り返った。
「旦那さんに、連絡しておきましたよ」女中は笑顔で部屋のドアを閉めた。恵美は浩一とのひと時を思い
し、顔の筋肉が緩んだ。薬を飲むと、熱は少し下がったようだ。しかし、頭の重さと視界の霧は晴れなか
た。ボーっとする思考回路。視点の定まらない目で、恵美は天井を見つめていた。『浩一は来てくれるかしら』『でも、迷惑よね』そ

んな自問自答が繰り広げられたが、答えは浮かばなかった。期待と不安が交差する中、薬も効きウトウトし始めたとき、部屋のドアが激しく開け放たれた。
「恵美さん、大丈夫？」部屋に飛び込み恵美に駆け寄った。
「うん、ぼ～ッと、してるけど・・・」軽く恵美の額に手を触れた。
「うん、ちょっと熱はあるみたいだね」手の温もりを感じとった途端、熱以外の理由で恵美の顔はたちどころに紅潮した。恵美は額に置かれた手を取り、頬に摺り寄せた。
「恵美さん・・・・」言葉は続かなかった。恵美は目を閉じ、至福の顔で眠りについてしまった。手はしっかりと握られたままで、仕方無しに恵美の隣りに横になった。
　添い寝をしながら恵美の顔を見ていたとき、規則正しい寝息を立てていた恵美が変貌した。いきなり首に手を回し、むさぼるように唇を押し付けてきたのだ。寝呆けているようではない。息使いも荒く、恵美はあきらかに興奮していたのだ。戸惑った。好きだとは言え、今の恵美は病人だ。心が葛藤を続ける間も、恵美の行動は激しく、さらに荒々しく求め始めた。シャツをめくり胸に唇を這わせる。唇が胸を刺激する。男も乳首は敏感なんだと、この時はじめて気が付くほどだった。欲望に炎が灯るのを、はっきりを自覚した。しかし、虚ろな目で恵美が浴衣を脱ぎだし、ブラを外して胸をはだけたところで我に返り、とうとう大声で叫んだ。
「恵美さん、僕は、僕は浩二です」
　女中が連絡したのは浩二だった。前日に訪れたときに浩二が残していった名刺に連絡したのだ。『余計な事かも』そう思いながらも『何かあったら、連絡ください』と、浩二が残していったのだ。浩一が支払いに使ったカードの写しは残っている。しかし、同一人物だと思い込んでいた女中は、疑いもせずに、連絡してしまったのだ。浩二は連絡をもらって戸惑った。浩一に言うべきかを。そのとき浩一は丁度外出中だった。もちろん連絡を取ろうと思えば取れたはずだが、浩二はためらった。『なぜ、自分に？』との疑問もあったが、

小さな期待も沸いたのだ。もしかしたら、自分に連絡したのは恵美の希望かも知れないと思ったのだ。結局は仕事を放り出し、浩一にも告げずに電車に飛び乗ったのだった。

恵美は、何度も目を擦った。目を細め浩二の顔を覗き込むのだが、ようとしてはっきりとはしなかった。

「え？浩一さんじゃないの？」恵美はどうには言葉を発した。『やはり兄と勘違いしていたんだ』浩二は自分の愚かさに嫌気が差した。『願わくは』の期待も、もろくも崩れ去ったのだ。

「ええ、浩二です」恵美は慌てて衣服を抱え、布団に潜り込んだ。やがて布団の中からは、僅かに泣き声が聞こえてきた。浩二はいたたまれなくなり、部屋を飛び出した。

6章（2）

恵美は閉まるドアの音を聞いていた。浩二が出て行く足音も聞いた。布団の中で背を丸め、暗闇の中研ぎ澄まされた耳は、些細な音も聞き逃さなかった。遠くで聞こえる車のエンジン音。何処かの部屋の宴会の騒音。柱時計の時を刻む音。木材のきしむ音まで聞こえそうだった。しかし、自分の嗚咽に気づいたのは、随分経ってからだった。はじめは誰の泣き声かさえも解からなかった。濡れた枕でやっと気づいたほどだ。恥かしくて泣いた訳ではない。まして浩二に対しての怒りでもない。自分の不甲斐の無さに涙したのだ。病気だったとはいえ、双子だからとは言え、浩二を浩一と間違えた自分が許せなかった。浩一への不貞に対して泣いたのだ。浩一と結ばれてから、間もないと言うのに、浩一の温もりが残っているにも関わらず・・・。

ところが、意外な自分に驚いた。浩二だとわかってからも、恵美の興奮は収まらなかったのだ。浩二との出来事を思い出すと、体の芯が疼くのだ。さらに恵美を驚かせたのは、触らなくても解かるほどに濡れていたことだった。恵美の女は、いまだに濡れ続け浩二を求めていたのだ。下着の中は熱いほとばしりで一杯だった。頭から振り払おうとしても、溢れる自分を抑えられなかった。恵美は自分で慰めた。浩二のことを忘れるためにも、この興奮を抑える必要があると思った。恵美の頂点はすぐに訪れた。僅かな刺激で一気に上りつめ、そして興奮の下降線と共に恵美は眠りの深淵へと落ちていった。

浩二はロビーのソファに座っていた。フロントに人が来るのを待っていたのだ。時間的にも今から来る客はいない。フロントの証明は落とされていたのだ。浴衣姿の宿泊客は、1人佇む浩二に不快な表情を向け通りすぎた。浩二は待ち疲れて館内電話に手を伸ばした。やがて女中がやってきた。浩二の顔を見るなり不思議そうな顔をし

たのだ。現れた女中は浩二に連絡をした、いつもの女中だった。慣れた手つきで宿帳を出しながら浩二に尋ねた。
「あの～、お部屋を広いところに変えましょうか」館内電話で『部屋は空いているか』と浩二は尋ねたのだ。狭いとは言え、恵美の部屋は2人で泊まるには十分な広さがあったのだ。それなのにと不思議に思ったのだ。浩二はこの時始めて気が付いた。自分に連絡をくれた電話の主がこの女中で、自分と兄、浩一とを勘違いしているのだと。
「すいません、宿帳を・・・」浩二は宿帳を受け取ると、スラスラと自分の名前を書き込んだ。そして女中に見せつけた。女中はそれでも意味が通じないらしく、不思議な顔で浩二と宿帳を見比べた。浩二は宿帳を取り上げるとページをめくった。女中は慌てて取り戻そうとしたが、その前に浩二が見つけたページを見せ付けた。浩一と恵美の宿泊の日のページ。そして、今浩二が記入したページ。女中は何度も見比べて、その時やっと気づいたのだ。
「そう、双子です」その一言で、女中の顔は真赤になった。今まで、ずっと勘違いしていたとは、いくら双子だとは言え、そんな言い訳は通じる事ではなかった。
「すいません。と、と、とんだ勘違いをいたしました」動揺する女中に浩二は優しく笑いかけた。浩二には女中を責める気など、微塵も持ち合わせていなかった。今までも、何度も経験したからだ。恵美でさえ、気が付かないづかないくらいだ。『恵美』浩二は心の中で呟いた。大きく息を吐いて浩二は笑った。
「部屋、空いてますよね？」
浩二は離れの部屋に案内された。食事は済ませてきたので、少しにつまみとお酒を頼んだ。眠れそうになかったのだ。恵美のなまめかしい裸体は、瞼の奥から消え去りそうもなかった。兄との幸せを願いながらもここまで黙って来た自分。勘違いとは言え、恵美に抱き付かれ理性を失いそうになった自分。中でも1番の気がかりは、恵美を泣かしたこと。浩二は手酌で酒を煽り続けた。酔いに任せて

眠るつもりだったが、眠気は一向に浩二を襲ってはこない。浩二の意思とは裏腹に目は冴える一方だった。浩二は早朝宿を出た。恵美に合わせる顔も無く、眠れぬ夜を過ごしたからだ。出勤時間にもほど遠い暗い中を、浩二は東京へと帰って行った。

6章（3）

「ごめんなさい」朝一番にいつもの女中がやってきた。今朝は私服でやってきたのだ。今日は仕事が休みだが、どうしても謝りたかったと何度も頭を下げた。女中は聡子と名乗った。

「私でも、間違えるから・・・・」恵美は昨夜の浩二を思い出した。病気だったとは言え、浩一と浩二を間違え、恥かしげもなく迫ってしまったことを・・・。

「ほんとに、ごめんなさい。でも、そっくり。あそこまで似ている双子は初めて・・・」恵美は肩を震わせ笑い出した。聡子の身振り手振りと驚く顔が滑稽だったのだ。聡子も笑い出した。私服の聡子は若く見えた。アップを下ろした髪はロングのストレート。薄化粧の肌は白く綺麗に透き通っていた。

「具合は良さそうですね。安心したわ」ひとしきり笑うと、聡子が言った。

「ありがとうございます。もうすっかり良くなりました」恵美は頭を下げた。旅館でこんな知り合い方も珍しいだろう。聡子は３２歳。子供を引取り離婚して、３年前にここに来たのだと説明した。

「そうそう、お友達は？」聡子は恵美に尋ねた。

「今日は病院に行こうと思います。それから、東京に帰ります」

「寂しくなるわね・・・。あら、ヤダ。いつまでも居られないわよね。ごめんなさい」すっかりと仲の良い友達になったようだ。誰との出会いであれ、それは突如として訪れるのだなあと、恵美は思った。

「じゃあ、私がお供します。子供は学校だし。車もあるから」聡子はキーを手に持ち揺り鳴らした。

「ありがとうございます。でも・・」

「いいのよ、なんか田舎の妹を思い出して・・・」聡子は恵美の言葉を遮ると、遠くに目を泳がせた。

「じゃあ、食事してきてください。私は、車の掃除をしてるから」聡子は軽い足どりで部屋を出て行った。恵美は宿のチェックアウトを申し出た。フロントの女中がパソコンの操作をすると、恵美に言った。

「ありがとうございました。またお越しくださいませ」そして頭をさげた。

「え？請求は・・・」

「は？あ～、請求は会社のほうへ送らせていただきますので」恵美はパソコンを覗き込んだ。浩一の会社名がそこには記入され、決して当人からは徴収しないように書き加えられていた。

「なにか・・・」女中は不審そうに恵美を眺めた。

「いえ」恵美は黙った。騒げば浩一の会社に連絡が行くだろう。しばらくは東京に戻っても、会いたくなかったのだ。浩二のことが気になっていたからだ。せめて2日。自分の気持ちを整理したかったのだ。

「じゃあ、乗って下さい」玄関前には、聡子が待っていた。小さな車だが綺麗に洗車され、車内も片付いていた。聡子は良く笑った。恵美もつられて一緒に笑った。他愛もない話だが、恵美の会話にはリズムがあった。相手を引き込む話術もあった。恵美は気持ちが落ち着くのを感じ取り、聡子の人柄に好意を持った。姉が居たらこうなのかな。聡子の横顔を見ながら恵美は浩二を思い出したいた。『駄目、浩一さんは』心の声が言った。聡子の話に相槌を打ちながらも、思いは浩二に寄せられていた。『浩一さんは嫌い？』またも声が響いた。『ううん』恵美は答えた。『じゃあ、浩一さんだけを見て』恵美は答えられなかった。はたして、浩二を忘れることが出来るのか。浩一と付き合えば、嫌でも浩二と顔を合わせなくてはならない。たとえ、プロジェクトを降りようとも、浩一の後ろには常に浩二の影が見えるのだ。もちろん浩二の後ろにも浩一が居るのだ。恵美の顔つきが気になったのか、聡子が聞いた。

「どうしたの？具合が悪い。私、うるさかった？」優しい姉のよう

だ。
「いえ、違うんです」恵美は全てを吐き出しそうになったが、ぐっと堪えた。聡子はそんな恵美を黙って見ていた。
病院には、京子の母も到着していた。近くの民宿に泊まっているらしい。
「どう、調子は？」恵美はできるだけ明るく尋ねた。
「おかげさまで」そして小声で「ありがとう」と京子は恵美に言った。恵美は小さく笑い包みを差し出した。
「はい、旅館に言って作ってもらったの」包みには、玉子焼き漬物、小魚の甘露煮などが入っていた。
「病院のご飯は美味しくないでしょ？」京子はわざと大きく頷いた。そして
「私、田舎に帰るわ」京子は寂しそうに恵美に言った。京子の母は聞こえない素振りで病室を出て行った。
「そう、残念だわ・・・・」恵美は呟き
「でも、いつまでも友達よ」と元気に付け加えた。
「ありがとう、恵美には感謝しても仕切れない・・・」京子の目に涙が光った。ここでも一つの出会いが終わった気がした。実際には終わりはしな。会いたいと思えばいつでも会えるはずだ。しかし恵美の心は、終わりを告げられたように深く沈みこんだ。

6章（4）

聡子は熱海駅まで恵美を送った。昼も近かったので一緒に食事でもと思ったが、子供が学校から戻ると
言うので聡子とは駅で別れた。時刻表を見ると、東京行きの特急発車まで小一時間ほどの余裕があった。駅ビルには多くの土産物屋がひしめき合い、もちろん食堂もあった。恵美は幾つかの土産を買った。雅子と課長、それにプロジェクトの仲間達にだ。恵美の休みの理由は正当な扱いにされ、欠席扱いにはされていなかった。浩一のお陰であるのは明白だが、せめてもの償いにと大量の土産を買い込んだ。食事も立ち並ぶ土産物屋の一角にあるすし屋で、ちらし寿司を注文してゆっくりと食べた。一人のお客は恵美だけだったが、土産の袋を持っているために、とり立てて不審がられる様子はなかった。食事を終えた恵美はポケットから紙切れを取り出した。聡子と携帯番号を交換したのだ。恵美は早速電話を掛けた。時間的にはもう戻っているだろうと思ったのだ。

「もしもし」分かれたばかりの声が、恵美には懐かしく感じられた。

「恵美です。送っていただいて、ありがとうございました。これから電車に乗ります」

「堅苦しいこと、言わないで。また来て下さいね。私の家でも良いわよ。高いから・・」聡子の屈託のない笑いに、恵美も小さく笑った。

「じゃあ、気をつけてね・・・」聡子は何かを言おうとしたが、そのまま別れの挨拶を交わし電話を切った。聡子の会話の最後が気になったが、恵美はそれほど気にはかけなかった。恵美は携帯をしばらく見つめ、そのまま雅子に電話を入れた。

「そう、大変だったわね。でも京子、ほんとに辞めちゃうのか」雅子の声は確かに残念がっていた。

「じゃあ、いつものところで、６時でいい」雅子には、会ってちゃんとちゃんと話したかったのだ。恵美はそう言って電話を切った。東京行きの電車は空いていた。自宅に寄っても、京子との待ち合わせ時間には十分間に合いそうだ。電車の振動を感じながら、恵美はぼんやりと浩二を思い出していた。そんな自分に気がついて、慌てて恵美は雑誌を取り出した。今は考えたくない。そんな理由から駅で雑誌を購入していたのだ。恵美は必死に活字を眼で追った。浩二のことを頭から追い払うように、声に出して読み始めた。幸い恵美の近くに乗客はいない。声は次第大きくなった。

雅子の土産を持って恵美は自宅を出た。本来ならば丁度終業時間だ。皆には後ろめたさを感じていた。明日からは仕事に全神経を向けよう。恵美が心に誓った時に『逃げるの？』そんな言葉が頭を貫いた。

「え？」恵美は思わず声を出し、あたりを見回した。『二人のことは考えないの？』その声はさらに問題を突きつけた。心の葛藤・・・。はっきりと自分の中で起こり始めた葛藤と、恵美は対決を迫られた。

「わかってる・・、でも、答えは出せない。もう少し待って」悲願するような声が恵美の口からこぼれた。『いいわ、でも急いで、取り返しがつかなくなるわ』頭を貫く声はそのまま口を閉ざした。

「はい、お土産」コーヒーがなくなりかけた頃、雅子が現れた。２０分の遅刻だが、恵美は文句も言わずに土産を差し出した。

「ありがとう・・。ごめん、遅くなって」雅子が謝るのは珍しかった。たったの数日だが、雅子の気持ちにも変化が訪れたようだ。恵美の配置転換、京子の自殺未遂そして退職。雅子は１人取り残された気持ちになっていた。恵美は一連の出来事を、差しさわりのない程度で雅

子に話した。
「そうか・・・でも恵美の元彼、どうしようもないね！・・・あっ、ごめん」雅子は少し出された舌を噛んだ。恵美と話しているうちに、雅子の気持ちも落ち着いたようだ。徐々にいつもの雅子に戻っていった。
「すっかり忘れてた」恵美はあれから元彼、浩二に連絡を入れていなかった。脅かしたままだったのだ。
もう浩二には何も期待はしていない。だが、最後にどうしても1言文句を付けたかった。思い出すだけでも恵美は腹がたった。そんな恵美に気づきもしないように、雅子の表情が変わった。
「ところで、なんか恵美は特別待遇に見えるんだけど・・・」雅子はテーブルに身を乗り出すよう話始めた。いつもの詮索好きが始まったようだ。しかし雅子だけではないだろう。恐らく、皆が思っているはずだ。そう考えると、翌日からの出勤が思いやられそうだ。

7章（1）

紙袋を両手に携え立ち止まり、恵美は大きく深呼吸をした。会社に入る1歩が重く感じた。気持ちに反動を付けて歩みだすと、足は以外にも容易に動いた。その1歩が恵美の心を強固な落ち着きで包み込んだ。今の恵美には、少々のことでは動じない強い意志によって動かされていた。新しく割り当てられたロッカーに、1つの紙袋を無造作に詰め込むと、恵美は勢い良く経理課に向かった。まるで今から喧嘩でもするような面持ちだった。ところが課長は笑顔出恵美を迎えた。

「大変だったね。私からもお礼を言うよ。本来は我々の成すべき事だった」そう言って課長は頭を下げた。部長からでも聞いたのか、恵美は今までみたこともない課長の態度に拍子抜けする思いだった。

「いえ、お役に立てなくて申し訳ありません」恵美は土産を差し出し深いお辞儀をした。出勤している経理課員全員が恵美に注目を集めた。

「土産まで・・・、ありがとう。休憩時間にみんなで食べるよ」課長は心からお礼を言っているように恵美には感じられた。経理課員のどこからともなく『ご馳走様』の声が聞こえた。皆の目は笑っていた。よ

うやく受け入れてもらったよう気になり、恵美は皆にも頭を下げた。どうやら、経理課には専務の企みは伝わっていないことが、はっきりしたと恵美は思った。経理課を出る時に、出勤して来た雅子と鉢合わせた。2人はすれ違いざまに手と手を重ね合わせ、互いに片目を瞑っただけだった。経理課の扉が閉まった後も、恵美はしばらくその場に佇んだ。中からは課長の声が響いていた。

「京子君は残念ながら止めてしまった。恵美君が骨を折ってくれたが、仕方のないことだ。土産を貰った

からあとで皆で食べよう」扉の外で聞き耳を立てる恵美は、自分の

居場所が残されたとを密かに喜んだ。
それとは異なりプロジェクトの面々は、疑惑の目で恵美を迎えた。刺す様な視線にたじろぎ、土産の袋をデスクの下に仕舞い込んだ。恵美の強固な落ち着きも、この中では無駄な足掻きにさえ感じられた。そんな中、辛口女史の孝子が近づいた。
「領収書、溜まってるからお願いね」その口調と表情からは、孝子の意思は掴み取れなかった。さすがはプレゼンの達人。自分の感情を自由に操作出来る様だ。特にプレゼンでは、相手の指摘や質問にいちいち動揺を見せていては失敗する。それは孝子が最初に会得した技術だった。冷ややかな視線を浴びながら、恵美は電卓を打ち続けた。まるで針のむしろに座って居るようだった。刺さる視線が激しさを増した時、技術畑の主任が恵美に向かって歩き出した。経理の話では無さそうだ。その目は敵意さえ浮かべていたのだ。我慢の限界でも訪れたように、真っ直ぐと恵美に向かってくる。理由はわかっていた。休んだこともそうだが、1番の原因は浩一と浩二だ。あの顔合わせの夜、浩二と2人で闇に消えた事。浩一が迎えに来て休んでしまった事。
「理由を説明してほしい」両手をデスクに広く広げ、迫るように恵美に尋ねた。『ほら来た』恵美の考えは的中した。的中してほしくない事を言い当てるのは、恵美の得意技かも知れない。恵美が口を開かないのを見て、技術主任はデスクを激しく叩いた。
「君の素性はなんなのか、誰の命令なのか。はっきりと聞きたい」その質問から察すると、どうやら恵美の専務の回し者で、自分達を監視しているのではないかと疑っているようだった。先方のお偉方と親交があり自由に休める人間など、仲間ではないと言いたげだった。恵美は返事に困った。部長も専務も居ない上、さらに3人が恵美に真っ直ぐ向かってくるのが見えた。まさか同僚が自殺を図ったなどとは言えない。
浩一とは特別な関係で専務は私を利用してます。そんな事も口が裂けても言えなかった。恵美は4人に囲まれ鋭い質問を浴びせられて

いた。
「ちょっと、いい加減にしなさいよ」孝子だ。足早に近づくと、孝子は捲くし立てるように話した。
「どうでもいいじゃない。自分の仕事をしなさいよ」
「しかし、仲間の輪が壊れては・・・」主任は、必死に反論を目論んだ。
「何言ってんのよ、あんたに迷惑かかったの。接待の振りして飲み歩いているくせに」孝子の剣幕に主任もほかの社員も黙ってしまった。４人は自分のデスクに戻っていった。その後姿は、負け犬そのものだった。恵美は孝子に頭を下げた。
「勘違いしないで、助けた訳ではないのよ。うるさかっただけ」孝子は恵美の顔も見ないまま冷たく言い放ち、席に戻っていった。そんな時部長が部屋に飛び込んできた。恵美を見付けるなり激しく手招きをした。その顔は、困惑と不安の入り交ざった顔つきで、何か重要な驚くべきことが起こったのだと言っていた。恵美が急いで駆け寄ると、部長は恵美の手を引き連れ出した。廊下で恵美が耳にした事は、
「山田専務の行方が掴めない。何か知らないか」だった。その言葉を聞いた途端、恵美の視界は霧に包まれ、浩二の名を呼びながら暗い闇に落ち込む自分が見えた。

7章（2）

「大丈夫かね」部長の声で恵美は目を開けた。気を失ってしまったらしい。孝子もみんなも回りに集まっていた。ぼんやりと眺める恵美の目が、現実に戻され急に大きく見開かれた。
「大変」恵美は飛び起きた。『どうした』『何があったの』みんなの声も恵美には一切聞こえなかった。デスクの下から紙袋を取り出すと、投げつけるように部長に渡し走り出した。
「あちらの会社に行って来ます。それ、お土産・・・」恵美の声と走り去る足音は聞こえなくなった。
「部長、説明してくれますよね」孝子が詰め寄った。そこの全員が孝子にならうように、部長に一歩詰め寄った。部長の顔は引きつりながらも、必死に笑いを作ろうと無駄な努力を重ねているようだった。
　タクシーを下りると、恵美は玄関ホールに向かう階段を駆け上がった。浩一の会社の洗練された外装には目もくれず、一点を見つめ自動ドアを通り抜けた。いつの間にか片方のヒールはなくなったいた。しかし恵美は気に掛ける様子もなく、エレベーターへと足早に向かった。恵美は皆の注目を無視した。既に恵美は、この会社でも顔の知られた人物になっていた。受付カウンターの女性も、恵美に声をかけようとしたが、そのまま見送ってしまった。エレベーターに乗り込むと、恵美は呼吸を整えた。しかし、いくら整えようとしても一向に落ち着く気配はなかった。浩一のオフィスがある階に止まり、恵美は飛び出した。
浩一の秘書らしき男性が、オフィス前のデスクに腰を下ろしていた。この秘書も恵美を知っていた。浩一とエレベーターで鉢合わせした時、一緒に乗り合わせていたのだ。その顔は、恵美を認めると僅かに口を開き、驚きで半ば放心状態に陥ったようだ。
「こ、浩一は。い、いますか」息を整え声を発したつもりだが、恵

美の言葉はつまり気味だった。秘書は恵美の顔を見つめたまま、ゆっくりと頷いた。恵美は深々とお辞儀をすると、両開きのドアを勢い良く開け放った。驚いたのは浩一だった。電話中だった浩一は恵美の姿が目に留まるや否や、驚愕の表情で言葉を失ったのだ。それも仕方のないことだった。恵美はといえば、涙で顔がくしゃくしゃになっていたのだ。目の周りはアイライナーが黒く流れ、鼻水が口紅を大きくにじませ、片方のヒールがなくヨタヨタとしていたのだ。浩一は慌てて立ち上がると

「すいません、また掛け直します」そう言って受話器を置いた。受話器を置くなり恵美に駆け寄り、浩一は恵美を窓際のソファに座らせた。

「恵美さん、一体どうしたんですか」浩一は恵美の肩を優しく揺すった。恵美は浩一の顔をじっと見つめ、やがて声を出して泣きついた。堰を切ったように泣きじゃくる恵美を浩一はしっかりと抱きしめた。３０分もなき続けただろうか、嗚咽が収まりを見せた時、浩一はもう一度恵美に尋ねた。

「一体どうしたんですか」恵美は何度も鼻をすすってどうにか言葉を発した。

「こ、浩二さん・・・」浩一はなぜ恵美が知っているのか不思議に思ったが、泣き出す理由は解からなかった。たとえ浩二が行方知らずとしても、恵美の取り乱し方が普通には思えなかったのだ。

「聞いたんですか」恵美は黙って頷いた。

「昔は、よくありました。心配は無いと思いますよ」浩一は出来る限り、おどけて見せた。心配していないわけではないが、それほど一大事だとも思っていなかったのだ。実際、浩二は時たま姿を眩ませることがあったからだ。ここ数年、家出癖は出なかったものの、昔は『ふられた』と言っては居なくなり、『兄貴なんか嫌いだ』と言っては姿を眩ませる事があったからだ。それでも、2，3日すれば、何事もなかったようにひょっこりと戻ってきていたのだ。そんな浩二を知っているからこそ、恵美の取り乱し方には只ならぬ疑問

を覚えた。
「何か知っているのかい」優しい声が恵美の耳から心に届き、恵美は落ち着きを取り戻し始めた。
「・・・はい」恵美は大きく深呼吸を繰り返し、浩一に渡されたハンカチで、目の周りを拭った。
「浩二さん・・・。旅館に来ました」浩一は一瞬言葉を失った。
「い、いつですか」声が震えているのが、浩一自身にもはっきりと解かった。
「一昨日の、晩です」浩一は頭の中をサッと整理し、一昨日の晩の記憶を引っ張り出した。その晩確かに浩二は居なかった。秘書に聞いても行き先もわからず、携帯にも出なかったのだ。『思いつめたような表情で、かなり急いでいたようです』浩二を見た部下はこんな報告をしていたのだ。恵美は自分が熱を出した事、女中が勘違いして浩二に連絡を入れた事。そして最後に、浩一を殴り気持ちを確かめに訪れ、浩二の気持ちも知った事を話した。だた一つ、浩一と間違え浩二に抱きついた事は話せずにいた。『すると僅か数日の間に二度も熱海を往復したのか』浩一は心の中で呟くと同時に、動揺が心の底から湧き上がるのを感じた。浩二は今まで以上に真剣だったのだ。浩一はそこまで真剣な弟を今まで見たことがなかった。大抵は『どうでもいいよあんな女』で終わってしまうのだ。ところが恵美には無礼な言葉を掛けたこともなく、常に紳士的に振舞っていた。『僕も恵美さんが好きだ』そう聞いた時でさえ、ただ単に、自分に対抗しているだけだと思ったのだ。しかし実際は自分を殴り、わざわざ熱海まで出向いていたと思うと、浩二の真剣な恵美への愛を認めざるを得なかった。恵美への愛と弟への愛が複雑に混ざり合い、浩一の心を無情の嵐が吹き荒れ、息が苦しくなるほどに締め付けた。

7章（3）

恵美は気丈に立ち上がると、浩一に謝った。頭が膝に付くほどの深いお辞儀だ。

「ごめんなさい」髪が逆さに垂れ下がり、今にも床につきそうだ。

「恵美さんが謝る必要はありません」浩一は何度の首を横に振り、恵美の身体をゆっくり起こした。恵美は僅かに顔をほころばせ消え入りそうに言葉を発した。

「化粧室、貸してくれますか」恵美の言葉に浩一は急いで立ち上がると、恵美の手をゆっくりと取り、エスコートを申し出た。片方のヒールが取れたパンプスで、バランスを崩しそうになったのだ。恵美は浩一の手を取り体勢を立て直した。化粧室は扉を出てすぐ左手にある。

重役専用と書かれた化粧室。磨きこまれた鏡に映った恵美は、それこそ無様な姿だった。走ったせいで衣服は乱れ、いくら薄いとは言え、化粧の崩れた顔は人には見せられたものでは無かった。恵美は浩一の事務室に入るまで、自分が泣いていたことさえ自覚していなかったのだ。しかもハンドバックさえ持っていなかった。二つ折りの財布だけが恵美の手に握られていた。壁に付けられたハンドペーパーを引き抜き水に浸して顔を拭った。情けない姿に一瞬恵美の手が止まり、今にも泣き出しそうになったが、必死に堪えて全ての化粧を拭い去った。『私のせい・・』恵美は鏡を見つめ呟いた。情けない思いで、胸は誰かにわし掴みにされたようだった。その時浩一は電話を掛けていた。

「いいからすぐに来い」相手は銀座のクラブ「来夢」のジュン。

「待ってよ、起きたばかりなのよ」明らかに眠たそうな声だったが、浩一は臆せず話を続けた。

「とにかく、化粧品と、靴・・・・サンダルでいい。それをもって早く来い」

「化粧品とサンダル？一体どう言う事」ジュンはさすがに驚いた。こんな昼間に会社の中で何があったのか。想像すら出来ない様子だった。浩一は手っ取り早く答えた。

「恵美さんがいる。泣き顔で化粧は落ちた。ヒールも片方折れた」まるで何かの暗号でも語るように簡単に説明したが、そこはさすがに水商売の女。大体の見当をつけたらしく『３０分で行くわ』と電話を切った。恵美は裸足で戻ってきたが、靴はどこにも見当たらなかった。

「ハイヒール・・・捨てちゃった」恵美はほんの少し頬を赤く染めた。化粧を落としたからかも知れないが、頬はいつもより赤く見えたのだ。付け加えるならば、鼻の頭も赤く染まっていた。

「コーヒーは？」浩一は受話器を持ち上げ恵美に尋ねた。

「ええ、ありがとう」浩一はコーヒーを２つ、電話の相手に持ってくるように伝えた。

「座ってください」浩一はソファーを指差した。恵美はこの時初めて部屋を見回した。立派なデスクと飾り棚。どちらも木目の綺麗な重厚な作りだった。８人は座れるほどのゆったりとした応接セットは、窓の近くで黒い表面を光輝かせていた。絵画などの美術品は無いが、広く明るい清潔なオフィスだった。浩一は忙しそうに電話を掛けていた。毛足の長いカーペットで、裸足の足でも気持ちが良かった。恵美は窓に近づき遠くを見渡した。高層ビルの隙間に恵美の好きな山が見てとれた。富士山。末広がりのなだらかな山腹、白い帽子を被った優美な姿が好きだった。浩一はあまり心配してはいないよう。よくある事だと言っていた。それでも恵美は気がかりだった。誰も知らない秘密があるから。すぐにコーヒーは運ばれてきた。あまりコーヒーを飲まない恵美でも、その美味しさは十分に堪能できた。一段落したのか、浩一が向かいのソファに腰を下ろした。何かを言いたげなのは、その表情から伝わったが、恵美は目を背けてしまった。その行動がいかに愚かなことか、恵美には十分理解できたが、浩一の真っ直ぐな視線に耐え切れなくなったのだ。『何で、

来たんだろう』今更ながらに後悔の念が頭を持ち上げた。浩一は恵美を信じていた。いや信じようと努力をしていた。そして浩二も信じたかった。しかし恵美は顔を背けた。ただ、外を見ただけかも知れないし、恥かしいだけかも知れない。見詰め合う必要はどこにもないのだ。そのタイミングが丁度自分と同調してしまっただけのことだ。言葉も交わさずただ時間だけが過ぎていく。恵美はとうとう立ち上がった。

「ごめんなさい、帰ります」泣き顔の赤みはすっかり収まっていた。

「もうちょっと待っててて」浩一は時計に目をやった。そろそろジュンが来てもいい時間だった。そう思った時、部屋の扉が大きく開け放たれた。

7章（4）

その頃浩二まだ熱海にいた。旅館やホテルではない。狭いアパートの布団に包まっていたのだ。一旦は東京に戻る素振りを見せたが、途中で引き返したのだ。小さな女の子が、浩二の布団を引き剥がした。

「ねえ、遊んでよ」浩二は身を起こし、少女に笑った。

「いいよ。何しようか」

「じゃあ、これ」少女が持ち出したのは、汚れた小さな人形だった。部屋は6畳に台所。トイレ一体式の風呂があるだけだった。和室に括り付けられた一つしかない押入れをかき回し、取り出したのがその人形だった。テレビの上にも人形はあったが、少女はその薄汚れた人形がお気に入りの様子だった。男の子と女の子の一対の人形。おそらく父親から貰ったものだろう。父親の記憶は無くとも、人形には愛着を感じていたようだ。

「じゃあ、私がお母さん。おじさんはおとうさんね」そう言って差し出された男の子の人形を、浩二は笑って受け取った。少女は自分が持つ人形を布団に座らせると、唐突に泣き出した。

「ちょっと、どうしたの」浩二は慌てて少女の顔を覗き込みなだめる様に尋ねた。

「ダメじゃない。夫婦喧嘩よ。おとうさんをやってよ」浩二は大きな声で笑い出した。どうやら少女はおままごとでも始めたらしい。しかし夫婦喧嘩は、喜べる題材ではない。幼稚園で教わったのか、あるいは過去の記憶が残っているのか。浩二一瞬悲しい目をしたが、少女に付き合って人形を動かし始めた。

「ごめんなさい。遅くなって」買い物袋を抱えて聡子が戻ってきた。

「ママ～」少女は駆け寄り聡子に飛びついた。

「知恵、ただいま」聡子は知恵を抱きしめた。

「お土産は」聡子は袋からキャンディーを渡すと、浩二に頭を下げ

た。その頬ははっきりと恥じらいによって朱に染まっていた。浩二も照れ笑いを浮かべて、小さく頷いた。

あの夜浩二は酔いに任せて聡子を抱いたのだ。いくら飲んでも眠れない浩二を、心配した聡子が訪れた時、半ば強引に聡子を抱いたのだ。聡子は自分のミスが原因ではないかと思っていたのだ。浩一と浩二を取り違えた結果、浩二は酒を飲み眠れない夜を過ごしている。全ては自分のせいだと思っていた。お客が女中を買うのは、温泉旅館ではよくあることだ。聡子の同僚も金銭のやり取りでお客と寝ていたのだ。もちろん聡子は初めてだし、この先もそんな事などしないと心に決めていた。浩二が差し出したお金には、指一本触れなかったのだ。聡子は悲しそうに浩二を見つめた。恵美を中心とした何かが、この3人にあるのだと直感したのだ。浩二も酒の勢いとは言え初めて自分のしたことを後悔した。涙を浮かべて謝る浩二を、聡子はいとおしいと思ったのだ。浩二の強引さは本当の姿ではない。そう思ったとき、聡子は浩二の本心が無性に見たくなった。手を付いて謝る浩二の身を起こし、その手を自らの胸に誘ったのだ。そこで終われば何も問題はなかった。だが浩二は聡子を抱いた。狂ったように聡子を抱いた。朝が来るまで2人は求め合ったのだ。一度は東京に戻ろうとしたが、浩二は聡子の元に向かったのだ。戻れば兄にも恵美にも会うことになるだろう。それが耐えられなかったのだ。そして恵美を送ってほしいと浩二は頼んだ。聡子には悪いと思っていた。結果的には聡子を利用し、恵美を忘れようとしたのだ。このまま身を隠しても良いとさえ思っていた。会社は兄貴がいるから転覆することは無いだろう。聡子と知恵には、少なからずも好意を抱き始めていた。このまま3人で生きていくのも良いとさえ思い始めていたのだ。

「いつ帰るの」聡子は前触れもなく浩二に尋ねた。

「え、僕が邪魔ですか」浩二は答えた。

「いいえ、でも、貴方のいるところは、ここではないわ」聡子の顔は真剣だった。浩二はその顔に圧倒された。今しがたまで、知恵を

囲んで笑っていたのが、知恵が眠りに付いた途端の問いかけだった。
「貴方は将来を約束された人。私は生きていくだけで精一杯。この違いがわかる」浩二は答えなかった。
「私はこの子と生きていくだけ、野心もないし争いもしない。ここでのんびり暮すのが似合っているの。でも貴方は違うわ。第一線で活躍する人。いいえ、活躍しなければダメになるわ。だから、東京に戻って」聡子の言葉は強かった。反論は許さない。それほどの気迫に満ちていた。浩二は何も言えなかった。この二日の間、浩二は何一つ生産的なことはしなかった。食べて寝るだけの生活。のんびりしているつもりでも、心のどこかに物足りなさと苛立ちを感じていたのだ。聡子はそれを見破っていた。このままでは浩二が駄目になることは、聡子には手に取るように理解できたのだ。別れた亭主のようにだ。聡子の亭主はまじめな営業マンで、成績はよかった。そのため、得意先からの勧めで独立したのだ。独立当初はそれなりの成果を挙げて順調な滑り出しだった。ところが、薦めた得意先の頼みで、共同経営者の名前を貸したのだ。それが間違いの元だった。共同経営に連ねた会社は、破綻寸前だったのだ。しかも当の社長は姿を晦まし、しわ寄せを一身に受けてしまったのだ。そして事業は失敗。酒に溺れて暴力を振るい始めた。自分だけならばと我慢していた聡子だが、暴力は幼い知恵にも向けられた。職場を失った男の末路を、聡子は身をもって見てきたのだ。浩二にはそうなってほしくは無かった。少々強く、これきりになってもいいとの思いで、浩二に話したのだ。浩二はしばらく知恵の頭を撫でていた。聡子は決して答えを急がせない。浩二が口を開くまで、黙って見つめるだけだった。

8章（1）

「ちょっと、困ります」飛び込んできたのは浩一の秘書。その後をクラブ『来夢』のジュンが我者顔で進んでくる。
「浩一さん、この分からず屋に何とか言ってよ」ジュンは御立腹のようだった。それも致し方ない。電話で起こされた上に『急いで来い』と言われ、満足に化粧もしていないのだ。サングラスを取ったジュンは、殆ど素顔に近かった。
「すまん、すまん。言い忘れていた」浩一は笑いながら、秘書に両手で合図を送った。秘書は『それならば』と、部屋を出て行った。ジュンはソファに近づき、恵美の顔を覗き込んだ。
「御機嫌よう。本当ね。どうしたの」嫌味な言い回しではない。恵美もジュンに挨拶をし、浩一に振り返った。
「いや、恵美さんは。バッグも持っていないようだし、ヒールも折れているようなので・・・」余計なことをしたのかと、浩一は言葉を濁した。恵美の驚きの顔が、怒っている様に見えたらしい。
「どうも、すいません、気を使っていただいて」恵美は急いでお礼を言った。浩一の気持ちが嬉しかったが、気の付き過ぎるところには正直驚いた。と同時に、状況判断の早さとその能力にも驚いた。普通の男は、ここまでは気が回らないだろうと思ったのだ。
「じゃあ、これを履いて。行きましょう」ジュンは持参したサンダルを取り出すと、恵美を化粧室へと連れて行った。
「ねえ、何があったの」この時ジュンは、てっきり浩一兄弟が原因で、恵美が泣いたと思っていたのだ。しかし、恵美は返事が出来なかった。『それは誤解。私が悪いの』何度その言葉が出そうになったか解からない。ジュンも長く水商売をしている。そこは恵美の表情から有る程度は感じ取ったが、恵美と浩二の関係までは想像すらしなかった。第一に、ジュンは浩二を狙っていたのだ。願わくば専務婦人として、水商売から足を洗おうと思っていたのだ。専務婦人

として商売から卒業することは、十分に仲間からも一目置かれ堂々と止める理由になるからだ。それほど水商売は甘くはない。長年の経験からジュンが築き上げた哲学だった。誰に恥じることなく卒業するために哲学。そう思っていたのだ。仮に、中途半端な男と一緒になり失敗しても、銀座に戻ることは許されない。銀座どころか、名の知れた店には2度と戻れないのだ。だから皆慎重に相手を選び、銀座を卒業する日を夢見ている。ジュンもその一人には違いなかった。ジュンは無言の恵美に化粧を施し、自分の顔にも化粧を施した。

『夜の蝶の出来上がり』ジュンは鏡に映った自分に言い聞かせた。毎日鏡に向かって唱える呪文だ。この時からジュンは、銀座の一流ホステスに変身するのだ。二人は一緒に浩一の部屋に戻った。

「お待たせ。これで良い」ジュンは恵美を前に押し出した。

「ジュン、悪かったね。ついでに、二人で買い物でも行ったら」ジュンは言葉の意味をすぐに理解した。浩一は恵美の服と靴、お礼として自分の服も買って来いと言っているのだ。恵美には二人の会話とジュンの笑顔の意味が理解出来なかった。ジュンに促され恵美は訳も解からずに部屋を出た。

「今日は早く上がる、予定は明日に回し調整してくれ」秘書にそう告げると浩一は会社をあとにした。浩一と浩二の家は隣同士。同じマンションの同じ階を二人が使用していた。名目上は会社の社員寮となっており、低層階には独身社員の寮としてワンルームの部屋が用意されていた。浩二がいるのではと、浩一は自宅に急いだ。相変わらず浩二の携帯は音信不通だが、戻ってきている可能性は否定できなかった。普段は浩一も浩二も電車通勤だ。都内での車移動は急ぐ時には不便極まりない。時間的に言っても、電車のほうが正確で時間は掛からない。それらの理由で常に通勤だけは電車を使っていた。駅までは車で向かったが、その時も浩一は電車で帰宅した。いつもより2時間以上は早い時間。その普段と違う行動のせいで、浩一の身に予測できないことが降りかかろうとしていた。

「どこに行くんですか」先を歩くジュンに恵美は尋ねた。
「恵美さんの、靴と洋服を買うのよ。もちろん浩一さんのお金でね」ジュンはそう言うと通りでタクシーに手を挙げた。
「そんな、私はいいです」恵美はジュンに駆け寄りそう言った。
「駄目よ。私も買ってもらうんだから。恵美さんのを買わないで、私のだけ買えないでしょ」ジュンは悪びれた様子もなく平然と言い除けた。やはり良くある事なのだろうと、恵美は思った。しかし自分まで浩一に甘えて良いものか、恵美には判断が付かなかった。ジュンは新調する服の予定でもあるのか、楽しそうに歌まで口ずさみ始めた。ジュンを見ているととても辞退できる状況ではない。ジュンとしては当たり前の報酬である。『なるべく安いものにしよう』それが恵美の出した答えだった。ジュンは真っ直ぐに銀座のデパートに向かった。その6階に有るデザイナーズブランドのお店。ジュンは常連のようだ。店員がすぐに駆けつけて来た事でもわかる。恵美はこんな高級店で買ったことはない。チラリと見た値札は、恵美の想像をはるかに超えていた。
「これ、これ。これがほしかったのよ」ジュンは一着のドレスをハンガーごと持ち上げ、透かすように電灯の前に掲げた。
「どう、透き通るようなブルー。ちょっと生地は薄いけど、お店で着るには丁度いいわ」その服はお店の中でも奥に飾られた、いかにも高額な衣装に見えた。確かにシルエットと良い、デザインと良い、恵美も憧れる様な服だった。
「これ、包んで」店員に言うと、ジュンは恵美に向き直った。どうやら試着は済んでるようだ。
「さて、貴方の服ね」そう言うと恵美の周りを一周した。
「う～ん、サイズは私ぐらいかしら・・・。7号じゃきついかしら」
「ええ・・・。」恵美は頷いた。
「でも、9号じゃ、大きいわね」そう言って店員をみると、承知しましたとばかり、奥から数着の衣装を運んできた。
「全部着てみて」恵美は一着ずつ衣装を渡してもらいながら、出さ

れた七着全てに袖を通した。着るたびにジュンの前でポーズを取り長い時間をかけて試着した。恵美も年頃の女である。そのうち試着が楽しく感じ始めた。ジュンの品評の上手さも拍車をかけた。問題は値段である。しかしまだ付けていないのか、値札は付いてはいなかった。もし付いていたら、恵美は袖を通せなかっただろう。ジュンが選んだ二着の値段は、それこそ目の玉が飛び出しそうな値段だった。お金は払っていない。浩一のツケのようだが、レシートだけは渡された。万が一の時の返却用にだ。恵美はその一着を着て店を出た。ジュンとは違い普通のＯＬ。派手ではないが覚めるようなピンク系のワンピースで、裾にはぐるりと手刺繍が施されていた。ジュンの服を見る眼は確かだと、恵美はつくづく感心させられた。次に向かったのは靴屋。恵美もいつしかショッピングを楽しみ出し、一瞬だが悩みを忘れることが出来たのだ。恵美とジュンがショッピングを楽しみ、浩二と聡子が知恵の頭を撫ぜ、４時の時報が流れようとしていたその時、浩一の身に危険が迫っているとは、誰一人として想像もしていなかった。

8章（2）

「わかりました。東京に戻ります」浩二は聡子に言った。聡子は微かに笑ったつもりでも、その顔にはどこか暗い影が差していた。浩二は知恵の頭を撫ぜながら、一言付け加えた。

「明日の朝でも構わないですか」これには聡子もすぐさま答えた。

「いいえ駄目よ。すぐに戻られたほうがいいわ」男と女が長く一緒にいれば、情が出ても仕方がない。事実、浩二も聡子も互いに生まれ出る感情を意識していたのだ。本心では居てほしいと思いながらも、聡子は厳しい口調で答えた。

「しかし・・」浩二は困惑した。胸の奥から湧き上がる感情は、聡子にも有ると思っていたのだ。

「わかりました。では、1万円置いて行って下さい。私は仕事をしただけ。気にせず戻られて下さい」聡子は悪びれた様子で浩二に言った。浩二を諦めさせるつもりだ。浩二はうな垂れるように肩を落とし、やがてゆっくりと立ち上がった。浩二にはわかっていた。聡子がわざと悪役に徹しようとしているのを。その優しさが浩二の心を締め付けたのだ。その時浩二は、急に抑え切れない恐怖と不安を感じた。こんな不思議な気持ちは初めてだったが、聡子の顔を見ても収まることはなかった。『恵美さん』浩二は恵美の顔を思い浮かべたが、心の中に渦巻く不快な感覚は拭えなかった。『兄貴・・』浩二が呟いた。まさしくそれだった。兄貴に何かが起こったのだ。浩二ははっきりとそれを感じ取った。双子はどこかで繋がっている。そう断言できるほど確信に満ちた想いが、浩一の心から浩二へと流れ込んだ。

「すいません。聡子さん、駅まで送ってくれますか」浩二の不安な顔と早口で捲くし立てる強い口調に、聡子は思わず聞き返した。

「駅まで?、でも、子供が・・・」浩二は既に靴を履いていた。聡子も浩二の狼狽振りに何か良からぬことがあったのかと気が付いた。

「わかりました。子供を抱いてください」聡子はバッグから、車のキーを取り出した。

恵美はジュンと靴屋にいた。もう何足目だろうか、恵美の座る椅子の周りには、何足もの靴が並んでいた。新調したワンピースに合うパンプスを探していたのだ。

「これはどう」ジュンが新しい靴を持ってきた。

「まあ、可愛いわ」ワンピースと同じピンク系のパンプスだが、色合いは白く、桜の花びらのようだった。足首まで締め上げるタイプだが、ぴったりと巻きつき足と同化するように軽かった。ヒールは7センチほどで、ワンピースの丈にも合っていた。

「いいわね。これにしましょう」ジュンはそう言って店員に頼んだ。新しい箱に入れられたのは、ジュンが持ってきたサンダル。

恵美はそのままパンプスを履いて店を出た。衣装も調い化粧も施された恵美は、皆が認める美人に変身を遂げたのだ。デパート1階の喫茶店に入り、二人はコーヒーを注文した。

「どう。足は痛くない」ジュンが恵美に尋ねた。試着しても、実際に歩くと痛くなることがある。それを心配しての問いかけだった。

「ええ大丈夫です。全然痛くないの」恵美は足を斜めに差出し、ジュンに見せるように答えた。足からつま先まで、スラリ伸びた直線は、恵美にも十分満足のいく物だった。

「よかったわ。私もあの店では、いつもいい物と出会っているわ」女性にとって買い物とは、いかに良い商品と出会えるかが、最大の関心と望みだ。

「今日は、本当にありがとうございました」恵美がジュンにお礼を言った時、恵美の脳裏に浩一の声が聞こえた。叫んでいるようでもあり、悲鳴にも似たような声だった。『あれ・・』恵美は周囲を見回した。ところが驚いたことに、ジュンも同じ動作をしていたのだ。恵美もジュンも同じ感覚を捕らえたのだ。

恵美とジュンは顔を見合わせ頷くと、急いで店を出た。途中浩一の

オフィスに連絡を入れたが、『もう帰られました』と秘書が答えただけだった。ジュンも恵美も浩一の家は知らない。歩道に立ち尽くす二人の前に、信号待ちのタクシーが止まった。どこにでもいるタクシーだが恵美には何故か見覚えがあるように感じたのだ。『そう、あれは・・・』恵美は勢い良くタクシーのドアを叩いた。空車のタクシーはお客と思いドアを開けた。恵美が乗り込むとジュンも後に続いた。そして乗り込んでから恵美に行き先を聞いたのだ。

「どこに行くつもり」尋ねはしたが、言葉は冷静だった。

「私と浩一さんが初めて会った駅」乗り込んだタクシーのマークは、捻挫した恵美を翌朝迎えに来たハイヤーと、同じマークが付けられていたのだ。そして思い出したのが、恵美が拾い上げた定期の駅名。とにかくその駅まで行こうと、恵美は考えたのだ。不吉な予感に恐怖しながら、恵美とジュンは浩一が乗り込んだであろう駅に向かったのだ。その間何度も浩一の携帯に連絡を入れたが、繋がる様子はなかった。

「あん。駄目だわ。全然繋がらない」ジュンがそう言った時、恵美の携帯が音を立てた。着信表示は行方知れずの浩二だった。

「もしもし・・」恵美は恐る恐る口を開いた。

「兄貴は・・」浩二の声は怯えていた。どうやら、3人同時に何かを感じ取ったのは確かなようだ。恵美は全身から血の気が引いていくのを、自分でもはっきりと感じ取った。まるで頭から冷水をかけられた様に身体の心から冷たさが広がった。『浩一さん、何があったの・・・』恵美のその呟きは言葉にはならなかった。

8章（3）

「駅はどこにつけますか」渋滞に苛立ちながらも駅が遠くに見えた時、タクシーの運転手が恵美に尋ねた。恵美は記憶を辿り、浩一と初めて会った改札を思い出した。

「北口につけてください」恵美が答えると運転手は黙って頷いた。交差点を曲がると正面に北口がある。しかし、どこかおかしい。恵美が目を凝らすとあたりには赤い光が、暗く成りかけた駅前の人ごみの影を浮き上がらせていた。その赤い光は点滅しているようにも見えたのだ。恵美の頭に浮かんだ答え。それは救急車両。そして浩一からのシグナル。恵美は自分の直感を信じたくはなかった。恵美とジュンは顔を見合わせた。

早く降りたい衝動に駆られながらも、渋滞する車両が動くのを今か今かと待っていた。ジュンはタクシー用に2枚の千円札を握り締めていた。

人ごみの間から白地に赤いラインの車両が見えた時、恵美とジュンはタクシーから飛び降りた。

浩一が駅に着いた時、時間の早さも有って乗客の顔ぶれはいつもと違って見えた。通勤のサラリーマンが少ないのだ。それは仕方がないことだ。

本来ならば浩一も就業時間中だ。その代り、駅は学生と若い男女でいっぱいだった。浩一は浩二の行き先を思い浮かべながら、人ごみの間を縫って改札を抜けた。頭を金髪に染めた若者に、多くのピアスをつけた派手な女の子。その間を通り抜け、浩一はいつものホームに向け階段を降りていった。ホームも人でごった返していた。雑踏の雰囲気は違うが、浩一は慣れている。ホームの人ごみを避け浩一は白線の近くを歩いた。その時一つのボールが線路に落ちた。ホーム中ほどで騒いでいた学生のボール。ジャージ姿の学生。バスケ

ット部員のようだった。
（ドン！）ボールが落ちると同時に電車が到着し、さらに鈍い音がホームに響いた。ボールは考え事をする浩一の頭に当たってから、線路に落ちたのだ。そしてよろけた浩一を到着した電車が跳ね飛ばしたのだ。浩一はホームの中央あたりまで人にぶつかりながらも、一瞬で飛ばされた。そしてベンチの近くで動きを止めた。僅かに身体を痙攣させているが、頭部からは血が流れ、真赤な血の池を作り出した。
恵美とジュンが駅に着いたのは、丁度浩一がホームから搬送された時だった。野次馬を掻き分け、恵美は救急車両に乗せられるキャスターに飛びついた。白い布が首までかけられ、酸素吸入器で顔は見えない。
「名前は、名前はわかりますか」恵美は救急隊員の腕を揺さぶり叫んだ。一瞬怪訝そうな表情だった隊員は、想像通りの名前を言った。
「所持していた定期の名前では、山田浩一さんとあります」恵美は最後まで聞く前にその場に座り込んだ。
「知人です。状態は」恵美に代わりジュンが尋ねた。
「危険です。電車に撥ねられたようで、心肺停止状態です」ジュンもその場に座り込んだ。恵美の頭にもジュンの耳にも『心肺停止』の言葉が重く伸し掛かった。それに気が付いた警備の警官が、二人を駅前の派出所へと連れて行った。二人は放心状態だった。警官の問いかけにも、満足に答えることが出来ずに、黙って俯いていた。話を聞こうとした警官が静かに首を振ったとき、突然恵美は叫びだした。
「いやー。いやよ。浩一さん。いやよー」派出所は恵美の泣き声で充満した。通りからも中を覗く通行人が後を立たなかった。ジュンはゆっくりとだが放心状態から目覚め始めた。目が頬を伝う。ジュンは涙を拭いて、恵美を抱きかかえた。恵美は激しく泣き続けた。ジュンも泣きたい気持ちを抑え、恵美をきつく抱きしめ、警官に尋ねた。

「は、搬送先は、わ、わかりま・・すか」精一杯の声だった。
「搬送されれば、連絡が来ます。気を落とさないで下さい」警官の優しい言葉も、今の二人には無意味な優しさだった。恵美はジュンの胸でなき続けた。ジュンも声こそ出さないが、次々に涙が頬を流れた。道を尋ねに来た人も、二人の存在で何も言わずに立ち去る有様だ。
15分ほどした時に、搬送先から連絡があった。二人は病院の名を聞くと、警官の制止も聞かずに飛び出し、タクシーに飛び乗った。ジュンは浩二に連絡を入れた。
「兄貴・・・・」浩二はそれ以上言葉を発しなかった。それでもジュンは、伝えることだけは浩二に伝えた。電車に撥ねられたこと。搬送先の病院名。そして現在、心肺停止状態だと。ジュンにもそれが今言える全てだった。
浩二は東京行きの特急電車の中で泣いた。『なぜ、兄貴が。自分のせいか・・』そう思うと涙が止まらなかった。もはや人目など気にも止めていなかった。それでも社の重役として、しなければならないことを実行した。まず浩一の秘書に連絡を入れた。秘書は力なく答えながらも浩二の指示を繰り返した。
「では、今入っている予定を全てキャンセルし、業務の引継ぎを営業部長に一任します。よろしいですか」秘書の声も、浩二の声も震えていた。
それから自分の秘書、そして父に連絡を入れた。気の強い父だが、さすがに出てくる言葉が見つからないようだ。かなり長い沈黙のあと「わかった。病院に顔を出す」とだけ答えた。浩二は浩一の身を案じながら、窓の外を流れる夜景をぼんやりと眺めるしか出来なかった。
しかし、頭の中では幼い頃からの思いでが次々と蘇り、堪えきれずに浩二は俯き、流れる涙を袖で拭い去った。
恵美とジュンが病院に着いた時には、既に緊急手術が始まっていた。廊下のソファに腰を下ろしたが落ち着かない。恵美はまだ小さ

な嗚咽を漏らしていたが、ジュンは一旦病院の外に出た。『来夢』のママに電話をするためだ。ママの驚きも半端ではなかった。どうにか搾り出した言葉は

「浩二さんは」その一言だけだ。

「こちらに向かっています」ジュンも答えは一言。ジュンが待合廊下に戻ると、浩一の父が来ていた。恵美は泣き疲れたのか、ソファに横になっていた。浩一の父は怪訝な表情で恵美を見下ろしている。仕方がない。浩一の父、康之は恵美を知らないのだ。ジュンは駆け寄り康之に声をかけた。

「会長・・・」社長は外部の人間を引き抜いたため、康之は会長職に就いていた。

「おお、ジュンか・・」声にはいつもの張りも元気もない。当たり前のことだが、目まで真赤に染めていた。康之は目だけで恵美を見た。ジュンは躊躇った。どう紹介しようか迷ったのだ。浩一が話してないのであれば、余計ないことは言えない。そう思ったのだ。

「店の子です」咄嗟に出た答える。

「新しい子か・・」その言葉だけで、恵美への興味は失せていった。やがて、浩一の会社の重役や秘書。恵美の会社からも専務と部長が駆けつけた。浩二が連絡を入れた後、噂はたちまちに広がり、恵美の会社にも知らされたのだ。浩二の失踪の時といい今回の早い対応といい、どうやら恵美の会社と通じている者がいるようだった。恵美はゴソゴソと起きだしたが、立ち上がることも出来ずに、ソファの隅に身を寄せるだけだった。そんな行動を、浩一の父、康之は、じっと見つめていた。ジュンと恵美は抱き合い、じっと下を見ていた。一通りの挨拶を済ませた専務が、恵美に気がつき駆け寄った。浩一の秘書も恵美に挨拶を送った。康之は首を傾けた。それだけではない。遅れて現れた浩二の秘書も、軽く頭を下げたのだ。

「一緒だったのか」専務は恵美に尋ねたが、無言で首を振るだけだった。先ほどから恵美に興味を持ち始めていた康之は、この会話を聞き漏らさなかった。

「ジュン、ちょっと」康之に呼ばれたことで、恵美の素性が『ばれた』とジュンは思った。

8章（4）

「彼女は誰かね」康之の質問はジュンの思っていた通りだった。下から覗き込むような疑いの眼差しと、意識してゆっくり話す特徴は康之のいつもの癖だった。康之との付き合いは長い。ジュンが『来夢』で働き出した時には、康之は既に常連だった。その上、二人の息子を連れてくるとの事で、かなり人気も有ったのだ。もちろん二人の息子目当てが多かったが。そんな時、康之が初めて指名をしてくれたのだ。それからはいつも指名を入れてくれて、二人の息子とも仲が良くなった。それからもう五年になる。ジュンが黙っていると、康之は言葉を続けた。

「店の子ではないのだろう。浩一とはどういう関係かね」はっきり言えば、ジュンは答えを持ち合わせてはいない。浩一からも恵美からも聞いたわけではないのだ。確かに仲は良い。だが、恵美は浩一と浩二、二人と仲がいいのだ。特に浩一と仲が良くても、恋人、あるいは付き合っているとは、言えなかった。

「仲はいいですが、詳しくは・・・」康之は、ジュンの答えに満足しなかった。

「あの、様子では普通とは思えん。付き合っているのかね」集まっている人々は、皆、ひそひそ話をしているが、恵美はじっと何かに耐えているように見える。それは心から浩一を心配しているようだ。

「はっきり聞いたわけでは無いのですが、お互いに好き合ってはいるようです」ジュンはあくまで推測に過ぎないと繰り返した。

「そうか・・・、うむ、ありがとう」康之が素直にお礼を言うのは珍しかった。浩一は浩二と違って女性には疎い。変な女に騙されないか、康之にはそれが心配だった。しかし、見たところ普通のお嬢さんにも見えた。恵美はジュンが隣りに戻っても、顔すら上げずに耐えていた。一時間が過ぎた頃、浩二が病院に姿を現せた。浩二は康之の所に駆け寄った。

「父さん・・・」浩二は康之の手を握った。康之も無言で浩二の肩を叩いた。そしてそのあと康之が見たものは、会社の重役、秘書からの挨拶など一切無視して、恵美に駆け寄る浩二の姿だった。そして抱き合う恵美とジュンと浩二。『浩二まで認めた女性か・・』それを見ながら康之は一人呟いた。

さらに二時間が過ぎようとした時、手術室から看護婦が現れた。

「御家族の方は、いらっしゃいますか」一同は顔を見合わせた。

「私は、父親です」康之は看護婦の前に歩み出た。

「弟です」それを見て、浩二も立ち上がり一歩前に出た。恵美はすがるような目で浩二を見たが、浩二は座っているように両手で合図を送った。二人は看護婦と共に、手術室へと入っていったが、恵美もジュンも気がかりではない。当の浩一は出てくる気配もない上に、浩二と父親はどこかに連れて行かれたのだ。待っている人々の中でもざわめきが起きはじめたが、恵美は黙って自動扉を見つめていた。二人は十分ほどで戻ってきた。浩二が恵美に話しかけようとした時、康之が浩二を引き止めた。

「あとで、話がある」その一言だけを残し、康之はその場を立ち去った。

「どうなの」痺れを切らしてジュンが尋ねた。恵美は黙って浩二を見ている。たったの十分だが、これほどまで浩二に会いたいと思ったことは無かった。浩二は二人に頷くと、皆に聞こえるように話し始めた。

「皆さん、ご心配をお掛けしました。命に別状はありません。今は、集中治療室にいるため会えませんが、経過が良ければ一週間ほどで一般病棟に移されるそうです。今日はありがとうございました」そう言って頭を下げた。恵美もジュンも力が抜けたように、ソファに寄りかかった。随分と力が入っていたようだ。身体のいたるところで痛みが起こった。見れば手のひらは真っ白。ずっと、握り締めていたせいだろう。安心と同時に極度の疲労と脱力感が二人を襲った。皆がその場を去るのを見届けてから、浩二は恵美に向き直った。

「恵美さん、少し付き合ってもらえますか」恵美は頷いた。恵美に手を貸しゆっくりと立たせると、浩二はジュンにも話しかけた。
「君もいいかな」ジュンの見当はついていた。康之の命令だろうと気づいていた。案の定、浩二が二人を連れて行ったのは実家。浩二の実家に向かうタクシーの中では、誰一人として口を開かなかった。恵美は心底疲れていた。本当ならば家に帰って休みたいところだ。しかし、浩一の両親とは会っておく必要があった。なぜならば、一般病棟に移った際には、毎日浩一に付いていようと思ったからだ。もちろん、仕事も辞めるつもりだった。ジュンはタクシーの中で考えていた。『なぜ、私まで浩一の異変を受け取ったのか』その疑問はずっと頭にあったが、答えの出ないままになっていた。『もしかして、浩一さんを好きなの』自分の気持ちにさえ気が付かない。『そんな馬鹿みたい・・・』流れる夜景を見ながら、ジュンは考えを巡らしていた。浩二は聡子と知恵を思い出していた。しかし、恵美を前にすると、その気持ちが偽りであると思い知らされた。『やはり、恵美さんが好きだ』浩二の素直な気持ちは、はっきりとした。ただ、伝える術はもう無い。今は兄のことだけ考えようと、浩二は固く胸に誓った。父と自分と二人しか聞かされなかった話の為に・・・。

9章（1）

浩二の家は下町の一角にあった。土地は広いが母屋はいたって平凡で、取り立てて目立つ家では無い。ただ応接間だけは広く取ってあるようだった。

「初めまして、浩一の父です」康之は恵美の正面に腰を下ろした。二十畳ほどの部屋には、対面式の応接セットが配置され、テレビと本棚、そしてサイドボードがあるだけだった。恵美は深く頭を下げて自分を紹介した。恵美の紹介が終わっても、康之はじっと見つめるだけで、何も言わない。

恵美の緊張は高まった。

「父さん・・・」とうとう浩二が口を開いた。恵美への無言の攻撃に感じたのだろう。その時、不意に恵美の後ろから声がした。

「まあ、良くいらっしゃいました」浩一の母だろうか、笑顔の女性がお茶を持って現れた。こんな時に笑顔になれるものかと恵美は驚いたが、その笑顔は作り笑いには到底見えなかった。

「うむ、うちの家内です」」茶碗に手を伸ばし、一口お茶をすすってから康之は恵美に尋ねた。

「浩一とはどういう関係ですかな」落ち着いた口調だが、意味の重さを恵美は痛感した。

「お付き合いさせて頂いています」恵美ははっきりと答えた。この先のことを考えれば、はっきりと言わなければと思ったのだ。

「僕も、保障します。彼女はとても良い女性です」浩二が横から口を出すと、康之は浩二を見据えた。

「お前の話など、聞いてはいない。その程度の事は少し話をすればわかることだ」言葉は荒いが、言っている言葉は恵美を喜ばせるには十分だ。

「浩二、お前も聞いただろう」康之の言葉は急に柔らかな口調に変わった。

「・・・・はい」浩二は俯き答えた。恵美もジュンも二人の会話の意味が掴めなかった。
「恵美さん・・・」そこで、康之の口が塞がった。必死に何かを考えているのが、傍から見ても痛々しかった。恵美の脳裏に不安がよぎったが、あえて意識を遠ざけた。
「浩一を、想って下さるのは、ありがたい。しかし、お付き合いはこれまでにしてもらいたい」康之の気持ちは想像すら出来ないが、言葉には苦悩と悲しみが含まれていることを、恵美は敏感に感じ取った。
「あの、どういうことでしょうか、それでは・・・」恵美が話し終える前に、浩一の母が口を挟んだ。
「貴方、浩一の意見も聞かずに、お嬢さんに失礼ですよ」口調は厳しいが、それは恵美に対する優しさだと、誰もがそう思った。
「しかし、お前・・、浩一は・・・」康之は言葉を濁した。
「恵美さん、浩一を好いて下さってありがとう。夫の無礼も許してね。でも、悪気は無いのよ」浩一の母は恵美に頷くと共に、ゆっくりと目を瞑った。そして康之に振り返り話を続けた。
「貴方の気持ちも理解した上で言いますが、せめて浩一の気持ちも聞いてあげて下さい」浩一の母は康之に語りかけるように話した。
「しかし、浩一は・・」康之はぐっと下唇を噛み締めた。
「私には、わかるの。あの子は絶対元気になります。母親ですもの。しかも、女性のお友だちなんて初めてなの、私は嬉しいの。浩一だってきっと、嬉しいはずよ」そう言うと浩一の母は遠くを見つめるような素振りを見せた。
「浩二、代わりを頼む」康之は浩二に見向き直り、膝を軽く叩いた。浩二も、父、康之の気持ちが解かるのか、しっかりと頷き、恵美の顔を見据えた。二人が看護婦から聞かされた話だと、恵美はすぐに理解した。ジュンも隣りで緊張の面持ちを隠しきれなかった。
「恵美さん、よく聞いてください、兄は・・・、兄は恐らく一生歩けません」浩二は一旦言葉を区切った。そして恵美の顔を覗き込ん

だ。
ところが恵美は動揺すら感じさせなかった。浩一の母の言葉が恵美の心の動揺を抑えたようだ。『母親だからこそ感じる何かがある』恵美もそう思った。
「背骨に受けた損傷が激しいらしく・・・・下半身に麻痺が残る確立が高いそうです」浩二は気丈な態度の恵美に、最悪の場合に起こる状況を説明した。
「では、残らない確立もある訳ですね」恵美はあくまでも気丈な態度を崩さなかった。
「恵美さん・・・」浩二は、恵美の意外な一面を垣間見た気がした。まるで自分の母と同じような気丈さで、恵美はしっかりと対話しているのだ。その態度には、浩二だけでなくジュンも驚いた。
「私は、それでも構いません。元気になるまで、浩一さん付き添わせてください」
「恵美さん、それでは仕事が・・」
「辞めるつもりです」恵美は躊躇することなく即答した。それは恵美の決心が固いことを物語っていた。
「そんな・・」浩二は、恵美との接点が消えてしまいそうで怖かった。と同時に、まだ恵美さんを好いている自分にも驚いた。
「お父様、お願いします」恵美は康之に向き直り、深く頭を下げた。それまで、じっと聞いていた康之が恵美に言った。
「・・・うむ。恵美さんの気持ちは十分理解しました。では、付き添いをお願いします」そうして、頭を下げた。それから浩二に向き直り、
「浩二、恵美さんを雇いなさい」と言ったのだ。
「え？」浩二は一瞬驚いた。
「仕事を辞めて付き添ってもらうのだ、当たり前なことだろう」康之は恵美の生活を心配したのだ。
「いいえ、お父様そんなことは・・・」確かに恵美の生活は楽ではない。ここには居ない浩二のせいだ。しかしお金を貰うつもりなど、

端から無いのだ。ただ、側にいたいと願っただけだ。
「恵美さん、良いんです。どうせ誰かを頼むつもりでした。私も浩二も忙しい体、そして・・・」康之は妻の方にチラリと目を向けた。
「母は、目が見えないんです」浩二が話の続きを受け取った。恵美とジュンは目を丸くした。お茶を運んできた時にも、話をしている時にも、そんなことは微塵も感じなかったのだ。目が見えないと他の感覚が鋭くなる。そんな言葉を思い出したが、浩一の母はそれ以上のものを持っている様に恵美には感じられた。
「驚かれたでしょう。でも、子供の頃からですから」浩一の母に、恵美は信頼と尊敬の念を抱き、浩一が元気に退院するまで、毎日付き添うことを誓った。ジュンも出来る限りは病院に顔を出すとは言ったが、何故そこまで自分も言ったのか理解に苦しんだ。康之の立派な態度か、恵美の熱心さか、浩一の母の心がそう言わせたのか、それははっきりと答えの出るものではなかった。ただ、ジュンも浩一に付き添いたいと、切に想ったのだ。

9章（2）

翌朝、恵美は辞表を持って出社した。浩一が一般病棟に移るまで、どの程度の期間が掛かるかわからない。その前に片付けなければならないことが山積みだった。急な退社はみんなに迷惑がかかる。せめてちゃんとした引継ぎだけはしたかったのだ。雅子や課長、そしてプロジェクトの面々にも、きちんとした挨拶もしたかった。無論部長や専務は止めるだろう。しかし、恵美の気持ちは既に固まっていた。この早い行動には別の理由も有った。京子のことも心残りだったのだ。医師の話では、長期入院の必要は無いと言っていた。退院すれば田舎に戻る京子に、帰る前にもう一度会いたいとも思っていた。そして最大の問題は浩二。恵美の元彼の浩二だ。本当はもうどうでも良かった。でも、京子のことを考えると、頬に一発食らわせてやりたい気持ちで一杯だった。散々自分を馬鹿にし翻弄した挙句、友人の京子にまで害を及ぼした極悪人。そう考えると、浩二だけは何があっても許せなくなった。浩一の両親にも認められたせいか、恵美は凛とした態度で課長に向き合った。

「恵美君。どうしたんだ」課長には昨日の騒動は耳に入っていないようだ。結局は課長も歯車のひとつであり、必要時以外は蚊帳の外なのだ。恵美はそう思ったが、課長には罪はなく普通に接してくれていたのだ。恵美は大げさと思えるほどの笑顔を作った。

「課長、何も言わずに納めてください」その声は出社している全ての課員に伝わるほどだった。もう、隠し事は必要ないと思ったからだ。課長は眉間に皺を寄せ、恵美が差し出した封筒を受け取った。そして書面の字に驚きの声を上げたのだ。

「恵美君、こ、これは、辞表じゃないか」その声に課員全員が振り向いた。中には、興味本位で聞き耳を立てていた課員もいたが、恵美の威風堂々たる姿に唖然としていた。

「もちろん、急には辞めません。ちゃんとした手続きを踏まえ、業

務引継ぎを終了させるつもりです」恵美の言葉には文句が付けられない。無責任な辞め方ではないのだ。課長は黙って封筒を受け取るしかなかった。
「わかった。早急に処理をしましょう。でも、理由はどうしますか。退職理由は人事部で聞かれますが」
「結婚すると言ってください」飲みかけのお茶をこぼす者、ペンを落とす者、課員の反応は様々だった。恵美はそんな外野の反応をすべて無視し、深く頭を下げると経理課から出て行った。次はプロジェクトのメンバーだ。メンバーは昨日の出来事を知っている。どんな反応を示すのか、内心波乱を期待する自分に正直驚き、つい、笑ってしまった。案の定、部屋に入るなり出社している社員が集まってきた。
「恵美さん」孝子だ。一番厄介なのが皮切りか、と思ったが、孝子の口から出た言葉に恵美は驚いた。
「ごめんなさいね」すまなそうに胸の前で手を合わせ、悲願するような顔で恵美と向き合った。
「なにがですか」恵美は拍子抜けた感じで尋ねた。
「昨日、部長から全て聞いたわ。無理やり引っ張ってこられたのね」どうやら昨日恵美が部屋を出た後、部長は皆から槍玉に上げられたようだ。一波乱の覚悟していた恵美は、照れくさそうに顔をしかめた。
「いえ、良いんです」そうは言ったものの、残りのメンバーもしきりに頭を下げていたのだ。しかし、これで辞める理由も堂々と言える。恵美はそう思い背筋を伸ばして話を始めた。
「そこで、皆さんに報告があります」恵美はみなの顔を見回した。
「なんですか」孝子が尋ねた。しかしその表情は怖がっているようにも見えた。仕返しされるとでも考えたのか、何度も意味の無い瞬きを繰り返した。
「私、会社辞めます。お世話になりました」恵美の笑顔さえ不気味に思えただろう。メンバー全員が一瞬身体を硬直させたのだ。

「何で、急に」どうにか声を出したのは、昨日食って掛かった研究員だ。
「山田副社長のためです」にこやかな笑顔で答えたが、研究員の息を呑む音まで聞こえてきた。
「部長は納得したの」またも、孝子だ。今度ははっきりと不快な表情を作っている。無責任とでも思ったのだろう。
「私は経理課員です。今朝、直属の上司に手渡し、受理されました」そんな孝子を無視するかの様に、恵美は元気に答えた。
「ここはどうなるの」孝子も所詮は皆と同じだった。恵美は臆することなく答えた。
「安心してください。直ぐには辞めません、ちゃんと引継ぎをしてから辞めますから。もちろん部長が新しい課員を必要としていればですが」恵美の答えに誰も反論できなかった。昨日の話を聞いていたからである。利用するための道具でしかないことも解かっていた。その利用価値のある道具がなくなったとき、利用価値の無い道具を用意するかと言えば、答えはノーだ。そのことは誰もが理解していた。新しい経理課員は補充されないだろう。メンバー全員の意見は言わずとも一致した。
「おはよう。恵美君ちょっと」そこに部長が顔をだし、恵美に手招きをした。しかし恵美は動こうともせずに、自分のデスクに腰をおろし大きな声で言った。
「部長、どうぞここでおっしゃってください」恵美は笑っていた。部長はしばらく返事も出来なかった。
しかし、その場の雰囲気から自分の不利を悟ったのか、ゆっくりと恵美に近づいていった。

9章（3）

雅子はショックを受けたようだ。京子に続いて恵美も辞めると聞かされたのだ。恵美は雅子は不憫に感じた。基本的人間性は良いのだが、詮索好きと、噂好きから恵美と京子以外に友人は居なかった。昼食をとりながらもしきりに恵美に悲願した。

「まだ、辞めること無いじゃない～。結婚が決まったら辞めなよ～」今まで雅子が見せた事のない弱さに感じた。

「ごめんね。でももう決めた事なの」恵美は浩一の退院後のことも考えた。浩一の母の言うように、必ず元気になるだろう。しかしその後の期間も、浩一に付いていようと思ったのだ。恵美の心の中では、浩一が社会復帰するまでの仕事と決めていたのだ。その先・・・。

笑みはその先は、考えなかった。意識的に頭から除外したのだ。今に気持ちを集中するためだ。もしもその集中力が無くなれば、恵美は立ってもいられなかっただろう。今の段階では、さすがに雅子には浩一の事故の話は出来ないでいた。それこそ無関係な人にまで話が広がりそうだ。ただ結婚話は課長にも言ってある。そのことだけを話したのだ。

「とにかく、すぐに辞める訳ではないし、辞めても友人でなくなる訳じゃないよ」

「そうね・・・。そうよね」雅子は納得出来ないような様子だが、恵美に押し切られた。ここでも恵美の強さが浮き彫りにされた。

「いいわね、将来は副社長婦人か～」雅子も普通に結婚を夢見る女。大げさではないため息が、雅子の口から知らずに漏れた。

午後には専務が血相を変えて恵美の元を訪れた。恵美は予期していたために、それほどの驚きは見せなかった。

「一応はおめでとうと言っておこう・・・」それから専務は声を低くし、恵美を部屋の外に連れ出した。

「彼がよくなるにしても、かなり先の話だろう。まだ、早いのでは？」恵美は思わず笑ってしまった。恵美の想像を、丸写ししたような受け答えだったからだ。

「専務。私、彼が元気になるまで、付き添うことにしたんです。何か問題でもありますか」恵美は胸を張った答えた。

「いや、問題などありはしないが・・・・」専務にはそれ以上言えなかった。プロジェクトは順調に進んでいるが、今直ぐ結果が出るもの出見ない。

それまで恵美を縛り付けるのは、もはや無理だと悟ったようだ。そして続いた言葉は、まさに陳腐で大きなお世話以外の何者でもなかった。

「生活費はどうする気かね」恵美は笑いながら平然とその場を立ち去った。残された専務は硬直したまま動かなかった。専務は自分でも気づいたのだ、いかに愚かな発言だったかを・・。

昼は仕事の残務整理に追われ、夜は浩一の病院に通った。ＩＣＵには立ち入れないが、ガラス越しの対面だけは許された。それでも浩一には、恵美の来院はおろか、目も開けない様子だった。看護婦の話では、徐々に意識は戻ってきているらしい。手を触れば僅かに動きき、網膜反応も回復しつつあるらしいが、いまだ昏睡状態との話だった。それでも毎日面会の許す限り恵美はガラス越しに佇んだ。包帯を巻かれた頭部。ベッド脇の数々の機械。そして点滴チューブ。元気な姿はどこにも無い。それでも恵美は涙すら流さなかった。じっと見つめ続けて帰る恵美は、看護婦の間でも不思議な人と噂されていた。

恵美は毎日一人アパートで泣いていたのだ。病院では、絶対に泣かないと誓ったためだ。もしも泣き顔の時に浩一の意識が戻ったら、恵美は顔を合わせられないと思ったのだ。浩一の帰還の時には、笑顔で迎えたかったからだ。浩一の母のような大きな笑顔で・・・。

五日目。ようやく残務整理が片付いた。大方の予想通り、恵美の後任はプロジェクトチームに来ることは無かった。その分引継ぎ作

業が無いために、予想した日よりも恵美の退社は早まった。利用価値の無い道具は、チームに持ち込まれなかったのだ。最後の日には、チームのメンバーが恵美に優しい言葉と陳謝を申し出た。孝子からの言葉は、知らなかったとは言え疑いの目と、攻め立てたことへの謝罪と、この後の幸せを願う言葉だった。恵美は流れる涙が止まらなかった。張り詰めていた糸がプツンと切れたように、溜め込まれた感情が溢れだしたのだ。

「恵美さん、頑張ってね」孝子の最後の言葉は短かったが、こころのこもった優しい口調だった。

涙を拭いて経理課に現れると、一目散に雅子が駆け寄ってきた。

「とうとう、辞めちゃうのね」雅子は恵美に抱きつき泣き出した。その行動は課員の気持ちに変化をもたらせた。雅子は虚勢を張っていたに過ぎなかったのだ。雅子の今後は、課員とも上手くやっていけることだろう。恵美はそう思うと、雅子への不憫な気持ちが和らいだ。

「お疲れ様、書類は用意してあります。お幸せに」課長から退職に必要な書類を受け取り、恵美は課員全員に頭をさげた、長いようで短い時間。恵美の経理課員としての仕事は今、しっかりと幕を閉じ終わりを告げた。

9章（4）

恵美は会社を出た途端に、涙を流した。自分の中では割り切っていたはずなのに、実際に辞めてしまえば寂しさが募った。社屋を振り向く恵美の脳裏に楽しい思い辛い思い、そして京子と雅子の顔が蘇った。この建物はその全てを包んでいるのだ。毎日通った建物・・・。恵美は居たたまれなくなり走り出した。いつもは電車で通う病院も、今日だけはタクシーを利用した。泣き顔なのが自分でも分かったからだ。恵美はタクシーの中で更にもう一泣きした。運転手は怪訝な表情でルームミラーで見ていたが、やがて涙を拭き化粧を直す恵美を見て、運転に注意を戻した。

「お世話になります」いつものナースステーションを通り抜けようとした時、当直の看護婦に恵美は呼ばれた。

「おめでとう。今朝、意識を取り戻し、夕方には一般病棟に移ったわよ」看護婦の笑顔が、天使にさえ見えた。

「本当ですか。ありがとうございます」腰が折れそうなほどお辞儀をすると、急に振り向き立ち去ろうとした。気持ちは既に一般病棟に向いていた。そんな恵美に看護婦はあわてて声をかけた。

「病室は、三階の３０２よ」恵美は駆け出しそうな足を止めて振り返り、小さな照れ笑いを浮かべた。焦る気持ちを抑えられずに、病室さえ聞くのを忘れたのだ。

恵美はまたも腰が折れそうなほどにお辞儀をすると、小さく頷き、そして踵を返し立ち去った。病室入り口のネームプレートを確認し、恵美はゆっくりと扉を開けた。特別病棟らしく、ベッドは一つそして小さな応接セットも配置されていた。恵美が顔を覗かせると、座っていた浩二が気がついた。

「恵美さん、どうぞ入ってください」恵美は軽く頭を下げると、遠慮がちに病室に入った。浩一の父、康之も居たが、二人に遠慮した訳では無かった。特別病棟に気が引けたのだ。よく芸能人や政治家

などは使うらしいが、恵美は今までの付き合いで、そんな人種との接点が無かった。因って特別病棟とは無縁だったのだ。
「こんばんは。お邪魔します」恵美は浩一のベッドに駆け寄りたい気持ちを、必死に抑えた。ほかにも、浩一の会社の重役や秘書が居たからだ。もちろん紹介されたわけではない。見るから重役顔なのだ。応接テーブルに書類を広げて、なにやら相談中の様子だった。そんな恵美を康之が気遣った。
「さあ、恵美さん、浩一に会ってやって下さい」恵美は応接セットの脇をすり抜け、浩一のベッドの側に近づいた。浩一の頭には、まだ包帯が巻かれている。その包帯は顔の鼻頭辺りにまで及んでいた。目の周りは開かれていたが、光の加減で浩一の目はよく見えなかった。
「今は、眠っています」康之が小声で教えると、静かにストールを引き寄せてくれた。ストールに腰を掛け、恵美は浩一の顔を覗き込んだ。
確かに眠っているようだ。静かな寝息が聞こえ、瞼は閉じられていた。胸はゆっくりと上下運動を繰り返している。恵美は浩一の手を取った。
あの時と同じ、大きくて柔らかく暖かい手。恵美の頬を涙が伝った。五日間ガラス越しに見続けた姿。やっと触れることの出来た嬉しさ。そして今日の退社。涙は一気に溢れ出した。我慢を重ねた末の浩一との対面。恵美は浩一の手に優しく口付けを残し、病室から逃げるように飛び出した。みんなが居る手前、泣きたくても泣けない。しかし涙は止まらない。そんな心の葛藤に耐え切れず、恵美は飛び出したのだ。
　廊下の隅。全面に張られた大きな窓に寄りかかり恵美は泣いた。声を出して泣いた。ガラスに映る恵美も泣いていた。ガラスの恵美と抱き合うように、その身体は床に崩れた。泣きながら恵美は自分に向かい話しかけた。『今日は泣かせて、明日から泣かないためにも』浩一の前で涙は見せられないと、恵美は固く自分に言い聞かせ

た。どのくらいの時間泣いていたのか解からない。ふと、背後から声をかけられた。
「恵美さん・・・」白いハンカチを手に、浩二が立っていた。浩二は恵美から見えないところで、泣き止むのをじっと待っていたのだ。
「浩二さん・・・」恵美は浩二にすがりついた。収まりかけた涙がまたも溢れた。浩二は恵美を抱きしめようを肩に手を回した。が、浩二は静かに手を下ろした。『恵美さんは、ただ、泣きたいだけなんだ』そう言い聞かせ、抱きしめたい衝動を必死に抑えたのだ。そこでも浩二はじっと待ち続けた。気持ちは何度も恵美を抱きしめていた。気持ちだけは・・・。やがて恵美の嗚咽が収まり始めた時、浩二は顔を覗き込むように恵美に話した。
「さあ、兄に付いてやって下さい」恵美は受け取ったハンカチで、涙を拭いしっかりと頷いた。
「明日、昼にはジュンも来ます。そのとき社のほうに来てもらえますか。手続きしたいので」康之に雇えと言われた以上、正式な手続きを踏む必要があった。形式上は浩一の第2秘書扱いにするつもりだったのだ。そのため、人事課や秘書課にも顔を出してほしかったのだ。無論、そんな面倒な手続きを取らなくても、雇い入れは簡単だった。しかし浩二には、これから恵美が担う役目はことのほか重要に思えたのだ。
大げさに言ってしまえば、社の運命を担う存在になるのでは、と言う予感さえあったのだ。その予感はどこから来るものなのか浩二にも、皆目見当が付かなかった。恵美が病室に戻ると、申し合わせたように皆が一斉に立ち上がり、社の重役と康之までもが入れ替わるように出て行った。
「恵美さん、浩一をよろしくお願いします」通りすがりに康之が残した言葉。その言葉をかみ締めるように、恵美はストールに腰掛けて浩一に寄り添った。病室には二人だけ。静まり返った病室には、機械の微かな音と浩一呼吸する音。空調から聞こえる僅かなモーター音。それらの音に同調するかの様に、浩一の手を握っていた恵美

はやがて静かに寝息を立て始めた。

10章（1）

恵美は肩を叩かれ眠りから覚めた。重い瞼を無理にこじ開けようとしたが、涙で目が固まったのか、なかなか見ることが出来なかった。その相手は、しきりに何かを言っていた。声のするほうに目をやると、白い衣装がゆらゆらと移動を繰り返していた。恵美は一瞬焦った。それが誰なのか、必死に確認したいが視点が合わない。思わず恵美は立ち上がろうとした。そのときフワリと柔らかい布が恵美を包んだ。そして耳元に声が聞こえた。

「風邪を引きますよ」慌てて目を擦ろうとした時、恵美の右手は僅かな抵抗感を捉えた。自由な手の指で目を擦り、もう片方の手に視線を移した。

そこには、恵美の手をしっかりと握り返す浩一の手があった。浩一は眠りながらも恵美に応えていたのだ。その時また声がした。

「随分とよくなってるわ。朝にはお話が出来ますよ」看護婦は点滴の交換をしていた。そして恵美の肩には、毛布が掛けられてあった。

「ありがとうございます」恵美がお礼を言った時、看護婦は新しい点滴のビンに針を差し替えたところだった。

「起こしてごめんなさいね。でも、うなされていたから・・」そう言いながらも、看護婦の手は休まず動いていた。恵美は夢を見ていたことを思い出した。内容は覚えていなくとも、後味の悪さだけは残っていたのだ。胸に何かが詰まった感じが取り払われてはいなかった。

「そうそう、皆さんは、ソファで眠ってますよ。よかったら、簡易ベッドもありますし・・」脈を取りながら看護婦はベッドの下を覗き込む仕草をした。恵美が覗くと、確かに組み立て式のベッドが収納されていた。

「疲れるでしょう。腰が痛くなりますよ」血圧計に空気を送りながら看護婦は言った。そう言えば恵美の腰は固まったような感じだ。

ちょっと背筋を伸ばすと、尾񠴾骨から首筋に掛けて痛みが走った。恵美は思わず声を上げてしまった。
「イタ、イタタタタ・・・」看護婦の小さな笑いが、恵美の気持ちを解きほぐした。ゆっくりと背骨を伸ばし軽くまわすと、腰のあたりで骨がなった。その音に恵美も思わず吹き出した。看護婦は血圧計を仕舞いながら恵美に言った。
「いい。先は長いわ。付いていたい気持ちも解かるけど、貴方自身の身体も大事にしないと、看護は勤まらないわ。無理はしないでね」恵美は大きく頷いた。その通りだと思ったのだ、恵美は浩一の手の指をゆっくりと広げ、右手を自由にした。肩もパンパンに張って首まで痛かった。
「ありがとうございます。そうですね。私が倒れたら、しゃれになりませんね」恵美は自由になった右肩を、くるくると回し凝りをほぐした。
「そうね、ロッカーには予備の毛布もありますから、ゆっくり休んでくださいね。私達は二時間ごとに巡回で伺いますから、安心して寝てください」
そう言って看護婦は病室から出て行った。恵美は頭を下げ見送った。浩一を見ると静かに眠っている。恵美は病室を見回した。まだよく見ていないのだ。入り口の脇の扉を開けて見た。そこは浴室になっていた。よく見るユニット式の浴槽だ。ただ、普通の大きさではない。恵美のアパートの2倍の広さがある上に、手摺や自動で入れるような椅子が括り付けてあった。その向かいには洗浄器付きのトイレ。並びの壁には簡単な調理調理器付きの流しが取り付けられている。ソファの前にはテレビもあり、さながらマンションのワンルームでも通用しそうだった。考えてみれば、恵美は着替えさえ持って来ていなかった。
しかも顔は崩れた化粧のままだ。看護婦はさぞ驚いたかもしれないが、表情にも言葉にもそんなことは微塵も見せなかった。時間は二時を回ったところだ。

恵美は時計を見ながら迷った。この時間ならば、道は空いているしタクシーも呼べば来るだろう。意識の戻った浩一と会うのに、今の恵美の姿は自分でもひどく思えて仕方なかった。そんな考えを巡らしていると、ドアが静かにノックされた。恵美は不審に思った。看護婦ならば勝手に入ってくるだろう。しかし、見舞い客としては時間が非常識だ。恵美はドアを開けずに声を掛けた。

「どちら様ですか」病院ではおかしな対応だとは思ったが、恵美はほかの言葉が思いつかなかった。

「私、ジュンです」ドア越しの声を聞いて恵美は胸を撫で下ろした。

「こんな時間にどうしたんですか」恵美は嬉しい反面、ジュンの不可思議な行動に戸惑った。

「仕事帰りよ。浩二さんに頼まれたの」上着を脱いだジュンの衣装は、この前一緒に買った薄いブルーのドレスだった。

「恵美さんが一人だから、顔を見せてやってくれって・・・。お陰で、酔いを醒ますのに苦労したわ」ジュンの話では、十一時頃に連絡があったようだ。そしてジュンは紙袋を恵美に手渡した。浩二のお膳立てだとわかると、恵美は安心した。

「お寿司よ。食べてないんでしょ。今、お茶入れるから」ジュンは手馴れた様子で流しに向かった。恵美はそのときようやく自分が空腹なのに気が付いた。恵美は受け取った紙袋をテーブルに置いて、ソファに腰を下ろした。ジュンは二つの茶碗にお茶を注ぎ、テーブルに置いた。

「ありがとう。ごめんなさい」恵美は頭を下げた。

「いいのよ、浩一さんには、私だって世話になってるんですもの」そうは言ったが、ジュンは浩一に近寄りもしなかった。その何もしない行動が、恵美には不思議だった。わざと避けているように感じたのだ。普通お見舞いならば、真っ先に顔を見るはずだと思ったのだ。ところがジュンは平然とお茶を飲んでいる。恵美は何か胸に引っかかるものを感じながらも、寿司折の紐を解いた。

「あら、ひどい顔ね。食べたら、シャワーでも浴びたら」寿司を食

べる恵美の顔を覗き込みながら、ジュンは眉をひそめて言った。
「でも、着替えが・・・」恵美は困ったように答えた。
「いいわよ、代わりについてるから、食べたら取ってくれれば」
「良いんですか。疲れているでしょう」確かに着替えは必要だ。明日は浩二の会社にも顔を出さなくてはいけない。恵美の心は揺れた。
「気にしないの、恵美さんが戻ったら、私は帰るから」ジュンは嫌な顔を見せずに、淡々と答えた。恵美はジュンが疲れているだけだと自分に言い聞かせ、先ほどの疑問を振り払った。
「じゃあ、お願いします」ジュンは笑顔で頷いた。恵美は食べ終わると顔だけを洗い、ジュンに任せて自宅に戻った。ただ、一抹の不安は拭い去れてはいなかった。幸いタクシーは直ぐに到着した。アパートについても、恵美はそのままタクシーを待たせ、最低限の荷物をバッグに詰めて病院に戻った。時間にして一時間二十分。予想した時間よりもより早い。病室の扉に手を掛けようとしたとき、中から話し声が聞こえた。浩一が目を覚ましたのだ。喜びに駆られ恵美は勢い良く扉を開けて病室に入った。ベッド脇のジュンと浩一は楽しそうに話をしていたが、浩一が恵美を見るなり発した言葉は、恵美だけではなくジュンをも驚かせた。
「ど、どちら様ですか」浩一ははっきりとした口調でそう言ったのだ。恵美はその場にバッグを落とし、ただ呆然と佇むことしか出来なかった。

10章（2）

「逆行性部分健忘」それが医師の診断だった。外傷に因るもので古い記憶は残っているが、事故前の一時期だけ記憶が欠落していると、説明してくれた。しかし、時間とともに思い出す可能性が高く、催眠療法も有効で、一過性なものだと説明を付け加えた。その説明を受けたにしろ、恵美のショックは大きかった。どうやら浩一は事故のことすら覚えてはいなかった。身体の自由が利かないと解かった時、浩一は我を忘れて泣き出した。

恵美は廊下のソファーに腰を下ろし、両手で顔を覆った。バッグは行き場を失った犬のように、ソファーの下に転がっていた。どうしていいのか解からない。自分の事を忘れてしまった浩一の面倒など、どうして見れようか・・・。恵美は途方に暮れてしまった。『このまま、私のことを思い出さなかったら』

不安は大きな恐怖となって恵美を覆い始めた。浩一を失うことの恐怖・・・・。『恵美さん・・・』廊下の影から恵美を見守る浩二も、ただ呟くことしか出来なかった。

恵美はしばらくソファーに座っていた。廊下の恵美の耳にも、浩一の嘆き悲しむ声が聞こえてきた。恵美は耳を塞ぎそうになったが、突如顔つきが変わったかと思うと、いきなり立ち上がった。そしてそのまま浩二の元へと、真っ直ぐに歩き出した。恵美には浩二の姿が見えていたのだ。浩二は咄嗟に身構えた。それほどまでに恵美の顔は決意に満ちた真剣な顔だ。しかも、目には怒りさえも漂わせていた。浩二の前に来ると、強く白くなるほど唇を噛み締めた。

「恵美さん・・・」恵美の気迫に負けた浩二が、先に口を開いた。

「浩二さん。これから会社に行きます。まだ雇ってくれますよね」

徐々に赤みを取り戻す唇がはっきりと正確に動いた。浩二はその唇を見つめ、無言のうちに頷いていた。

「ありがとう。用意しますから、待っていてください」恵美はそう

言うとバッグを持って廊下の先に消えていった。待つこと二十分。恵美は衣服を整え化粧を施し浩二の前に現れた。真っ直ぐに向かってくる恵美の瞳には、一点の曇りさえ見つけられなかった。
「いきましょう」恵美に促され、浩二は席を立った。
「どうしてですか」タクシーに乗り込むと同時に浩二は恵美に問いかけた。
「浩一さんは、私を忘れた。付き添いは出来ないわ。見知らぬ女性には話が出来ないんですもの。でも私は側にいたいの、そうなるような手続きができますか」
「第2秘書にと思っていました」浩二は答えた。
「ありがとう。これで接点は残るわ。あとは・・・あとは記憶が戻るのを待つだけ・・・」恵美はぐっと歯を食いしばった。
「恵美さん、そこまで・・・」浩二は恵美の強い意志を感じ、言葉と飲み込んだ。恵美はじっと前を見つめ、一人で耐えていた。その気持ちは浩二にも痛いほど伝わった。しかし、浩二が話しかける余地はどこにも見出せなかった。
「一つお願いがあるの」唐突に恵美は振り向き話しかけた。
「なんですか」
「雇い入れた日付を、事故の前にしてほしいの」
「なぜですか」恵美の目的が理解出来ずに頭を傾けて尋ねた。
「浩一さんは、やがて自分の記憶喪失を知るでしょう。そして欠落した日々はおのずと分かってしまうわ。その時、浩一さんも前からの知り合いだと分かれば馴染み易いでしょう。前には話をしていたと思わせたいの。仕事上だとしても。それに、事故後の雇い入れでは不自然だから」どこからそんな考えが出てきたのか、まさにその通りと浩二は感服した。浩一を知り尽くしているとさえ思えたのだ。
浩二と一緒にエントランスホールに入ると、二人は注目を浴びた。浩一の事故の話は聞かされいるだろうが、記憶喪失や半身麻痺までは知らないはずだ。そこに恵美の登場、しかも浩二と一緒だ。ただでさえ注目を浴びていた恵美は、はっきりと敵意の視線を感じてい

た。
しかし恵美は何も感じないかのように、平然と歩き続けた。浩二のほうが気にしているようだった。
「浩二さん、人事課は」
「七階です」エレベーターホールまで来た時恵美が尋ねた。やがてエレベーターが到着すると、恵美は襟を正して乗り込んだ。まるで新入社員の面接にでも向かうかのようだった。浩二は無言であとに続いた。
「それからもう一つ」エレベーターの扉が閉まると、恵美は思い出したように話し出した。
「はい」浩二は真剣な恵美の瞳に惹きつけられた。
「浩一さんには、私の・・・私達のことは言わないでほしいの」恵美は一度言葉を訂正してから浩二に伝えた。
「何故ですか、折角一緒に居れるのに、記憶を戻すためには話したほ・・」
「記憶を戻すためにも、その後のためにも、言いたくないの。言ってしまえば、余計な先入観から、浩一さんは戸惑うわ。もちろん記憶が戻れば・・・・。ううん、もし、戻らなかったら。浩一さんを苦しめることになる・・・」最後は言葉にならなかった。それでも恵美は涙だけは流さないように、必死に自分と戦っていた。浩二は抱きしめたい気持ちを必死に抑え、点滅する階数表示を見上げた。扉が開くと浩二は先に廊下に出て、恵美を人事課へと案内した。しかし人事課の表示が掲げてあるドアの手前で、浩二は立ち止まった。そこは人事部長のオフィス前だった。浩二は勢い良く扉を開けた。
「これは専務。どうしました」初めて見る顔だった。狐目のほっそりした男は、浩二より恵美に興味を持ち、覗き込むように恵美を見た。下から上に舐めるように見られ、恵美は一瞬背筋に冷たいものを感じた。
「副社長の新しい秘書だ。至急手続きを頼む」どうやら浩二も、この男を好きではないらしい。事務的な口調で話すだけだった。

「副社長の・・・、はい、分かりました。では、こちらへどうぞ」狐目は恵美を別室に招いた。恵美は浩二を見た。すると浩二はゆっくりと頷いた。恵美が別室のドアに入ろうとした時、浩二は狐目に言い放った。

「その人は、会長が雇い入れた人だ。この意味は解るね」狐目のそれこそ細い目が異様に見開かれ、驚愕の視線を恵美に向けた。会長、康之の威厳は隅々まで浸透しているようだ。部屋では写真撮影が行われた。狐目は直ぐに部下の一人を呼び出し、至急社員証を発行するように伝えた。その間恵美と浩二はソファに腰掛け、出された高級そうなコーヒーを味わっていた。ものの十分もしないうちに、社員証と小冊子が届けられた。浩二は社員証を恵美の首に下げ、説明を始めた。

「出入りと社内ではこれを常に首にかけてください。社屋の配置や役員の名前などはこれに書いてありますから、一応は目を通して置いてください」恵美は小冊子を受け取り頷いた。

「給与、その他のことは後から伝える。手続きを急いで完了してほしい。それから、入社日を・・・」そこまで言って浩二の言葉が止まった。

「2ヶ月前・・・」浩二に目線を向けられ、恵美は小さな声で答えた。そして恵美の書類を手渡した。狐目は書類の中身を確かめると、困惑の表情で浩二を見た。しかし浩二は臆することなく言い放った。

「出来るね」有無を言わさぬ言い方だ。

「分かりました。急いで手続きに入ります」浩二はその答えに満足そうに頷き、恵美をつれて部屋を出て行った。恵美の新しい生活が今始まった。

10章（3）

銀座バーニーズの裏で、恵美と浩二は遅めの昼食をとることにした。

「本当にいいのですか」静かな食事も終わり、コーヒーを飲みながら浩二は恵美に尋ねた。人事部長の部屋を出た二人は、その足で秘書課にも回ったのだ。一通りの挨拶をする時も、恵美は秘書課の女性達から、敵意に満ちた視線を浴びせられていた。浩二は秘書課長を別室に呼び、あくまでもこの女性は会長の部下であることを忘れないようにと、申し送ったにも関わらず、恵美は普通の秘書として扱ってほしいと拒んだのだ。

理由は『ずっと浩一さんに付いて居られないのであれば、社での仕事もこなしたい』とのことだった。給料を貰う以上は当たり前だと。

「ええ、ただ心配は・・・」コーヒースプーンを意味なく回し、恵美は唇を噛んだ。

「付き添いですね。」浩二は恵美の気持ちを汲み取って、言葉を遮った。そして、しばらく考えてから口を開いた。

「そのことで、恵美さんに相談。いえ、承諾がほしいのですが・・」浩二は恵美を真っ直ぐに見据えた。

「承諾・・・・ですか」相談ならば分かるが、自分に承諾を求めるとはいささか驚いた。

「恵美さんも御存知のように、兄の性格はあの通りです。付き添い、ヘルパーを雇っても駄目でしょう。そこで、ジュンに頼もうかと・・・」

恵美は別段驚かなかった。なぜか、自分の中でも予想していたらしい。それは浩一が気がついたとき、ジュンとは変わらずに話を交わすことが出来ていたからだ。ただ、気持ちは釈然としなかった。それにジュンにも仕事があるのだ。『はい分かりました』と簡単に言うかも心配だった。

心の中では言ってほしくない気持ちもあるのか、恵美の心は微妙に揺れた。
「やはり止めましょう。誰か男性でも・・・」浩二は恵美の気持ちを察したのか、別の意見を持ち出した。恵美は急に自分が恥かしくなった。これは浩一のためなのに、恵美は自分本位で考えていたことに気が付いた。
「いいえ、良いんです。ジュンさんが引き受けてくれるのであれば、お願いします」嫉妬などしている場合ではない。これは浩一にとっても良い事なんだと恵美は自分に言い聞かせた。
「・・・分かりました。ジュンが引き受けるかどうかは定かではないですが、聞いてみます」恵美は浩二の優しさ、そして今でも自分を好いていてくれる事にも気が付いていた。しかし今の恵美にはそれに応える事は到底出来ない。浩二との一緒の時間が急に苦しく思えてきた。
「あの、このあとは帰ってもいいですか」恵美は一人になりたかった。
「ええ、構いません。今日は金曜日です。出勤は月曜からで良いですよ」
「ありがとうございます」恵美は不自然さを悟られないように、他愛のない会話の後浩二と別れた。そろそろ陽も傾き始めていた。恵美は有楽町駅に向かいながら、携帯を取り出した。
「もしもし」京子の元気そうな声が聞こえ、恵美の心を和ませた。
「私、恵美。どう、調子は」恵美は出来得る限りに明るく話した。京子も気持ちが落ち着いたらしく、以前の話し方に戻っていた。京子は月曜に退院することが決まっていた。そしてその足で田舎に帰ると恵美に伝えたのだ。
「じゃあ、日曜日に行くわ」恵美はそう言って携帯をバッグに突っ込んだ。京子に最後に会うことは、これで叶いそうだ。恵美は慌ててもう一度携帯を引っ張り出した。出てほしいとの願いが通じたのか、七回目の呼び出しのあと反応があった。

「もしもし」懐かしい聡子の声。不思議な感じだった。たったのあれだけの付き合いなのに、恵美も姉のように慕っている自分に驚いた。
「恵美です」名前を名乗るのが照れくさく感じた。
「まあ、恵美さん、お身体、大丈夫」電話越しでも聡子の笑顔が伝わってきそうだ。
「はい、今はすっかり良くなりました。その節はお世話になりました」何故電話に向かってお辞儀をするのか、恵美は無意識に何度も頭を下げた。恵美の気持ちは京子と聡子との会話で、随分と楽になった。
「いいのよ、元気そうで安心したわ」聡子の背後の喧騒から、そこが旅館であることが伝わった
「あの、明日は仕事ですか」長電話は失礼だと、恵美は用件を切り出した。
「土曜日？ええ、仕事よ」聡子は考える様子もなく答えた。
「じゃあ、私、行きます。部屋はありますか」
「ええ、小部屋で良ければ空いてるけど・・・どうしたの」予約帳か何かをめくる音が聞こえてきた。
「京子・・。あの友だちが、月曜に退院します。その足で、田舎に帰るので会っておきたくて」
「そう、それは良かったわね。はい、じゃあ、承っておきます。お気をつけていらしてください」聡子のわざと事務的な話し方で、どちらからともなく吹き出した。当初の予定とは多少ずれたが、恵美のやらなければならない事は、一つ方が付きそうだった。残るは浩二。恵美の元の彼氏、浩二のことだけだ。恵美は腕時計を確認し、力強く頷いた。恵美は京子と聡子に感謝した。力を貰った気がしたのだ。『浩二、待ってなさい』
恵美の拳に力が入った。足も自然と速まるのだが、恵美はそれに気が付きもしなかった。

10章（4）

恵美は一度アパートに戻った。地味な服に着替えたのだ。なぜならば、直接浩二のバイト先に行くつもりだったからだ。電話をしてもどうせバンドの練習中で、のらりくらりとかわされると思ったのだ。しかし、バイト先では逃げるわけには行かないだろう。ただ、大声で話すことでもないと十分に理解はしていた。会う約束だけでも良いと思ったのだ。そのためわざと地味な服を選んだのだ。派手な服で女一人だと、何かと目立つと考えたのだ。声を掛けられるのも、好奇な目で見られるのも避けたかった。時間はたっぷりとある。恵美はそのままベッドに寝転んだ。遅くなっても良いのだ。浩二のバイト中に会えればそれで問題はない。この数日は気が張りゆっくり出来なかったこともあって、恵美は直ぐに寝息を立てた。夢さえ見ずに寝ていた恵美は、八時を回った頃に携帯の呼び出しで起こされた。

「私、ジュンです」

「はい、恵美です」目を擦りながら恵美は答えた。

「恵美さん・・・・。良いの」ジュンの言いたいことは分かっていた。浩二から話があったのだろう。

「私からもお願いしたいわ。今の浩一さんはジュンさんしか・・・・。お店は良いの」心にもない言葉が、スラスラ出た時には恵美も驚いた。

本当は誰にも近づいてほしくない。浩一は私の大事な人よ。その心の言葉が陽の目を見ることはない。

「ええ・・・。ママには、事情を話して休暇を貰ったわ。復帰期限のない・・・」ジュンの言葉には、普段の明るさも自信も伺えない。恵美に対しての遠慮がありありと窺えた。

「ごめんなさい。お願いします」恵美はジェラシーを感じながらもジュンにお礼を言った。言うしかないのだ。ジュンは返事をしなか

った。
出来なかったと言うべきかも知れない。ジュンもジュンなりに心の葛藤があったのだ。本心では浩一に付き添いたいが、恵美に断わられること望んでいた。ジュンは今、心の中で次第に大きく膨らむ浩一の存在を敏感に感じ取っていた。それは昨日までの不確かな気持ちではなく、浩二に頼まれた時にはっきりと自覚したのだ。恵美が同業ならば、遠慮なく浩一を奪うかもしれない。しかし恵美から浩一を引き離すことは今のジュンには出来なかった。だから本当は恵美に拒んでほしかったのだ。
「分かったわ。出来る限りはします。でも、全て浩一さんのためよ」ジュンは恵美のことを思い出させようと考えた。なぜか恵美を裏切ることは浩一を裏切ることに思えたからだ。
「ええ、ただ一つお願いがあるの」恵美は意を決して話した。これを言えば恵美と浩一の関係を知るものは他にはいない。それを承知で語句を強調した。ジュンは一瞬躊躇ったが、恵美の決意を見抜きはっきりと答えた。
「何でも聞くわ」
「私のことは言わないでほしいの」恵美は大きく息を吸い、吐き出すように言葉を発した。
「え、何で」正直ジュンは驚いた。何故そんなことが言えるのか、唯一の糸を自ら断ち切ろうと恵美の気持ちが分からなかった。恵美はしばらく無言だったが、やがて浩二に話したと同じ理由をジュンに伝えた。『なんて、強い人・・』ジュンの恵美に対する正直な気持ちだった。
「そこまで、言うなら、私は何も言わないわ。浩一さんの前では、秘書として扱います。本当にいいのね」
「ええ、そうしてください。ジュンさんも言ったように、浩一さんのためですから」二人は別れの挨拶もそこそこに電話を切った。恵美はしばらく俯き、やがて勢い良く立ち上がると洗面所に駆け込んだ。そして化粧を整えバッグを掴むと、足早にアパートと飛び出し

た。
　浩一は何度も夢を見ていた。暗い海を背に、自分と一緒に歩く影。月明かりに照らされるがどうしても顔は見えない。ただ声だけは聞こえていた。
女性の名だがそれだけははっきりと聞こえた。夢の中で浩一はその名を呼んでいた。『京子』。しかし浩一にはその名の記憶はない。そして目を覚ます。動かない身体を呪いながらも浩一は必死に思いだそうとしていた。既に浩一は自分が記憶を失くしている事に気が付いていた。だからこそその女性が知りたかったのだ。何度も見るにはそれなりの理由があると思えたから。もしかしたら、自分と親密な女性かも知れないと、感じていたのだ。
砂浜を夜二人で歩く。親密でない女性とそんな行動をとるはずがないのは、浩一自身が一番良く知っていたからだ。ふと見ると浩二が病室にいた。
「浩二・・・」浩一の声に気がつき、浩二はベッドに寄り添った。
「起きたのかい」浩二は顔を覗き優しく尋ねた。
「ああ、・・・・また夢を見た。何度も見る同じ夢だ。浩二・・・・京子。この名前に覚えはあるか」浩二ならば何かを知っていると思った。
しかし浩二は答えなかった。いや、答えなれなかった。確かにその名前は知っている。しかし恵美に口止めされた以上、どう説明して良いか分からなかったのだ。これから秘書として出会う恵美のその友だちを探しに行った。などと言っても、真実味も何もないのだ。浩二は考える振りをしてから答えた。
「いいや、聞いたことはないよ」と。浩一はその答えに落胆したようだが浩二には言えなかった。恵美と約束したのだから・・・・。

11章（1）

恵美が浩二の店に着いたのは、九時半頃だった。浩二は毎日八時から最終まで働いているはずだった。恵美は目立たないように、カウンターの端に腰を下ろした。高いカウンターの高いスツール。しかし浩二の姿は恵美の視界にはない。

「あれ、恵美さん。久しぶりですね」浩二の同僚の男が、カウンター越しに声を掛けた。

「ええ・・・」恵美は浩二のことを聞こうとしたが躊躇った。

「何、飲みますか」店のロゴ入りのコースターをカウンターに出し、同僚の男は尋ねた。

「ブラディ・マリーを・・・」男はにっこりと頷き、その場を離れた。恵美は更に周囲を見回した。薄暗い店内にも、厨房の入り口にも目を向けたが、浩二の姿はどこにも見つけられなかった。同僚の男はカクテルグラスを恵美の前に置いたが、落ち着きのない恵美の行動に不審を抱いた。

「誰か、探しているの」何度も話したことがある男は、馴れ馴れしく恵美に尋ねた。このままでは無駄な時間が過ぎそうだ。恵美は思い切ってカウンターの男に聞いた。

「浩二は、今日は休みですか」男は一瞬驚いた様子だったが、やがて身を乗り出し話し始めた。

「もしかして、本当に分かれたんですか」男は興味津々に尋ねた。恵美はため息とともに頷いた。『どの男も同じ』そう思ったのだ。

「なんだ、そうだったんですか。信じなかったんですよ。いえね、ちょっと可愛い女には、いつもちょっかい出すから、一度聞いたんですよ。そしたら、分かれた。なんて言うから信じなかったんですが。本当なんですか」男は心底笑っているようだった。その声で、他のお客が振り向き男は声を抑えて話を続けた。

「でね、先週かな。先々週かな、いきなり辞めましたよ。仕事を・・・

・」恵美はその言葉が終わるよりも早く、席を立ってキャッシャーに向かった。
これ以上ここに居る必要もない、失礼極まりない男の話にもうんざりしたのだ。恵美は店を飛び出すなり、携帯を取り出し浩二の番号をプッシュした。しかし、呼び出しはするがいっこうに出る気配はない。やがて無機質なメッセージが流れだした。三度目のメッセージを聞いた時、恵美は浩二の居留守だと確信した。そう、着信番号が表示されるからだ。『浩二は私を避けている』恵美の怒りはまさに噴火する
直前だった。浩二は携帯には敏感に、そして機敏に反応する方だ。そこで恵美は公衆電話を探した。もちろん着信番号が示されないからである。丁度、浩二の勤めていた店の向かいには、数台の自動販売機と公衆電話があった。国際電話も掛けられる電話だ。しかし恵美はテレホンカードもなく、小銭も切らしていた。仕方なく販売機で紙幣を崩そうと思い、ジュースの販売機の前に立った。紙幣を入れようとした恵美の手が止まった。隣りの販売機が気になったのだ。隣りは煙草の販売機。恵美は今まで煙草など吸ったこともない。まして吸おうと考えたことすらない。その販売機に恵美は紙幣を差し込んだ。そして、一番ニコチンの軽そうな煙草を選んだ。なぜ、そんなことをしたのか恵美にも想像が付かない。
取り出し口から手を抜き、煙草を見つめて恵美は俯いた。涙が流れるのが解った。濡れた頬が夜風に冷やされたから。とりあえず小銭は確保できた。恵美は公衆電話に戻り、浩二の携帯番号をプッシュした。案の上浩二は呼び出しに答えた。
「誰～」浩二の後ろからは、女の声が聞こえていた。
「恵美よ」その途端、受話器からは無粋な人工的で無感情な音が繰り返された。浩二は仕事を辞め女と遊び呆けている。恵美は浩二のアパートに向かった。恵美の怒りの感情が向かわせたのだ。二度くらいしか行ったことがないが、恵美はしっかりと覚えていると自分で確信したからだ。恵美はタクシーを拾った。手には新しい煙草。

無性にその煙草が重く手に感じられた。
「運転手さん」身を乗り出し恵美は話しかけた。
「はい」言葉だけの返事で、視線は前方からそらさない。
「煙草は吸いますか」突飛だとは思ったが、余分話は極力避けたかった。
「え？ええ、まあ」恵美の質問の意図が読めず、運転手は戸惑った。それもそのはず、都内のタクシーが全車禁煙になったからだ。昼間の客でもいたのだ。『なあ、あんたも吸うんだろ。いいじゃないか、一本くらい』若いサラリーマンだった。長い時間の乗車ならまだしも、基本メーターでも着くような場所にも関わらず、乗り込んで直ぐにそう言い出したのだ。恵美もその類かと思われたが、ルームミラー越しに、
見る限り、そんな人間には見えず戸惑いながらも事実を言った。
「これ、間違えて買ってしまったの。良ければどうぞ」恵美は手に有る煙草を差し出した。運転手の顔は急に明るくなった。
「そうですか。ありがとうございます。休憩の時にでも吸わしてもらいます」運転手の明るい表情とは対照的に、恵美の心は暗く落ち込んだ。
浩二のアパートに乗り込んで、何が出来るのか。何を言うのか。一緒の女は何を思うか。そんな発想が頭を駆け回り、ただでさえ疲れきった恵美の頭を翻弄させた。

11章（2）

「誰よ、今の」ミミの声に浩二は身を硬直させた。
「誰でもないよ。そう、間違い・・間違い電話だよ」言葉が詰まるのを、浩二は感じながらも抑えられなかった。ミミはベッドに横たわりテレビの歌番組を見ていた。浩二は携帯をズボンに突っ込みベッドに潜り込んだ。二人とも素っ裸だった。
浩二がミミと出会ったのは、やはり浩二の店だった。ミミは派手な美人で浩二の仲間内でも人気があった。しかし浩二はどちらかと言えば、可愛い子、幼そうな女に興味があったのだ。だからミミの話が出ても、それほど興味を示さなかった。今まで浩二が付き合った中では、恵美だけが例外だった。京子もどちらかと言えば、童顔。幼く見えるのだ。ミミはそんな浩二に興味を持っていた。みんなが媚を売る中、浩二は話しかけようともしなかったからだ。
それがミミの競争心を一層煽る結果となり、ミミの方から積極的なアプローチが始まったのだ。ある日浩二はミミの隣りの女と話していた。
もちろん夜の相手を探してのことだが、その時ミミはわざとその女に飲み物を引っかけたのだ。肘が当たった振りをして、その女のスカートをビショビショに濡らしたのだ。
「ちょっと、何するんですか」濡らされた女は怒りをあらわにしていた。ミミはそっけない素振りで簡単に答えた。
「あら、ごめんなさい」そしてハンカチを差し出した。全てミミの計算通りなのを、浩二は見抜けなかった。
「随分ですね・・・」ハンカチでスカートを拭いていた女は、急に泣き出しだ。
「ごめんなさいね。これ、クリーニング代」そうやって差し出したのは二枚の万札券。女はその金を受け取りもせずに、店から出て行

った。
ミミは残された万札の一枚を浩二に渡し、何気ない言葉でこう言った。
「あの人の分、これで払って」それからもう一枚を手に取り、浩二の前に差し出した。
「これは、貴方によ。迷惑料ね」と付け加えた。浩二は驚いた。まだ若そうな女が、こうも札びらを切るものかと、きっと何処かのお嬢様ではと思ったのだ。しかし浩二も伊達に場数は踏んでいない。出された骨なら食いつくが、その前に一芸見せるのが浩二の得意技だった。
「いえ、先ほどのお金で、十分間に合います。そのお釣でしたら受け取ります」あくまでも物欲しそうな顔は見せない。
「言ったでしょ。これは迷惑料。お釣はチップで良いわ」ミミの高慢な態度も現金の前では霞んでしまう。しかもミミの瞳は浩二に向けて怪しく光るのだ。ついに浩二の理性が崩壊した。
「そうですか。じゃあ、遠慮なく頂きます」それなりの容姿、魅力的な金銭感覚。浩二はミミの術中にはまり込んでしまった。しばらく話すうちに、浩二のほうから誘ってしまったのだ。結局は浩二も金の魅力には負けてしまい、どこにでも居る商売男に成り果てた。この時点で浩二の敗北は決定した。ミミは浩二を自宅に招き快楽を貪った。浩二はミミの家の豪華さに圧倒され、金の生る木を得た気になっていた。
マンションの最上階２ＬＤＫが、ミミの住まいだが、もちろんミミ一人の部屋だ。配置された家具もみな高級そうで、浩二は見るもの全てにミミの説明を求めた。
「これはなんていうの」ミミは一瞥だけであっさりと答える。
「知らないわ。興味ないもの。父が勝手に持ってくるのよ」知らないはずはない。とは思いながらも浩二の頭には、大金を手にする自分が鮮明に描きだされていた。ミミもあまりしつこく聞かれるので半ば嫌気が差していた。もちろん浩二は好きだ。何度も愛し合った

あとでもこう言う気持ちが残るのは、ミミにとっても珍しいことだった。
「ねえ、良かったら、ここで一緒に住まない」浩二はミミの言葉にあっさりと白旗を上げた。
「君といつでも一緒に居られるね」
翌日には浩二の引越しは全て完了した。荷物と言っても多く有る訳ではないし、ほとんどのものは捨てられたのだ。二人の性の相性はぴったりだった。浩二もミミに溺れる自分を理解できたが、心地良い生活に流されていった。一緒に住みだし三日もしない内に、ミミは浩二に言った。
「ねえ、今の仕事、辞めてよ」どうやらミミも本気になり浩二の仕事に、嫉妬し始めた。
「金はどうすんだよ」これにはさすがの浩二も反論した。もちろん金などどうでもいい事だ。実際にはミミと付き合い始めてから、浩二は一銭のお金も出していない。煙草でさえいつも部屋に買い置きがしてあるほどだった。なぜ、煙草が常にあるのか気にはなったが、浩二は深く追求もしなかった。
「給料以上に、私がお小遣いを上げるわ」他の女の魅力も捨てがたいが、ミミにも魅力がありそれ以上に金の魅力浩二は負けた。その日の内に仕事を辞め、浩二のヒモ生活が始まった。ところが、その選択が浩二に間違いだと気づかせた時には、既に時は遅かった。ミミの家は普通ではなかった。言い換えれば表社会の家庭ではなかったのだ。それは浩二とミミがデート中に分かったのだが、公園のベンチでソフトクリームを食べている時に、ふとしたきっかけでミミと口論になったのだ。その時に、浩二の前に姿を現した男は、見るからに一般人ではなかった。浩二が恐れ慄くとミミは澄まして答えたのだ。
「あ、気にしないで、私のボディガードだから」浩二はこの時初めて気がついたのだ。常に煙草があることも、高級マンションに住んでいることも、札びらを切れることも・・・。それからの浩二は軟

禁状態と等しかった。ミミの嫉妬も次第に激しくなり、携帯がなる度に浩二は恐怖した。バンドの練習にも出られなくなり、浩二は逃げ出そうとしたことも有ったが、ボディガードに打ちのめされた。

「今の電話、誰よ」テレビを見ていたミミが、思い出したように浩二に尋ねた。

「だから、間違え・・」

「調べるわよ。その時に分かったら。遅いんだよ」浩二の言葉を遮り、ミミは脅すように浩二を睨んだ。公衆電話の着信は相手が分からないにしろ、その前の記録はしっかりと残っているのだ。「恵美」浩二はもうかかって来ないだろうと、恵美の番号を消し忘れていたのだ。

「実は・・・」浩二は恵美の話を全て話した。そして何故電話がかかってくるのかも、事実を話したのだ。ミミが本気になれば、簡単に調べ上げることが出来ると思ったからだが、浩二が素直に答えたのに反し、ミミの答えは軽蔑だった。

「最低な男・・・・」ミミとしても、同性の敵に見えたらしい。恵美が浩二の汚いアパートに向かっている頃、浩二とミミは口論の真っ最中だった。恵美が浩二のアパートが引き払われたことを知った時、浩二の前にはどこから見て裏社会の男、ミミのボディガードが立ちはだかった。

その後の浩二の悲劇は、皆さんのご想像に任せしよう・・・。

11章（3）

元彼、浩二の行方はつかめなかったものの、恵美の寝起きは清々しかった。今日は熱海に出かけ、明日は京子と会う約束だ。恵美は久しぶりに部屋の掃除と、溜まった洗濯物を洗い始めた。天気も良いし、洗濯物も早く乾きそうだ。恵美は窓も大きく広げて、空気の入れ替えも行った。

部屋の埃が朝日を受けて、無数のきらめきを放っていた。洗濯物も干し終わり、掃除機をかけ始めた時に、アパートのドアが音を立てた。

「は～い、どちらさまですか」恵美は何気なくドアを開けた。しかしそこに立っていたのは、目をしかめそうな男達だった。恵美は一瞬硬直したが、男達は丁寧に頭を下げた。

「これを。うちのお嬢からです」そのうちの一人の男が、恵美の前に菓子折りほどの箱を突き出した。『お嬢』と言われても、恵美には相手がピンと来なかった。恵美が首をひねって受け取りを躊躇っていると、男が道路の方に手を伸ばした。かつて浩二がハイヤーで乗りつけた場所に黒塗りのベンツが止まっていた。恵美が不審そうに見ていると、後部の窓が静かに下げられた。光が差したその中には男が乗って・・・『浩二』？

そこには、元彼、浩二の変わり果てた姿があった。恵美は思わず腹を抱えて笑ってしまった。自慢していた長髪が、すっかり丸坊主にされていたのだ。そしてその後ろから、初めて見る女性が顔を覗かせ、ゆっくりと頭を下げた。恵美は箱を急いで開梱した。中には髪の毛と1通の手紙が同封されていた。＜これから浩二は修行の旅にいかせます。二度と女性に悲しい思いをさせないためです。不要な髪は切りました。

どうか、お納め下さい＞と書かれていた。どういう理由でそうなったかは知らないが、恵美は大いに喜び、ミミに対して頭を下げた。

ミミも最後に笑うと、静かに窓を閉めるとそのまま走り出した。恵美はおかしくて腹を抱えて笑い出した。結果はどうあれ浩二の情けない顔を見たとき、怒りは何処かへ飛んでいった。恵美の気持ちは立ち込める雲が晴れたように爽快な気分だった。恵美の一発よりも浩二には良い薬になるだろうと思えたからだ。この時だけは浩一のことも嬉しさの下に隠れ、恵美は歌いながら掃除機をかけ始めた。しかし月曜からは秘書としての仕事が始まる。恵美は掃除を終えると時間を確認し買い物に出かけた。秘書らしい服と靴、キャリアウーマンに見えるようなものを2着ほど買い込んだ。自分を知らない浩一に認めて貰う為だった。それから月曜からのちょっとした食材を買ってアパートに戻った。

時間は3時になろうとしている。慌てて洗濯物を取り込んだが、まだ幾分乾ききってないものもあり、恵美は部屋のカーテンレールに吊るした。それから急いで支度をし恵美は熱海に向かったのだ。

浩一の病室では、ジュンが約束どおり付き添いを始めていた。意識が戻ったとは言え、浩一は動くことさえままならない。第一に、首から背骨までが固められているのだ。どうにかベッドは１５度には、立てられるようになったが、浩一からは部屋を見渡すことが出来なかった。

何かあれば呼ぶしかないのだ。

「ジュン、喉が渇いた」その声に反応してジュンは水差しを持って近づいた。

「どうぞ」ジュンの心に芽生え始めた気持ちは、誰にも悟らせるわけにはいかない。必死に事務的な動きで誤魔化したのだ。しかし恐ろしい偶然が二人を劇的な変化へと導いた。神は悪戯が好きなようだ。

「ジュン」喉が潤い、浩一はふと疑問に思った事を口に出した。

「なんですか」ジュンはあくまでも事務的に答えた。

「ジュンは、源氏名だよな。本当はなんて言うんだ」浩一は何度も見る夢が気になっていたのか。ジュンの本名が知りたくなった。

「どうでもいいでしょ。ジュンの方が慣れているし」浩一とはジュンで知り合い、ずっとジュンと呼ばれてきた。店の外であってもジュンで通してきたのだ。今更何をとの気持ちも有ったが、悟られたくない理由から素直に話すと決めたのだ。
「別に呼ぶにはジュンで構わないが・・・」浩一はジュンの言葉で疑問を投げ捨てた。なぜならば、もしも思い出させる気ならば、はっきりと答えるはずだと思ったのだ。浩一が諦め始めた時に、ジュンは口を開いた。
「平凡なのよ。今日子よ」事務的な答えかた。しかし浩一には十分なショックを与えたようだ。
「京子・・・・」そう呟くと、浩一は黙ってしまった。字は違う。ところが名乗っただけではその違いさえ分からない。浩一も『京子』とは思ったものの、字までははっきりと区別できている訳ではないのだ。夢の中では声しか聞こえないためだ。それが『恭子』であろうと『杏子』あろうと、なんら差し支えはないのだ。浩一はしばらく考えてから口を開いた。
「どんな字を書く」
「昨日、今日の今日子よ」浩一の想像とは違ったものの、『きょうこ』には間違いはない。浩一はじっとジュンを見つめた。
「何よ、何をじっと見てるの。おしっこかしら」ジュンは店で見せるような表情で、浩一に笑いかけた。それでも浩一はまじめな目つきを崩さずに、ジュンに話し始めた。
「毎日、夢をみる。そして僕は名前を呼んでいるんだ」
「それで」ジュンは澄まして答えた。
「その名は・・・きょうこ」さすがにジュンの顔つきにも変化が起きはじめた。浩一はそれを見落とさなかった。
「君なんだね。僕と砂浜を歩いていたのは」浩一の目は真剣そのものだった。
「ちょっと、待ってよ。名前を教えたのは、今が初めてよ。なんで、浩一さんが夢で見るのよ」嘘でもジュンの心は躍動をはじめ、身体

が熱くなるのを感じ始めていた。なぜならばジュンは恵美の友人、京子を知らないからだった。もちろんジュンの知り合いにもいなかったのだ。

11章（4）

恵美は6時には熱海の旅館にたどり着いた。聡子の姿は見えない。おそらく忙しいのであろうし、フロント専門という訳でも無かった。恵美はフロントに名前を告げて、すみれの間に通された。こじんまりとはしているが、落ち着けそうな部屋で恵美は気に入った。

「いらっしゃい」程無くして聡子が部屋に現れた。私服だった。

「お世話になります。仕事はどうしたんですか」予約の連絡を入れた時は、仕事だと言っていたのだ。

「へへ、早引きさせてもらいました」聡子は小さく舌を出して、おどけて見せた。

「なんで、お子さんでも・・」聡子には子供が居るはずだ。

「違うのよ、恵美さんと晩酌でも、と思って」聡子は大げさに手を振った。

「平気なんですか、土曜日だし・・・・」恵美は聡子が無理を言ったのではと気になった。

「女将さんね、調べたのよ、旦那さんの会社を、驚いてたわ」声をひそめているつもりだろうが、その声は徐々に大きくなっていった。

「だから、機嫌よく言ってたわ『仲良くしてね』だって」聡子は胸を張って話を続けた。旅館の女将さんが調べるのは当たり前だろう。前回は浩一のカードでの支払いだが、追加の場合は請求は会社に回すように伝えたからだ。そこで浩一の会社の大きさに驚いても、無理からぬことだった。女将としては、大事なお得意さんになるかの瀬戸際なのだ。聡子を快く送っても勝算ありと思ったのだろう。二人は夕食前に一緒に温泉に浸かった。

「綺麗な肌ね」聡子は恵美の肌をまじまじと見つめた。聡子とはそんなに年が離れている訳でもない。

「聡子さんも十分綺麗ですよ」湯に浸かりながら並んでいると、本当の姉妹のように感じてきた。

「私はもう駄目よ。手入れもしていないし、第一、もう子供もいるから」どんな理由が有るにしろ、聡子は子持ちなのだ。何処かにひけ目を感じているようにも見えた。恵美は時折見せる寂しげな表情から、辛い出来事があったのかと想像するしかなかった。
「いいえ、今に時代は、一度の離婚など誰も気にしませんよ」聡子は力なく笑い、何度も頷いた。聡子の心配は娘の知恵だけだった。どちらかと言えば人見知りな知恵が、浩二になついた事も驚きだったが、いつまでも忘れられない自分にも驚いていたのだ。それから二人は背中を流しあった。
温泉からあがると、既に食事が運ばれていた。しかも夕食はしっかりとビール、お銚子まで用意されていた。食事の最中に女将が顔を出した。満面の笑みを浮かべて挨拶する女将は、恵美に深々と頭を下げた。
「いつもありがとうございます」年は五十を越えているだろうか、身なりのきちんとした女将だった。
「いえ、こちらこそお世話になります」恵美はそう言って頭を下げた。女将の話はもっぱら浩一の会社の話だった。その理由は、聡子からも聞いていたし、差し障りのない程度に話した。恵美にしたところで、さほど詳しくはないのだ。なんと言っても、月曜から初出勤なのだ。女将も恵美を浩一の妻と思っているようだ。恵美は否定もしなかった。否定したら否定したで、色々な詮索をされるのが解っていたからだ。もちろん聡子にも言っていない。今は、言う必要がないと思えたからだ。
「では、ごゆっくり」女将は二度ほどビールを注ぐ間に、ほとんど話し続けだった。女将が出て行くと同時に、聡子は笑い出した。
「ねえ、おかしいでしょう。私にまでお酌して行ったわ」恵美も笑い出した。考えればおかしな話だ。笑いが落ち着くと聡子は思い出したように浩二の話を持ち出した。
「義弟さん。元気ですか」聡子は少し酔った様で、身体が揺れ始めていた。

「ええ、元気です」そう言いながらも、聡子が浩二を気に掛けるのが不思議に思えた。
「何かありました？」恵美はおかしな質問とは思ったが、酔いに任せて聡子に聞いた。聡子は一瞬だけ目を丸くしたが、ゆっくりと答えた。
「あの日、一人でお部屋に入られてから、かなりお飲みでしたから・・・」聡子はそこで俯いた。聡子は何度か恵美を見たが、何も話さずにビールを飲み干した。恵美も浩二が来た日のことを思い出した。恵美の部屋を出たあと浩二は東京には帰らず、同じ旅館に泊まったことを初めて知った。
そして行方をくらましたのだ。『もしかしたら、何か知っているのでは』と思ったが、恵美は聡子に聞くことは出来なかった。
「酔ったかしら。そろそろ、失礼しなくちゃね。子供も迎えに行かなくちゃ・・・」そう言って聡子は立ち上がった。聡子の酔いは足にきていた。よろけたと思うと、襖に手を這わせその場に座り込んだ。
「大丈夫ですか」恵美は聡子に駆け寄った。見ると聡子は涙を流しているのだ。
「何かあったのですか」聡子は返事も出来なかった。流れる涙を止めきれないようだ。恵美は優しく抱きしめた。聡子はしばらく泣き続け、やがて思い出したように我に帰り、照れ笑いを浮かべて何度も頭を振り回した。
「よし、大丈夫。子供を迎えに行かなくちゃ」聡子は足を踏ん張りドアまで行くと、恵美に頭を下げてこう言った。
「今日は、ありがとう。なぜかスッキリしたわ、明日は病院まで送るわね」その顔には悲しみは見えず、安堵の表情がうかがえた。
「いいえ、こちらこそ楽しい時間をありがとうございました」恵美は泣いた理由を聞かなかった。人には話したくない事など、山ほどあるのを恵美は身をもって知っていたからだ。聡子もその時になったら、いつか話してくれるだろうと思ったからだ。涙のわけは、人

それぞれ・・・・。

12章（1）

恵美は早めに目を覚まし、ゆっくりと温泉に浸かった。昨夜のお酒はほとんど残ってはいないが、これから京子に会うのだ。サッパリと笑顔で会いたいと思ったからだ。今の恵美は胸のつかえが一つずつ取り払われ、心は僅かに軽くなったようだ。ただ、昨夜の聡子の涙は気になった。浩二からも連絡の取れなかった二日間のことは、一切聞かされていない。何かの繋がりが伺えたが、はっきりとはしないことで、悩むほど恵美の心に余裕はなかった。朝食を終え、フロントで清算中に聡子が現れた。

「おはようございます」聡子は昨日のことなど気にも止めない様子で挨拶を交わした。

「ごめんなさいね。今日は子供も一緒なの」そう言って聡子は車のドアを開けた。

「知恵、後ろに移って頂戴」聡子は優しく知恵に言った。

「はい、ママ」嫌な顔一つせずに、知恵は後部座席に移動した。

「おはよう。ごめんね。お邪魔して」恵美は笑いを浮かべて助手席に乗り込んだ。

「娘の知恵よ」聡子はシートベルトをしながら、恵美に紹介した。

「初めまして、千恵ちゃん。恵美です」恵美はしっかりと頭を下げた。

「こちらこそよろしくおねがいします」知恵の返事に聡子も恵美も噴出した。女の子はませるのが早いが、知恵の挨拶は普通の大人よりも丁寧だった。聡子は目を見開き、首を振った。『私は知らないわよ』まさにそう言いたげだった。そのとき知恵が不思議なことを口走った。

「このお姉さん、あのおじさんと同じ匂いがするね」恵美は一瞬戸惑った。誰と同じ匂いがするのか理解し兼ねたのだ。或いは単なる恵美の妄想なのかは解らない。聡子は慌てることなく、恵美に話し

た。
「この子、昔から敏感なのよね」とぼけているようではない。恵美が後部を振り返った時、知恵はぬいぐるみで遊んでいたので、それ以上詮索するのを止めてしまった。そのまま病院に着く間、取り止めのない話が交わされたが、恵美はどうしても胸に引っかかるものを感じていた。聡子は表情一つ変えない。思い過ごしだろうか。恵美は昨夜のことも考えたたが、聡子の人柄からは想像すら出来なかった。
　京子はすっかりと元気を取り戻していた。母親は既に田舎に戻っていたが、明日の退院時には来る事になっているようだ。聡子は子供が居るからと、送り届けるとそのまま戻っていった。友人の再会を邪魔しないとでも言うように。
「でも、寂しくなるわ」ベッド脇のスツールに腰を下ろし、京子の顔をじっと見ながら恵美は呟いた。
「一生、会えないわけではないわよ」京子は明るく話すが、恵美の心には心配が残った。もちろん生活のことではない。浩二に対しての気持ちが理解出来ないからだ。今までその話には触れなかった為だ。しかし恵美は浩二の現状を見てきたばかり。しかしそれを話しても良いものか、今までずっと悩み続けていたのだ。
「そうそう、雅子もよろしくと言っていたわ」実際には、雅子からそんな言葉は聞いてはいない。雅子の顔を潰す気もない気持ちから出た言葉だが、それでも京子は嬉しそうだった。京子にもそのくらいは分かっていただろう。京子も雅子の性格を知っていたから。二人の会話は少なかった。
恵美は慎重に言葉を選び、京子の心を掴もうと努力した。しかし明日は初出勤だ。いつまでものんびりもしていられない、恵美は迷いに迷った挙句、浩二のことを京子に話した。しばらく俯いていた京子だが、やがて笑い始めた。
「それで立ち直れば良いけど」京子の笑顔を見て、恵美は内心胸を撫で下ろした。どうやら京子も吹っ切れたようだ。そう見えただけ

かも知れないが、京子は立ち直ろうとしているのは確かだ。酷かも知れないが、京子がしっかりと現実を受け入れたことで、恵美も安心して別れを告げられると思ったのだ。

「元気でね。何かあったら、電話してね」恵美の目には涙が浮かんだが、その顔は晴々とした表情だ。京子の目には既に次の世界が広がっていた。

恵美は京子の未来が明るく幸せなものになるように、心から祈った。そして硬い抱擁のあと、恵美と京子は別れた。その別れは決して悲しい別れではなかったと、恵美は上り電車の中で確信した。電車の窓が都会の表情を写し始めると、恵美はあと数時間後に迫った初出勤に、覚悟するかのように強く頷いた。『見ていて、京子。私も負けないわ』恵美は固く拳を握り締めた。

12章（2）

月曜日、出社した途端それは始まった。徹底的に恵美は皆から無視されたのだ。挨拶をしても返されない。優秀な秘書は一日の大半は役員に付ききりだが。ここに居る秘書は、勉強中、或いは臨時や第二秘書が主だった。それでも、秘書の仕事など縁のなかった恵美には、なに一つ分からない。恵美の素性を知っているのは秘書課長だけだ。目に見える嫌がらせが遠慮無しに恵美を襲った。さすがに恵美を不憫に思ったのか、別室に呼び出した。

「良いのですか、このままで」部屋のドアを閉めるなり、秘書課長は恵美に尋ねた。

「はい、ちゃんと仕事がしたいのです。何か方法はありますか」全て予期していたことで、恵美はいたって冷静に答えた。前にプロジェクトチームに入った時も同じだった。ただ違うことは、経験の有無であり未知の分野だった。プロジェクトの時は、あくまでも経理の仕事だったからだ。

「普通は新人講習を受けるのですが、貴方の場合時間がない。そうですね」秘書課長は、ある程度の話を聞いているようだ。

「はい、1日も早く副社長について仕事をしたいのですが」

「では、こうしましょう。まず、基本の資料を渡します。その後は実地で経験して下さい。横田君は御存知ですね」

「横田さんですか」恵美はその名前を聞いたことがなかった。それどころか、役員などの名前すらもほとんど知らないことに気が付いた。

「副社長の第一秘書です」恵美の疑問を察知したのか、秘書課長はすぐに答えた。そして、会社の資料や研修に使うテキスト、社員名簿を恵美に渡した。それから電話で横田を呼び出した。

「今、来ますから、少々待っていてください」呼び出された秘書は、恵美の想像通りの男だった。浩二の失踪を聞いた日に泣きながら訪

れた時に、浩一の部屋の前にいた男。それが横田だった。横田も話だけは聞いていたのか、恵美の姿を見てもそれほどの驚きの表情を見せなかった。
「なんでしょう」横田は軽く頭を下げた。副社長の秘書と言っても実際には、役職もなく秘書課の社員と待遇では変わりはしない。それでも秘書課長は丁寧な態度で挨拶を交わした。
「忙しいところを申し訳ない。恵美さんは知っていますね。今日から一緒にお願いできるかな」横田は恵美を見ると、無表情で答えた。
「分かりました。今日から私の元で働いてもらいます」
「では、お願いします」秘書課長は恵美に向き直り話を続けた。
「じゃあ、このまま横田君の元で勉強してください。彼は優秀な秘書です。直ぐに覚えられますよ」課長は安堵の表情を浮かべた。
「お願いします」恵美は深く頭を下げた。そして荷物を取りに行った。
「大丈夫かね」恵美の姿が見えなくなると、秘書課長は小声で横田に尋ねた。
「ええ、お任せを」横田は静かに答えたが、その顔には微かな笑いが浮かんでいた。
　横田に伴われて、恵美は浩一のオフィスに足を踏み入れた。部屋は前に来たときと寸分違わずに見えた。数少ない置物の位置までもが、まるで同じに見えた。横田は恵美に秘書としてやるべき初めの仕事を与えた。
「まずは、部屋の掃除です。実際には掃除婦が毎晩掃除に来ますが、それでは不十分です」横田の口調は丁寧だった。しかし恵美にはどこが不十分なのかが分からずに、首を傾けた。窓も磨かれ、床も綺麗に見えたからだ。横田はその動きに直ぐに気がついた。
「恵美さん、迷ったり疑問に思っても、それを表に出してはいけません。特に役員の前では、能力を疑われます」恵美はそのとき初めて、自分が首を傾けているのに気がついた。
「すいません・・私は・・」恵美は慌てて頭を下げた。

「謝ってもいけません。これは叱責ではなく、アドバイスです。むしろお礼を言うのが当たり前です」恵美は横田の冷静な態度と判断に脱帽した。
「解りました。ありがとうございます」横田は静かに頷いた。
「では、話を戻します。見たようになんの変哲もない部屋ですが、副社長の色が出ています。解りますか」恵美は首を傾けようとする自分に気がつき、そしてその行動を抑えた。
「解りません」恵美ははっきりと思ったことを口に出した。
「そうです。それで良いのです。ただ、私には解ります」恵美は黙って横田の話に耳を傾けた。それは普通の新人教育には思えなかったからだ。
「見てくださいデスクの上を」横田はデスクに近寄った。恵美もそれに続いた。
「このペン皿。並び方はいつも同じでなければいけません」そのペン皿には、鉛筆、万年筆、赤ペン、黒ペン、ボールペンが整然と並んでいた。
2本の鉛筆は綺麗に削られ、長さも同じだった。それを見て恵美は、横田の言わんとすることが理解できたのだ。『常に同じ状態を保つ』だ。
この横田という男は、並の人間ではないと恵美は実感した。浩一から信頼されるには、それ相応の仕事をこなさなくてはいけないのだと、恵美は気持ちを引き締めた。それから恵美は、横田から心構えの基礎から教え込まれた。秘書のあるべき姿を・・・。

12章（3）

横田は自分の仕事をしながらも、恵美にあらゆる事を教え込んだ。スケジュール管理の仕方から、浩一の仕事上での癖。そして取引相手の癖や好みまで事細かく教えた。恵美は一生懸命にメモを取ったり、出来る限り横田の話に集中した。横田がいない時には研修のテキスト、役員名簿に目を通し、オフィスの配置や細かい並べ方まで頭に叩き込んだ。家に帰ればそれこそ電話の応対方にお茶の入れ方まで勉強したのだ。当然睡眠時間は少なくなったが、恵美には少しも苦にならなかった。気持ちは早く覚えたい一心だったのだ。テキストには、服装や化粧方法まで書かれていた。秘書は目立ってはいけないからだ。あくまでも浩一が主役であり、主役がスムースに動けるように演出するのが秘書である。

そう書かれていたのだ。服装や化粧まで変わると、恵美もそれなりの秘書に見えてきた。最初は戸惑っていた恵美も、何度か鏡に写すうちに不思議と自信が湧いてきた。気持ちは浩一に会いたかったが、中途半端な自分は見せたくないと、恵美は病院には近づかなかった。当然、ジュンと浩一の奇妙な関係など、想像もしなかったのだ。1週間が経った時、恵美は浩一と会うことが許された。もちろん仕事として会うだけだ。横田から渡された資料を持っていくだけだが、恵美は心の底から横田に感謝した。

「今の恵美さんならば、副社長も喜んで会うでしょう。しっかりとした秘書に見えますよ」確かに恵美は1週間で見違えるほど外見的にも、内面的にも、心構えも変わってきていた。自分でも変化は気がついていたが、横田に言われたことが嬉しかった。それほど横田の教育は厳しかったのだ。

時間が無いから仕方のない事だと割り切っていたからだ。浩一は身体が動かなくても、積極的に仕事をこなした。接客などは出来ないが、資料に目を通し的確な判断を下していたのだ。しかしそのとき

横田の情報が有ったとは、恵美は心にも思っていなかった。
「副社長、資料をお持ちしました」恵美は秘書らしく浩一に封筒を渡した。ジュンは何気ない素振りでお茶を入れていたが、妙によそよそしく感じられた。態度には問題はない。だが、浩一の目の届かないところでも、決して恵美と目を合わせようとはしなかった。
「それで、この役員は信用できそうか」恵美は浩一の質問に驚いた。まさかそこまで聞かれるとは思いもいなかったのだ。しかし浩一はまじめな顔で話している、嘘や冗談ではないようだ。恵美は困った。首を傾けそうになるのだけは抑えたが、答えは持ち合わせてはいなかった。
「どうしたのかね。新規の商談相手は調べるようにいってあるはずだが・・・」話し方から見ても、恵美は女性と見られていなかった。あくまでも秘書の一人なのだ。そう思ったら、涙が溢れそうになってきた。女性にも見られない上、秘書としても失格なのだ。そう思うと悲しさで胸が締め付けられ、流したくない涙までもが溢れて来そうだった。それを必死で我慢すると、恵美は頭を下げて大きな声で謝った。
「どうも済みませんでした。至急調べて結果を報告します」恵美の自信は音を立てて崩れ始めた。
「時間の無駄のようです。横田君を呼んでください」浩一の冷たい言葉に、恵美は唇を噛んだ。そして差し返された資料を持って、病室から逃げるように飛び出したた。廊下に出るとジュンと浩一の楽しそうな笑い声が聞こえ、恵美は思わず耳を塞いだ。『こんなはずでは』恵美は自分の馬鹿さ加減を呪った。恵美は我慢していた涙を、廊下で流した。人目も構わず涙を流した。そんな恵美を廊下の隅からじっと見つめる目が有った。康之だ。しかし康之は声も掛けずにその場を立ち去った。『なぜ、横田さんは言わなかったの』恵美は泣きながらも横田の言葉を思い出していた。そして研修用のテキストも思い出した。頭の引き出しの中から浩一の要求を探したが、どこにもそんな要求は入っていなかった。

今まで会社に利用され元彼に騙させれた恵美にしてみれば、横田も自分を陥れる人物に見えてきた。あれだけ事細かに説明する横田が、こんな肝心なことを言いもらす訳など無いと思ったからだ。絶望と怒りが恵美を取り巻いた。唯一秘書課で信用できるたった一人の上司、その横田の裏切りに恵美の心は、ぼろきれのように切り裂かれた。足どりも重く恵美は社に戻った。横田への怒りは絶望に飲み込まれ、怒る気力さえ失っていた。渡すはずの資料を持ち帰った恵美を、横田は不思議な面持ちで迎えた。

「どうしたのですか。資料は渡さなかったのですか」横田の顔を見上げ、恵美は口を開きかけたが、黙って首を振り一言だけ答えた。

「横田さんを呼べと・・・」横田はそれで全てを悟ったように、声を出して笑い始めた。恵美はこのとき初めて横田の笑顔を見た。自分の失敗がそれほど嬉しいのかと、目だけは怒りに満ちて横田を見つめた。ところが横田の話は恵美の想像とはむしろ正反対だった。

「相手の人柄を聞かれたのではないですか」恵美は上目使いのまま黙って頷いた。

「やはり、私の思ったとおりです」横田の笑いは更に大きくなった。さすがの恵美も我慢できずに横田に食って掛かった。

「一体、どう言う事ですか。私には何も言わないで・・・」

「すみません。まさかそこまで副社長が言うとは、私も予期しませんでした」横田は恵美に話を遮った。それでも恵美には何も理解できず、怒りがこみ上げその勢いで口を開きかけた。

「認められたのですよ、秘書として」恵美の言葉よりも先に横田が口を開いた。

「え？」まだ、言葉の真意を見出せずに恵美は戸惑った。

「いいですか、単に資料運びにそんなことを聞きますか。仕事のパートナー以外に聞きますか」先ほどまでの笑顔ではない。真剣そのものだった。考えればそうだ。単に資料の配達ならば、『はい、ご苦労様』で、終わるはずだ。ところが浩一は意見を求めた。自分に意見を求めたのだ。

横田の言うとおり、パートナーの一人に認められたのだ。そう思うと恵美の絶望も怒りも、全てが希望に形を変えた。そうなれば恵美の行動はただ一つ。相手の人柄調査だ。しかし浩一は横田を呼べと言った。恵美は悩んだ。悩んだ素振りを見せずに悩んだ。

「恵美さん、直ぐに戻りなさい」横田は恵美に言った。

「え、でも・・」横田の気持ちは嬉しいがこのまま、浩一の所へは戻れなかった。

「病院に着くまでに、私が調べておきます。病院に到着したら連絡を下さい」恵美は一時でも横田を疑った自分を恥じた。しかし今は時間が無い。恵美は元気良くお礼を言うと病院に向かった。希望に満ちた一歩を踏み出した。

12章（4）

「ありがとう。参考になった」あらためて浩一の前に姿を現した恵美は、威風堂々とした表情だった。その表情を見て取った浩一は、何も言わずに恵美の報告を聞き、労いの言葉をかけたのだ。恵美はその言葉を聞いて、満足の笑顔を浮かべた。しかし安心は出来ない。今回は横田の力に寄るものだ。これからは恵美が調べ上げ報告しなくてはならない。そのことでは、一抹の不安を拭えなかった。

「ところで・・」浩一は資料を封筒に入れながら、恵美に尋ねた。

「君も知っていると思うが、私は君を雇った記憶がない。もう一度名前を聞かせてほしい」浩一は恵美の顔をじっと見つめた。浩一に見つめられる事など久しぶりで、恵美の顔は見る間に紅潮し始めた。あの日以来のことだ。それでも平静を装い、恵美は事務的に答えた。浩一はその答えを聞いても、顔色一つ変えずに、事務的な挨拶を交わしただけだった。恵美は一筋の希望の光が消滅したかに感じた。名前で思い出すのではと期待したからだ。『焦ってはいけない』恵美は自分に言い聞かせ、病室を出ようとした。そのとき初めてジュンが目で合図を送った。恵美は廊下でジュンを待った。ジュンは財布を持って廊下に出てきた。行き先の想像がつき恵美はジュンのあとに続いた。売店前のソファに並んで座り、ジュンは大きくため息をついた。ジュンは苦悩の色を隠せずにいた。恵美は黙ってジュンが口を開くのを待った。やがてジュンは恵美に向き直り静かに口を開いた。

「京子さんって」

「私の友達です。自殺未遂した」何故、京子の名前が出たのか不思議だったが、恵美は素直に答えた。

「それでか・・・」ジュンは恵美と浩一が友人を探しに行ったことは聞いていた。

「どうかしたんですか」恵美には、京子とジュンの悩みの接点が見

つけられない。
「浩一さん、夢を見るらしいの。夢の中で自分がその名を叫んでいるって・・」恵美にはその場面が直ぐに理解できた。一緒に京子を探した浜辺。月明かりのなか、人影を見つけ名前を呼んだ浜辺。浩一が京子の名を叫んだのは、その時だけだからだ。恵美は嬉しくなった。浩一は少しでも覚えていたのだと、心は舞い上がりそうだった。
しかしジュンはまだ、苦悩の表情で恵美を見つめていた。
「それがどうしたのですか」ジュンは恵美の顔から目をそらせ、呟くように答えた。
「私と勘違いしてるの」
「え？」聞き間違えかと思った。
「私の本名・・・今日子なのよ。私、知らないから答えちゃったわよ」
「それで、浩一さんは・・」恵美は不吉な予感がしたが、聞かずにはいられなかった。ジュンもどう答えたものかと、悩んでいたがやがて口を開いた。
「私と付き合ってると思い込んでるの」ジュンの答えに恵美はショックを隠せなかった。浩一は自分の事など少しも覚えていないようだ。
「そこで、私からお願い・・いいえ、通告があるの」ジュンはいたってまじめに話した。
「なんですか」恵美も何も恐れなかった。
「私はあと一週間しか浩一さんに付き添わないわ。その間に恵美さん、貴方が信用を得て私と交代してほしいの」
「でも、一週間なんて・・」はっきり言って自信はなかった。ジュンは思わず涙を流した。
「私だって、辛いのよ・・・」ジュンの涙を見たときに、恵美は自分の事しか考えていないことに気が付いた。ジュンの気持ちなど少しも考えていない。そんな自分に腹が立ってしょうがなかった。ジ

ュンも浩一を好きになっていたのだと、この時初めて気が付いた。
それでもジュンは自分を裏切ることもなく、
恵美の立場で考えていてくれたのだ。恵美には返す言葉もなくなった。
「わかりました。あと、一週間お願いします。必ずジュンさんと交代します」ジュンは何度も頷き、売店に入っていった。二冊ほど週刊誌を抱え、恵美に手を振り病棟の奥に向かっていった。その間恵美はじっとソファに座り、自分のこれからをシュミレーションしてみた。『よしやれる。いや。やらなくてはいけないの』そう言い聞かせ、ジュンが見えなくなると同時に立ち上がり、病院をあとにした。
恵美は横田にお礼を伝え、正規の手順で浩二に面会を申し出た。浩二からは直ぐに返事が届いた。『今夜、実家のほうに、七時』返事の言付けはそれだけだった。それを確認すると、そのままテキストを広げパソコンに向かい、恵美の勉強は更に続けられた。そして小さな子供が言葉を吸収するように、恵美は貪欲なまでにそれらを自分のものにしていった。

13章（1）

「そうですか・・」浩二は恵美からジュンの事を聞き、一言だけで口を閉じた。一週間・・・。はっきり言って期限は短い。それまで浩一は恵美に心を開くのか、浩二にはそれが心配だった。

「厳しいですね。兄の性格から言っても」そうは言っても、何処かで恵美を思い出さないことを願う浩二がいた。もちろん浩二自身にもそのことはわかっていた。いまだに恵美を諦めきれない自分をしっかりと把握していた。葛藤はあるものの、一番の願いは恵美の幸せだとも考えた。

「はい、そう思います。でも、どうしたら・・」恵美とて浩一との道のりは長かったのだ。初めて会ったときの浩一の恥じらい。言葉に詰まる浩一の話。そんな過去の出来事が一瞬で蘇った。

「いっそのこと本当のことを言ってはどうですか」浩二は自分の思いを断ち切るためにも、そう提案したのだ。

「本当のことですか」恵美は戸惑った。果たしてそれで浩一が思い出すのか、それが心配だったのだ。仮にそう言って浩一が納得しても、二人の思い出は蘇らないのだ。あの日は二度と戻らないかも知れないのだ。

「私から話しても構いません」浩二は言った。

「どうだろうか、わしに任せてもらえないか」康之が姿を現した。

「とうさん」浩二は康之の在宅を知らなかったにも関わらず、康之は普段着に着替えていた。

「わしが言えば信用するだろう。もちろん浩二、お前でも信用するはずだが。もしもそのことでお前を恨むことにでもなったら・・。ただし恵美さんの承諾が有ればの話だが・・」浩二は康之の言葉を理解した。浩一が余計なことと思ったときに、自分が恨まれる事をかってでてくれたのだ。

父ならば浩一が恨みも抱く事もないだろうと思った。

「とにかく、一週間あります。その間は、私に任せて頂けませんでしょうか」恵美は康之の提案に頷きながらも、僅かな望みも捨てたくはなかったのだ。そんな恵美の真剣な眼差しに、康之は心を打たれ一任することにした。やはり廊下で見た恵美の涙は、口惜しさの涙だったと康之は悟った。

「それで、恵美さんが満足できるのであれば、わしは貴方に任せますよ」その言葉は優しく恵美に伝わった。

「僕も同感です。でも、一週間過ぎても無理なようであれば、父に話してもらいます。良いですね」浩二の言葉は恵美を勇気付けるのに十分すぎた。

「わかりました。お願いします」恵美は二人の恩と優しさにも報いるために、今一度勇気と奮い起こし、浩一と対決するかのように、気を引き締めた。

「あらあら、随分寂しいことを話しているのね。あのこは大丈夫ですよ」浩一の母が茶のお盆を持って現れた。恵美はこのとき初めて、家具が少ない理由を認識した。全ては、目の悪い母の為だったのだ。

「はい。そうですね。私は、信じています」恵美は母の愛情もしっかりと受け取った。前に訪れた時にも、浩一の母は一人悠然と構え浩一の無事を疑いもしなかった。おそらく今回もそうなのだろう。母だからこそわかる何かを、感じ取っているのかも知れない。

「その心は、きっと通じますよ、恵美さん」その顔は以前と変わらぬ笑みが溢れていた。恵美は家族の愛をしっかりと感じた。そして自分への愛もあることに気が付いた。『この家族は私も愛してくれている』そう思えるほど、ここは居心地が良く優しさに包まれていた。

後ろ髪を引かれる思いで、恵美は浩一の実家からアパートに戻った。今までは自分一人の城だと思い、居心地の良い部屋だったのが、急に冷たく感じられ、恵美は部屋に入るのを躊躇った。それでも靴を脱ぎ蛍光灯を付けると幾らかは落ち着きを取り戻した。今、恵美の心の中にあるのは『あの家族と一緒に居たい』そんな気持ちだった。

そのためにも越えなければならない障害は山積みだった。恵美は掛け声まで
発し、テーブルにテキストを広げて必死の勉強が始まった。兎にも角にも時間がないのだ。言われた事には迅速に答えなければならないし、浩一の代わりに人と会うこともあるだろう。その時に浩一の顔に泥を塗ることは許されないのだ。最低限度以上のものを身に着けなければ、到底、浩一には認められずに心を開くこともないだろう。恵美の猛勉強は明け方近くまで続けられた。それでも恵美は疲れた表情一つ見せずに出社し、更に難しい本を横田に要求した。その後も、余裕がある時には常に勉強を続け、さすがに横田の驚きも半端ではなかった。たったの三日ほどで、恵美は別人と化したのだ。その力量を試される時がついに訪れた。浩一の名代として、取引相手と会食することになったのだ。相手は浩一の事故も知っており、秘書が現れることも知っていた。しかし相手は、横田が来るものと思っていたのだ。横田は皆も認めるやり手の秘書だ。その話は社内に留まらず、多くの取引先にもに広まっている。その話をｓにしている今回の相手も、それなりの覚悟で緊張した表情で待っていた。しかし、現れた恵美の顔を見るなり安堵の表情を浮かべた。横田でなければ、有利な話し合いが出来るとでも思っていたのだろう。ところが一時間もしないうちに、相手はお絞りで何度も顔を拭く羽目になった。恵美に敗北したのだ。勝敗で言うのはおかしいかも知れないが、ビジネスは常に戦いだと恵美は勉強の中から身に付けたのだ。これがきっかけで、浩一は恵美を普通の秘書以上に考え始めた。そして恵美と接する時間が長くなるにつれ、違う夢をみるようになったのだ。ジュンのことも気がかりだが、ジュンは断固として自分ではないと言い張っていた。浩一の心の叫びによるものか、その夢は徐々に明るさを取り戻しぼやけていた場面が鮮明になり始めていた。その夢とは・・・。

13章（2）

浩一の夢ははっきりとしてきた。布団に包まる二人。もちろん一人は自分だが、その自分の胸に顔を埋める女性。そこまでは、はっきりと見えるのだが、その女性が顔を上げると画面は乱れるのだった。しかしそれはジュンではないことは確かだ。浩一は焦った。その焦りからくる苛立ちが向かった先は、新しい秘書の恵美だった。思い出せない苛立ちと、身体の自由が利かない口惜しさは、日増しに浩一の神経をすり減らしちょっとしたことで当り散らすようになった。

「君の報告は中途半端だ。調べなおせ」浩一に書類を付き返され、恵美は唇を噛んだ。それでも恵美は気丈に構え、平素を装い静かに答えた。

「わかりました。調べなおします」恵美は深く頭を下げると、病室から出て行った。

「恵美さん待って」ジュンが廊下まで追いかけてきた。

「あと二日よ、大丈夫」ジュンは恵美の顔を覗き尋ねた。

「ええ、平気です」恵美はそう言ったが、自分の涙には気が付いていなかった。ジュンはポケットからハンカチを取り出すと、恵美の頬を流れた涙を拭った。

「どうしてそこまで・・・」ジュンにはここまでする恵美の気持ちが理解出来なかった。

「ありがとう。でも、教えてしまったら、思い出してくれないかも知れないわ。それに思い出してもそれが教えられたことだと、浩一さんが勘違いをしたら・・・」恵美は言葉を失った。それ以上の想像は怖くて口に出せなかったのだ。ジュンは何も言えなくなった。

「強い人・・とても私には真似できないわ」ジュンは、何度も首を振った。恵美が自らを逆境に置いているのは、全て浩一の為だと、ジュンあらためて思い知らされた。そのため自分を最大限犠牲に出来る恵美が、本当は羨ましくさえ思えた。

「でも、私は幸せよ。浩一さんの近くに居られるから」恵美は涙を拭い笑顔で走り出した。恵美の後姿を見ながら、ジュンは一時でも自分が浩一と結ばれる夢をみたことに、怒りと恥かしさがこみ上げてきた。そしてジュンは浩二に連絡を入れた。

「もしもし、ジュンかどうした」

「浩二さんの知っている範囲で構わない。二人の出来事を教えて」ジュンは挨拶もほどほどに用件だけを伝えた。

「兄と恵美さんだね」浩二にも時間の無いことは解っていたのだ、直ぐに焦りの気持ちが声に現れた。

「ええ、このまま指をくわえて見ていられないわ」ジュンは残りの二日で、どうにか思い出すきっかけを作りたかったのだ。そのためには今まで二人に何があったのかを知らなくてはならない。恵美には悪いと思ったが、これが恵美のためだと浩二に聞いたのだ。

「わかった。僕の知っていることは全て話すよ」浩二も実のところ焦っていたのだ。約束の期限が迫る中、恵美からは希望に繋がる報告がなかったからだ。そんなときに丁度ジュンの申し出があり、浩二は協力することを約束した。浩二は毎晩仕事帰りに真っ直ぐに病室に顔を出したが、今日はいつもと違っていた。売店前でジュンと待ち合わせたのだ。

「ごめんなさい。待ったかしら」ジュンは腰も掛けずに浩二に尋ねた。

「いや、5分くらいだよ」実際には15分は待っていたが、浩二は気にせず答えた。

「ちょっと待ってね」そう言うとジュンは売店に駆け込み、雑誌を適当に買ってきた。もちろんカモフラージュのためだ。浩二と結託していたと浩一に感ずかれないためだ。ジュンは浩二の話を熱心に聞いていた。そして二人の出来事で何が一番、浩一の印象に残っているかを話し合った。その結果幾つかの案が出たが、結局は思い出すまで全てを試してみようとの結論に達した。

「どうだい、具合は」浩二が元気良く病室に入った。

「ああ、浩二か・・・まあまあだ・・」浩一の返事には元気がなかった。それも致し方ないことだ。恋人はジュンだと思っていたのが、自分の夢がそれを否定したのだ。しかも、本当の恋人は名乗りも上げない。そんな苛立ちと動かない身体とで、浩一の精神は崩壊寸前だった。そのことは浩二にも伝わった。浩二も、そんな浩一に一刻も早く思い出させる必要があると感じた。浩二は手土産の果物をテーブルに置くと、一つ咳払いをしてからソファに腰をおろし足を投げ出した。

「ジュンを見なかったか・・・。どこに行ったんだ・・」明らかに苛立っている。浩二は声の調子で浩一の苛立ちを悟った。

「ああ。売店で見かけたよ」浩二は何気ない素振りで答えた。

「まったく。いつも雑誌ばかりで・・・」声は微妙に震えていた。

「まあ、いいじゃないか。ずっと付き添っているんだから」そのとき病室のドアが開いた。

「ごめんね」ジュンは明るい声で病室に戻ってきた。そして浩一に近づこうとした時、浩二の足につまずきバランスを失い見事に転んだ。

「痛〜い。ヒールも折れたみたい・・」もちろん全て演技だ。浩一と恵美の出会いを再現したつもりだったのだが、浩一は何も言わなかった。

浩二がジュンに手を貸し起こしたが、二人は力なく首を振った。ところが浩一は何も言わないのではなく、言えなかったのだ。その状況は確かに自分の記憶にあるような気がしたからだ。浩一は激しい頭痛に襲われ、思わず大声で叫んだ。ジュンは訳もわからずその場に立ち尽くしていたが、やがてナースコールに飛び付き何度も押した。看護婦が現れるまでの時間が、三人には異常に長く感じられた。

13章（3）

鎮静剤を注射され、浩一は落ち着きを取り戻しそのまま眠りに付いた。看護婦の話では、思い出そうとする気持ちが頭痛を呼び起こすのか、急激な頭の回転に脳が付いて行かないせいだと二人に説明した。そのことは以前医師から聞かされていたにも関わらず、二人の驚きは半端では無かった。それほどまで苦しむ浩一を見たことが無かったからだ。特に浩二は浩一との意思がシンクロしたのか、同時に激しい頭痛に襲われたのだ。

静かな寝息を立て始めた浩一を見て、ジュンは小声で浩二に話しかけた。

「戦っているのね。浩一さんも」眠ってはいるが、眼球は激しく動き続けていた。

「ああ。頭の中でね。きっと何かを思い出しそうなんだ」浩二も浩一の顔を覗き込んだ。時折苦痛の表情を浮かべるその顔は、痩せ細り血色も良くは無かった。乾ききった唇は皮がむけ荒れ放題。頬の肉は削げ落ち瞼も大きく落ち窪んでいた。食事が取れないのだから仕方のないことだが、精神的な衝撃も計り知れなかった。浩二はその顔を直視するのがやっとの想いだった。

浩一は夢をみていた。それは夢か記憶かははっきりとは分からない。だが現実味を帯びた夢だった。夢の中の浩一はある女性とぶつかり、定期入れを落とした。その女性は自分の名を呼んで驚いていた。残念なことは、その女性の顔は霧に包まれたように、はっきりとは見えない。

その女性はハイヒールの踵を折り、足首を捻挫したようだ。たち上がるのももどかしく、その女性は困り果てていた。そのとき自分は何を思ったのか、『行きましょう。送ります』とだけ伝え、半ば強引にその女性をタクシーに押し込んだ。そして女性から自宅を運転手に告げさせた。

もちろん夢の中の話ゆえ、浩一はどもりも恥ずかしさも無かった。しかしタクシーの中では終始口を開かなかった。それでもこれほど近距離で女性と接した事は浩一にとっては極稀なことだ。その女性の息使いまで聞こえてきていた。その呼吸は浩一の疲れた心を癒すような、規則正しい息使いに感じた。自分は結局タクシーの中では顔さえ見れなかった。それでも最後に女性が礼を行言った時に見た顔は、やはり霧がかかったようにぼやけていた。それでも何処かに安心し心奪われる自分をはっきりと意識していたのだ。浩一は夢の中でも考えていた。『誰だろう……』と。

浩二とジュンは次の作戦を練り始めた。幸い浩一は鎮静剤で深い眠りについている。

「じゃあ、料理屋で再会した時は」ジュンが尋ねた。

「それも大きな出来事だが、ここでどうやって再現してみせる」ジュンも浩二も病室を見回した。広さは十分にあるが、座敷を作る訳にも行かないし、まさか酒や料理を用意することも出来ない。ジュンは首を振って答えた。

「そうね。難しいわね」しかしジュンは何かを思い出したように話を続けた。

「うちのお店は……無理か、ここでは」ところが同じ状況に思え、言葉を閉ざした。今度は浩二が気が付いた。

「ちょっと待てよ。恵美さんは今薄化粧だね。来夢でやった化粧はどうだろう。もちろんジュンが施した化粧だよ」実際に浩二もその時の恵美の変化に心を奪われたのだ。ジュンが恵美を化粧室に連れ込み施した時だ。考えればその時以来、浩一と浩二は恵美に少なからず好意を持ったのは確かなようだ。

「そうね、今なら変化も大きいし、刺激にはなるかもね。病室では出来ること限られるし、なんでもやりましょう」かと言って直ぐに何かを出来るわけではない。当の浩一は深い眠りの中だし、恵美はここにはいない。結局、二人は何も出来ずにソファに座り込むだけだった。ジュンは思い出したようにお茶を煎れ、浩二と自分の前の

テーブルに置いた。長い沈黙のあと、浩二が口を開いた。
「ジュン、本当は兄貴が好きなんだろう。違うか」
「そう……、思う。でも、私には太刀打ちできないわ、恵美さんの愛には」
「そうだね」浩二はそのまま黙ってしまった。恵美の兄への気持ちは痛いほど理解できる。理解できるからこそ浩二も辛く言葉を失ってしまったのだ。
確かに恵美は強い。その辺の女性よりも、銀座で働く一流の女性よりも、そのことが恵美を好きになった理由かも知れない。また沈黙が流れた。
「浩二さん」今度はジュンが沈黙を破った。
「浩二さんも恵美さんを好きなんでしょ」流石にジュンだ。浩二の気持ちは見透かされていた。浩二は別段驚きもしなかった。
「ああ。兄と一緒だ。僕と兄は同時に恵美さんを好きになった。その後の展開では兄に負けてしまったけど、一歩違えば……、そんなことばかり考えていたよ。でも、現実に恵美さんは兄を選んだ。そして二人は僕にとってもかけがえのない人たちだ。応援しないわけには行かないだろう」
「そうね、私もそれに同感だわ。浩一さんにはお世話になり通しだし、恵美さんは同じ女性から見ても魅力的。第一心が綺麗。私なんかよりずっと……」
一瞬浩二は、そんなジュンに女の一部を垣間見た気がした。そしてまた、長い沈黙が二人を包み込んだ。

13章（4）

浩一がふと目を覚ますと、浩二の姿は既に無くジュン一人がソファで目を閉じていた。病室は消灯時間も過ぎているようで、スタンドの灯りとキッチンの照明だけが点いていた。浩一は夢を思い出した。顔の見えない女性はジュンではない。ソファで眠るジュンと、夢の女性を比べた答えだ。しかし、その声だけは聞き覚えがあるような気がした。だが答えは出ない。どこで聞いたのか、最近聞いた気もするが、遠い昔のような気もする。浩一はまたも激しい頭痛に襲われそうになった。なぜか自分自身が拒否しているように思えて仕方なかった。ゆっくりと息を整え、浩一は頭痛が起きない様に、気持ちを落ち着けた。やがて規則正しい呼吸と共に、頭痛の種は薄らいでいった。

「ジュン、ジュン」浩一はジュンを呼んだ。声を出すと頭の奥が響くように疼いた。

「ううん・・・え？」ジュンは目を開け浩一に駆け寄った。

「どうしたの、大丈夫」ジュンは目を細めながらも、心配そうな眼差しを浩一に向けた。

「ああ、また頭痛が起こりそうになった。一応、看護婦から薬を貰ってほしい」

「わかったわ」ジュンが行こうと振り向いた時、いきなり浩一が腕を掴んだ。

「ジュン、すまない……。君じゃなかったんだね」

「だから、だから何度も言ったでしょ。私とは付き合ってないわと」

「そうだった……」ジュンは優しく微笑むと浩一の手をゆっくりと払い、病室を出て行った。浩一の頭痛は完全に治まっていた。それでもジュンの顔をしっかり見たい為の小さな嘘だった。そして至近距離から見たジュンは、明らかに夢の人物ではないと確信できた。声もまた然り……

「貰ってきたわ、今、飲むの」ジュンが薬を差し出したが、浩一は首を振った。
「いいや、いらない。それより、聞きたいことがある」
「なに……」ジュンは身構えた。
「君は、知ってるね。僕の恋人を……」ジュンの思って通りの質問だった。
「知らないわ。浩一さん教えてくれなかったもの」ジュンは予め用意されていた答えを、頭で整理しながら伝えた。この答えは浩二と作ったものだった。お互いに同じ答えを言わなくてつじつまが合わなくなるためだ。
「え、教えなかった」浩一は正直に驚いた。浩二とジュンに秘密にするような女性と付き合っていたのかと思ったからだ。
「そう、怪しいな、ってみんなで話しても、言わなかったのよ」ジュンは、更に話を続けた。
「言わなかった。僕が……」もちろん全て出たら目だ。恵美から固く口止めされていたからだが、ジュンは気の迷いを感じずに居られなかった。
浩一は何故自分が報告しなかったのかが、疑問に思えて仕方なかった。ジュンはともかく、浩二にまで隠す必要がどこにあったのだろうか。
考えるうちに頭の奥が疼きだした。浩一が無理に思い出そうとしたり考えたりすると、頭痛は容赦なく襲い掛かってきた。浩一は気持ちを抑えゆっくりと息を整えた。どうやら薬よりも効くようだ。ジュンはそんな浩一を心配そうに見ていたが、どうする事もできない自分が情けなかった。
それでも、無理やり薬を飲ますと浩一は静かに目を瞑った。まだ、外は暗闇に支配されていた。車の通りも完全に途絶えていた。ジュンは窓から表を見ながら、急に自分の仕事に嫌気が差した。繁華街は一晩中起きてはいるが、ここの住人達は深い眠りについている。そして灯りの消えた住宅達は心を休めているようだ。そんな風景が

当たり前に思え、朝まで働く自分が異世界の住人に思えたのだ。そう、今見える世界が平凡だが当たり前に写り、幸せにさえ感じたのだ。単なる付き添いでしかないが、こんな生活にも少なからず幸せに感じたからだ。今のジュンには旦那の看病をする妻の心境に思えた。浩一が眠りに落ちたのを確認してから、ジュンもソファで目を閉じた。どちらにしろ、ジュンの付き添う時間は限られているのだ。その頃浩二は、父康之と膝を突き合わせていた。どちらも真剣な眼差しで、浩二は一方的に頷くだけだった。結局、山田家の照明は夜を徹して灯っていた。

14章（1）

翌朝早くに浩二と康之が病室に現れた。ジュンは二人にお茶を出すと、
何も言わずに病室から姿を消した。仕事の話だとわかったからだ。
「浩一、浩二を副社長にする。いいか」
康之は唐突だが率直に話した。そして答えを待つかのようにじっと浩一の目を凝視した。
「はい、お任せします」
浩一はこの時が来るのを薄々感じていたのだ。もちろん快く聞くつもりだった。
康之はしっかりと頷くと更に話を続けた。
しかしその顔は険しかった。浩二の話よりも重要だと言う事は浩一にも直ぐに理解できた。
「浩一、そしてお前の待遇だが……」
康之の険しい表情は哀れみにも似た表情に変わった。
「言ってください」
浩一は覚悟を決めて聞き返した。
「うむ。浩一、お前は顧問にするつもりだ」
「現役を退けと……」
語尾を濁した。本当のところは、降格程度に思っていたのだ。
しかし顧問では実質的な引退と同じだ。浩一は気が重くなるのと同時に、
頭痛の種が疼きだすのを感じ始めていた。
「兄さん、今は治療に専念してほしいんだ」
浩二はこの時やっと重い口を開いた。
「そうだ浩一、今は元気になることが先決だ。元気になれば……」
康之の言葉を浩一が遮った。
「元気に？元気になっても自由に動けない、そんな僕に復帰など…

…」
嫌味など言うつもりは微塵も無かった。
それなのに口から漏れた言葉は二人の意見を批判するには十分だった。
浩一は苛立ち初め同時に頭痛も徐々に疼きを強めた。
「後任には誰を……」
浩一は息を整えながら康之に尋ねた。
「営業本部長を浩二の後釜にと思っている。今日の重役会議で計ることになるが……」
康之の話を聞き終わる前に、浩一はとうとう激しい頭痛に襲われ、自分でも情けない声を上げてしまった。義之と浩二はどうしてよいかわからずに、
ただ慌てるだけだった。その声を聞いて廊下で待っていたジュンが駆け込んできた。
そして浩一を見てとると一杯の水と昨夜貰った薬を浩一に飲ませた。
「あまり興奮させないで下さい」
ジュンは二人を睨んだ。その顔は正直に二人を非難した顔つきだった。
康之と浩二はジュンに後を任せ社に向かった。
本来ならば、こんな状態では話してはいけなかったのかも知れない。しかし浩一には言っておきたかった。事後報告のほうが傷つくと思ったからだ。
ところが予想以上に浩一は混乱したようだ。
そう、受け入れられないとでも抗議するようにさえ思えた。
時期早計だったと康之は反省したが、重役会からの意向を無視するわけにもいかなかった。
重役会では、半ば空席状態の副社長の椅子について、再三の要望書が届けられていたのだ。
浩二が昨夜あれだけ反対したことが、今更になって康之には理解できた。

双子の心は確かに似ていた。
社に向かう車の中で、黙って外を見つめる浩二に、康之は話しかけた。
「どうだろうか、お前の意見を聞きたい」
「なんですか」浩二は外を見つめたまま返事を返した。
浩二には浩一の辛さが手に取るように理解できたからだ。
「浩一は元に戻れるだろうか……」
「今更……」浩二は言葉を切ったが、堰が崩壊するように続けて言い放った。
「私が昨夜あれだけ反対したにも関わらず、たった今、兄に死刑宣告をしたんですよ。
仕事に誇りを持って今まで頑張ってきた兄に……」
しかし康之は少しも動じた様子を見せなかった。
「お前の気持ちも、浩一の気持ちも良くわかる。しかし会社を私物化することは出来ん」
「わかっています。確かに兄の身体は元には戻らないでしょう。しかし、
仕事復帰は出来ると思ってます。いや、兄ならば障害を乗り越えても、
必ず復帰出来たでしょう。ところが父さんはその道を閉ざした。兄の奮起を損なったのです」昨夜と同じ様な答えだが、浩二の気持ちに偽りは無かった。
双子ならではの信頼関係がその気持ちを不動のものにしていたのだ。
康之は腕を組み考えた、浩二の意見は昨夜のうちに聞いていた。
しかし、社の為と心を鬼に変えて今日に望んだのだ。そして浩一の態度……。
父親としては明らかな失敗だった。社は確かに大事だが家族はそれ以上に大事なことを、
二人の息子から教えられた気がした。
「浩二」康之の呼びかけに浩二は返事も返さなかった。

ただ奥歯を噛み締め窓の外の流れる景色を、じっと見つめるだけだった。
「お前は兼任できるか」返事を待たずに康之は言った。
「え」浩二は言葉の意図を計りかねた。
「本部長の昇格は見合わせる。浩一が戻るまで、お前は兼任できるか」
「はい。必ず」浩二の答えは強くそしてはっきりとした自信が窺えた。
それを見て康之も心を決めたのだ。携帯電話を取り出し社に連絡を入れた。
社では既に重役会の準備が始まっていたが、連絡を受けた男は議題のテーマから一つを削除した。『本部長の昇格の件』それは各テーブルに置かれた分厚い紙の束の中からと、
正面に据えられたホワイトボードから跡形も無く消え去った。

14章（2）

会議は康之の鶴の一声で終了した。議題から削除したにも関わらず、最後は浩二の後任について議論が交わされたのだ。散々揉めていたのだが、

最終決定は康之に委ねられたのだ。浩二は会議後直ぐに副社長部屋に向かった。

横田と恵美に報告するためだ。横田と恵美にも会議の議題は知らせれていて、

二人は不安な面持ちで待っていた。

「どうなりましたか」

浩二の顔を見るなり、横田が詰め寄った。

「とりあえずは私が兼任します。もちろん兄が元気に復帰すれば、この椅子は返します」

「そうですか」

横田は安堵の表情を浮かべた。内心では社長派に押し切られるのではと、思っていたからだ。

「ただし、私も兼任する以上、忙しいくなることには避けられません。そこでお二人にはもっと働いていただくことになります。構いませんか」

浩二は、真剣な眼差しを横田に向けた。横田は一瞬考えて浩二に尋ねた。

「本当のことをおっしゃって下さい。副社長は元気に戻られますか」

横田は浩一に心底忠誠を誓っているようだった。

「間違いありません。兄は必ず復帰します。それまで、兄の為にも私を補佐して下さい」

浩二は戸惑うことなく頭を下げた。

「わかりました。貴方にも今ここで、忠誠を誓います。何なりと申し付けて下さい」

横田は浩二よりも深く頭を下げた。恵美も遅れながらも浩二に頭を下げた。
「では、これからはここでの仕事が主になりますが、専務としての仕事もあります。
今の秘書を首にも出来ません。一緒でも構いませんか」
浩二は横田に尋ねた。と言うのも、横田という男はどちらかと言えば一匹狼なのだ。
仕事が出来る分、共同作業は出来ない性分だった。
恵美だけは会長の意向から教育を受け持ったが、浩二の秘書とは馬が合わなかった。
しかし横田は色よい返事を返した。
「副社長のためです。構いません」
「わかりました。では横田さんには私の第一秘書になっていただきます。
私の今の秘書を第二秘書にします。そして恵美さん。恵美さんには兄の第一秘書になってもらいます」
恵美も横田もその言葉に即座に反応した。それは浩二にも予期していたことで、
口を開こうとした二人を押さえ話を続けた。
「もちろん兄が復帰するまでですが、兄の仕事は兄が一番良く知っています。
そして私は今以上に忙しくなるでしょう。恵美さんには私と兄との連絡役をお願いします。
緊急でわからないことが有っても直ぐに対処できる体勢を取ってほしいのです。
わかりますね」
浩二の瞳には絶対的な信頼と強い信念が窺えた。
「わかりました。私で出来ることは全力でぶつかっていきます」
恵美の返事も力強いものだった。早速浩二は部屋の模様替えを行った。

横田としては守り通したものが崩れる気持ちがあったが、
浩一副社長のためと思い素直に指示に従った。
浩二はとにかくここで福社長と専務の仕事をこなさなくてはならない。
一つ間違えば再度、専務の席を巡っての議論が繰り広げられるだろう。
それだけはどうしても避けたかった。今浩二の最優先事業は、
恵美の元務めた会社との提携プロジェクト、浩一が担当していた外資系企業との技術提携、
その他諸々の諸事業及び情報収集などである。
そこでまずは浩二は、専務の仕事の提携プロジェクトに力を注いだ。
もちろんその間は恵美の協力も欠かせない。なんと言っても恵美の元、勤め先だからだ。
しかしその前に、ジュンの付き添い期限も終わってしまう。浩二はジュンに連絡を入れた。
「どうにかあと2週間付き添ってもらえないか」
「……無理よ。私だって辛いの」
ジュンの返事に浩二は何も言えなかった。恵美はこの時かなり浩一からの信頼を勝ち取り、
付き添っても問題がないところまで信用は得ていた。
しかし恵美も自分が付き添う気でいたが、浩二の状況を考えると、
浩一のためにも付き添う以上の重要な役割を果たさなくてはと思ったのだ。
浩一が元気になるためにも戻るポストは何が何でも守る必要があった。
もしもそれが無くなったしまえば、人一倍情熱家の浩一の気力が失せてしまうのは、
非を見るよりも明かだった。恵美は自らもジュンに頼みに向かった。
「でも、恵美さん。本当に良いの」
ジュンは呆れた様子で恵美を見た。

「ええ、どうしても浩一さんのポストを守りたいんです」
「でも、浩一さんは恋人が私でないのを気が付いたわ。今なら思い出すチャンスじゃないの」
「ええ、わかります。でも、私だとわかっても、戻る仕事が無ければ、浩一さんはなんと思うかしら。やる気を起こしてくれないかもしれない。戻る仕事があれば浩一さんは奇跡を起こしてくれると信じているの」
「恵美さん……」
ジュンは恵美の考えを覆すほどの言葉が見つけられなかった。
同時にジュンはこの二人の為には、どんな犠牲もいとわない覚悟を決めたのだ。
「わかったわ。私、はっきりと夜の仕事を辞めます。戻るところが有ると思うから迷うのね。今から、私を手足のように使っていいわ」
ジュンもまた恵美でも気持ちを覆せないほどの言葉を放った。
恵美とジュンは互いに目に見えぬ絆があることを、心の奥底でしっかりと確認し合っていた。病室に戻ると浩一は恵美を快く迎えた。
恵美は今日の役員会議の結果を伝えた。
「そうか…浩二が……」
「それによって、横田さんが第一秘書になりました。私が貴方の唯一の秘書です。
全ては私に言うなり指示を出してください」
恵美はあくまで事務的態度を崩さなかった。
「わかった。とりあえずは、進行中の議題はわかっているね。浩二に至急届けてほしい」
「わかりました、この書類ですね」
恵美が枕もとの書類を持ち上げた時、浩一は軽い目眩を起こした。
それは電灯の光の影になった恵美の横顔が、脳裏のどこかにあるように感じたのだ。
「恵美君……」
「はい？」灯りに照らされた恵美の顔をしばらく見つめてから、浩

一は何度か首を振った。
「いや、なんでもない。じゃあ、頼んだよ」
そうして病室から出て行く恵美の後ろ姿を目で追ったが、浩一の中では、
はっきりとした答えは浮かんで来なかった。しかし訪れるであろうと思われた頭痛は、
その後浩一を苦しめることは無かった。不思議と心は安らぎに包まれていたからだ。

14章（3）

浩一と浩二の連携は恵美の適切な動きによって、意外なほど順調に進んだ。
浩一も無理に記憶を取り戻そうとはせず、不快で激しい頭痛に悩まされることもなかった。
夢だけは相変わらず見るのだが、今は仕事が楽しくて仕方がなかった。
ベッドも直角まで起こすことが可能となり、浩一の笑顔をみんなが見ることも出来た。
浩二は提携プロジェクトにも恵美を起用した。驚いたのは恵美の元上司たちだった。
部長や一緒に働いた孝子だが、恵美の変身振りに戸惑いながらもその能力に脱帽したのだ。
やがて2週間が過ぎようとしたころ、ジュンは恵美にこう言った。
「こうなったら、最後まで付き合うわ」
浩一の心配がなくなった恵美は更に激務をこなしていった。
「恵美君、君のお陰で中途半端な仕事はあらかた片付いた。お礼を言わてほしい」
浩一の突然の言葉に、恵美はただ呆然と立ち尽くした。それまでの浩一は仕事の鬼と化し、
叱責さえなかったものの、かなり強い言葉も浴びせられたのだ。
恵美の瞳は満水の湖に沈む満月のように溢れる涙に没していった。
浩一が記憶を失ってから、浩一の前で初めて見せた涙。
今回ばかりは恵美は抑えられなかった。ベッド脇に立ったまま、
恵美は抑えてきた全てを吐き出すように泣き続けた。浩一はじっと優しい目で恵美を見て、
決して責めようともしなかった。しかし浩一の頭に奥では、
不快な頭痛が起き始めようごめきだした。恵美を見ていると、

頭痛の種は大きく膨れはじめた。
「恵美君、今日はもう良い、帰って休みなさい」
厳しい口調だった。急な浩一の変貌振りに恵美は驚いて顔をを覗き込んだ。
すると頭痛の種は更に大きさをまし、疼きも爆発寸前にまで到達しそうだった。
「頼む。何も言わずに今日はこのまま……」
言葉は苦痛の呻きと変わり浩一は頭を抱えた。
丁度、売店から戻ったジュンも異変に気がつき、抱えていたジュースをソファに放り出し、
急いで浩一に薬を飲ませた。ベッドを水平に寝かせ浩一が落ち着くと、
ジュンは恵美を廊下に引っ張り出した。
「たぶん、貴方の事を、思い出しそうなんだと思うわ」
ジュンは小声で説明した。ジュンの話に寄れば、忘れた時間を思い出そうとすると、
激しい頭痛に襲われるそうだ。恵美は話を聞いて気分が楽になった。
しかし浩一が苦しむ時に何も出来ない自分が情けなかった。
ジュンはテキパキと動き浩一に安らぎを与えたの対し、
恵美は呆然と立ち尽くすだけだったのだ。恵美は廊下でも泣き出した。
「どうしたの」
ジュンは涙の理由がわからず、恵美に尋ねた。もちろん恵美にはそんなことは言えない。
責めていなくても事実上ジュンを責めることになるのは、恵美にも理解できたからだ。
『じゃあ、私は付き添うを辞めるわ』そんな言葉がジュンの口から戻って来そうで、
恵美は黙って首を振った。涙を吹き飛ばすように激しく首を振った。
ジュンは恵美をしっかりと抱き寄せて言った。

「ごめんなさい。貴方が心配すると思って、頭痛のことは言わなかったの。
私は長く付き添ってるから出来るだけよ」
ジュンは恵美の気持ちをしっかりと理解していた。
そんなジュンに一時でも嫉妬に近い感情を抱いた恵美は、
情けなくて切なくて更に涙を流すだけだった。
「ごめんなさい。ごめんなさい」
恵美は何度も謝った。許しがほしい訳ではない。その言葉しか浮かばなかったのだ。
「ううん、私は恵美さんに感謝してるの。銀座という華やかなところに居ても、
所詮はホステス。でも、貴方がチャンスをくれたのよ。私は付き添いが終わっても、
夜の仕事には戻らない。そう決断できたから……」
ジュンもまた悩みを抱えていたのだと、恵美もはじめて聞かされたような気持ちになった。
　それからの浩一の夢は徐々に鮮明さを増してきた。
今では夢の女性の服装までわかりはじめてきたのだ。恵美が昔どうりの服装で現れたら、
直ぐに分かったかも知れなかった。そんな浩一に嬉しい転機が訪れた。
「どうしたの」
ジュンは浩一の行動に驚きの声を発した。
「うん。何が」
浩一は理解していなかった。
「その、手よ。その手は何を……」
ジュンは浩一の右手から目が離せなかった。
「うん、痒いから……」
浩一その時はじめて自分の行動に驚いた。
無意識のうちに浩一の右手は右の膝頭を掻いていた。感覚が消え失

せていた脚を……。
浩一は驚きと共に興奮を覚えた。今までは感覚すらなかった自分の脚。
叩かれても感じなかった脚。その脚が痒いと悲鳴を上げたのだ。
ジュンも浩一もその事実にただ涙を流した。医師に言わせれば『奇跡』その一言だった。
完全に断ち切られたはずの背骨の神経束が僅かに手を伸ばしあい、しっかりと繋がりだしたのだ。この吉報は瞬く間に広がった。駆けつけた康之や母、
浩二に恵美。横田までもが喜びの涙を流した。
ただ一人、浩一の母は優しく頭を撫ぜ笑顔で喜びを表した。
「全然心配はなかったわ、でも、これからのリハビリが大切よ」
浩一の頭に優しく口付け、母は優しく抱きしめた。その二人を夕陽が祝福するように、
赤く黄色くオレンジにと自然のスポットライトを当てていた。

14章（4）

浩一の事故から4ヶ月が過ぎたとある日曜日。
恵美は久しぶりにアパートの掃除に専念していた。
掃除機をかけ、風呂もトイレも丹念に拭き掃除をしていたのだ。
その時郵便受けが小さな雑音を上げたと思うと、一通の手紙が投函された。
拭き掃除中の恵美は雑巾をバケツに戻し、玄関の手紙を拾い上げた。
差出人は京子だった。
忙しさで頭の隅に追いやられていたが、確かに京子からの手紙だった。
しかもなぜか速達で届いたのだ。恵美は掃除のために立てかけていたテーブルを戻し、
手紙の封を開けた。速達なのだから恵美も急いで見なくてはと思ったのだ。
『恵美。お元気ですか。私は元気です。速達なんかで驚かせたかな？だったらごめんね！
でも、どうしても知らせたいことがあって、ペンを取りました。電話でも良いけれど、
声を聞くと……。お世話になりっぱなしで、本当に感謝しています。
恵美は元気ですか。
一度社のほうに退職の関係で連絡を入れたら、恵美も辞めたと聞きました。
恵美のことだから心配はしてはいないけど、本心ではちょっと、心配……。
そうそう！お知らせしたい事とは！！！私の田舎は知っていると思うけど、長野です。
（言わなかったっけ？）そこでこの前、今までのお礼も兼ねてお寺さんに御参りに行きました。善光寺です。有名だから知っていると

思うけど。そこの本堂に向かう道には、
色々な仏閣が両側に並んでいるのです。修行僧も沢山いますよ。そこで、
ある人を見かけたのです。誰だと思う？笑！！あの浩二さん！恵美の元彼、私の悪魔君。笑。
彼、頭を丸めて一生懸命掃除をしていました。もちろん私には気が付かなかったけど、
そんな姿を見ていたら、恨みも自分の馬鹿な行動も全てすっきり流されました。
御参りに行って本当に良かったと思っています。恵美！私はもう大丈夫よ。
今度は恵美が頑張ってね！色々なことで……笑。本当にありがとう。
寂しい都会暮らしで、
恵美だけが私の救いでした。今度は長野にも遊びに来てくださいね。
待ってます。
それまでお元気で。……京子』
京子の文字には、寂しさも虚勢も感じられなかった。恵美は手紙を胸に抱え、
何度も頷き心の中で京子にエールを送った。
　浩一のリハビリは厳しいものだった。長いこと動かさなかった脚をまずは動かすのだが、
関節は伸びきったまま固まり、少しの屈伸でも悲鳴を上げた。
浩一には鈍い痛みしか伝わらないが、それでも大きな進展だった。
何も感じなかったのだから。リハビリの時間は1日に2時間。
浩一は物足りなさを感じていた。『まだ早いのでは』という医師に頼み込み、
浩一は一本のゴムを受け取った。それを自分の足の土踏まずに引っかけ、
膝の屈伸に使用するのだ。両手が自由な浩一は周囲が心配するほどトレーニングに没頭した。片方ずつの脚にゴムを引っかけて引っ張

る。
単純な作業だが、膝の屈伸角度は目を見張る勢いで回復していった。
次は腰の回転と屈伸だが、これは思うようには捗らなかった。
しかも浩一一人ではベッドでの自主トはも思うようにいかないのだ。
天井から下げられたつり棒に掴まり上半身を起こすのだが、
脚と違い痛みは背骨から脳に稲妻みたいに走るのだ。
それでも浩一は汗だくになり毎日暇を見つけては繰り返した。
ジュンはあまりの苦痛に歪む浩一の顔を見れずに、何度も病室から逃げ出した。
それでも、ジュンは献身的な態度を崩さなかった。毎日就寝前には浩一の身体を綺麗に拭き、常に清潔な下着と寝間着に着替えさせた。
浩一の体は少しずつだが衰えていた筋力も回復しつつあった。
腕や胸の筋肉は隆々と盛り上がり、汗の匂いさえジュンの気持ちを刺激した。
浩一の夢は進展を止めていたが、今の浩一にはやらなければならないことが山積みで、
忘れてしまった恋人のことなど、どこかに吹き飛んでいた。
それよりも毎日顔を見る女性に心引かれ始めていたのだ。
内心『名乗り出ない恋人など、どうでも良い』とさえ思い出していたのだ。
『今を生きよう』浩一の心は今にも声を張り上げ叫びそうだった。
　浩二と恵美は提携プロジェクトの最終段階に入っていた。最初は戸惑い気味の元同僚達も、今ではしっかりと恵美の言葉に耳を貸すようになっていた。このプロジェクトだけは、
どうしても成功させたかったのだ。元同僚、そして浩二のためにも。
しかもプロジェクトには、いつの間にか雅子も参加していた。もちろん単なる経理事務だ。
「どうしたの」
恵美は雅子の顔を見るなり驚きの声を上げた。
「なんか、急に参加してくれって。専務が……」

雅子の答えに恵美は声を出して笑った。専務の顔が頭に浮かんだのだ。
想像の中の専務は恵美に向かって赤い舌を出してこう言った。『今度は君が狙いだよ』と……。その答えが雅子の参加に思えたのだ。
『たぬき親父め』恵美の心も負けじと言い放った。
笑い転げる恵美を、雅子は不思議な眼差しで見つめ続けた。

15章（1）

浩一の入院生活は退院に向けて動き出した。その一歩として車椅子の使用が許可されたのだ。
この時の浩一の喜び様は半端ではなかった。
初めて与えられた玩具、水を得た魚、そんな言葉がすんなりと収まった。
久しぶりの外の空気は浩一の肺の奥まで染透った。
血管の一本一本の先まで新鮮な空気が行き渡る気分だった。
リハビリのお陰で膝もすんなりと曲がり、車椅子での移動は少しも問題はなかった。
「もう少し感覚が戻れば……」
浩一は自分の膝を撫ぜながら呟いた。
「頑張ってください。きっと戻りますよ」
浩一の車椅子を押していたのは恵美だった。仕事で顔を出した時、たまたま散歩に向かうところでジュンに押し付けられたのだ。
勿論、押し付けられたとは思っていない。ジュンの好意だと受け止めていた。
穏やかな日差しを浴び、草木が風になびき鳥が歌をうたう。
浩一には全てが新鮮でとても身近に感じていた。
「君には随分と当たってしまったね」
唐突に浩一が恵美に言った。
「いえ、全部事故のせいです」
事故後に会った時の状況が、恵美の脳裏に鮮明に描かれた。
浩一は完全に恵美を忘れいまだに思い出さない。
恵美は事故を呪ったが、今一緒に居れる事が大切だった。
浩一は知らなかったとは言え、恵美に辛く当たった事は覚えていた。
「いつから私の秘書をしている」
恵美は戸惑うことなく答えた。この日が来るのは分かっていたから

だ。
「じゃあ、事故の前だね」
浩一は昔を懐かしむような表情を浮かべた。
「はい」
恵美の答えは真っ直ぐだ。
「じゃあ、僕の恋人を知っていたかい」
恵美は言葉を発せなかった。
まさかその質問が自分に向けられるとは、想像もしていなかったのだ。
しかもどんな答えも嘘になるからだ。戸惑う恵美を感じ浩一は慌てて言った。
「いや、別にいいんだ。今は……」
「いい……のですか」
恵美は、少なからずショックを受けた。諦めてしまったように感じたからだ。
「ああ、その彼女には悪いが、名乗りもしない。きっとなんとも思ってなかったんだよ。
私のこと……」
恵美はつい大きな声を出しそうになった。
浩一の後ろに居たから良かったようなもので、恵美の瞳は涙に濡れていた。
そして『これでよかったのだろうか』との疑問が湧き出した。
『もし思い出しても、私を許さないのでは』
とさえ思えてきた。しかし恵美は我を忘れなかった。
「きっと、何か事情があるのでしょう」
恵美は出来る限り冷静に答えた。
「そうだと思う。仮にも私が好きになった人だからね」
浩一の声は明るさを取り戻した。恵美もその答えに救われた気持ちになった。
「それよりも……」

浩一は言葉を詰まらせた。
「はい、なんですか」
「君には、恋人が居るのかな」
浩一の質問に恵美は耳を疑った。『なぜそんな事を？もしかして私に好意を……』
恵美は一瞬そう考えた。それはそれでも嬉しいのだが、今の恵美は作られた恵美だ。
本当の自分は浩一に抱かれた恵美が本物なのだ。恵美の心は動揺していた。
「いえ……」
恵美は返事に困った。浩一は慌てて恵美にいい訳をした。
「ごめん。困らせるつもりはないんだ。ただ、君は一緒にいて落ち着くし、
何か懐かしい感じがして、それで……」
浩一の言葉が恵美の気持ちを高揚させた。『懐かしい』……。
やはり心のどこかに、忘れてしまった恵美の存在を感じているようだった。
『私はここよ』恵美は声に出そうな感情を必死に抑えた。
今、すべてを語ってしまえば、それこそ浩一は混乱するだろう。そう思ったのだ。
陽だまりの中、傍目には恵美と浩一はお似合いの二人に見えた。
その光景は康之によって、目の不自由な妻にそっと耳打ちされていた。
着替えの袋を持った康之と、手を引かれた浩一の母は大きな窓越しに二人を見ていた。
「ええ、見えますわ。浩一の幸せそうな顔が」
あたかもその光景が目に写るかのように、光に包まれる浩一と恵美を母はじっと見ていた。
康之は恵美の選択をこの時はっきりと理解した、そして心から恵美に礼を言った。

恵美が病室に戻ると、浩一の両親そして浩二が待っていた。
恵美は深く頭を下げ、浩一をベッドまで運んだ。
手伝いを得て浩一を寝かすと、ようやく浩二が口を開いた。もったいぶった言い方だった。
「恵美さん、ご苦労様でした。プロジェクトは決まりましたよ。かなりの好条件です」
浩二は恵美に笑顔を投げかけた。恵美も浩一もその報告を聞いて満面の笑みを浮かべた。
しかし、こちらの好条件と言う事は、相手はかなりの苦汁を飲まされたようだ。
恵美はたぬき親父の顔を思い浮かべ更に嬉しくなった。『してやったり』恵美の本心だ。
ようやく仕返しが出来た思いに、恵美の心は晴々とした。

15章（2）

浩一は周囲が心配するほど身体を痛めつけた。
「もうこのくらいで……」
リハビリ技師の言葉も聞かずに黙々とトレーニングを重ねた。
そして病室に戻ると死んだように眠り、食事をしては自主トレに汗を流した。
浩二が引き継いだことで仕事の制約にも解放され、
気持ちはトレーニングに集中できたようだ。大変なのはジュンだった。
何しろ汗ばかりかくために、身体を拭いたり洗濯したりが異様に多いからだ。
「じゃあ、これ洗濯してきます」
ジュンは洗濯物を籠に入れ、病室を出て行った。
今日は着替えが4回、身体を拭いたのが3回、そして今シャワーを浴びたところだった。
いつでも浴室が使えるのも、個室の便利なところだった。
ジュンが出てからしばらくして、恵美が訪れた。
仕事の書類を持っていたが、差し当たり重要なものでもなかった。
浩二が気を利かせてくれたに過ぎない。
「おはようございます」
何時に会ってもその日の最初の挨拶は同じだった。勿論、横田の教えだ。
「ご苦労様」
浩一はベッドに座りなおし、気持ちよく恵美を迎えた。
「今日はこれを……」
そう言って手渡された書類を見て、浩一は笑った。
恵美にはその笑いの意味は通じないが、浩一の笑顔が戻って心から喜んでいた。

「浩二の方は順調ですか」
「はい、忙しそうですが順調そうです。あまり病院には顔を出せないが、
よろしくとのことでした」
恵美は笑顔で答えた。
「いや、順調ならば構わない。私も順調だと伝えてください」
浩一は嫌味のない笑顔を向けた。実際問題、浩一は少しも心配はしていなかった。
それは浩二への信頼と手腕を買っていたからだ。
自分がいなければ浩二がやるべき役職だとも思っていた。
「恵美さん、今日は遅くまで付き合ってくれますか」
突然の申し出に恵美は戸惑った。
「え？あ、はい」
理由はわからないが、浩一の誘いを断わることなど出来ない。
「実は、ジュンを少し休ませようかと……」
浩一は自分の事よりもジュンの心配をしていた。
それは浩一の気持ちに余裕が出てきたことであり、
昔の人を思いやる優しい浩一に戻ってきた証でも有った。
事故後の浩一ははっきり言って荒んだ態度に飲み込まれていたのだ。
「ええ、喜んで」
恵美は嬉しかった。浩一と堂々と一緒に居られる。話したくて仕方がなかったのだ。
ジュンは二人の好意に快くお礼を言った。
「じゃあ、恵美さん、浩一さんをよろしくお願いします。
それと２０分で洗濯物の乾燥が終わるから、それもよろしくね」
ジュンは嬉しそうに病室を出て行った。
「ちゃっかりしてるな」
浩一は責めるわけでもなく、気持ちよく送り出した。恵美はじっとしてはいられなかった。
落ち着かないのだ。病院とは言え二人きりの時間。恵美はしきりに

世話を焼いた。
お茶を飲むか、果物を剥こうかと浩一が呆れるほどだった。
しかしいくら動いても所詮は病室。やがてやることも尽き、恵美は浩一の側に座った。
「やっと、話せますね」
浩一は恵美の目から視線をそらさず、恵美は目のやり場に困った。
「私に話すことはありませんか」
浩一は恵美に尋ねた。恵美は戸惑った。何を話せと言うのだろうか。
恵美は浩一の発した言葉の真意をはかりかねた。
「え、何をですか」
咄嗟の言葉は、引き寄せられた浩一の唇によって塞がれた。
恵美は浩一を無意識のうちに突き放した。
「止めて下さい。どういうことですか」
驚きと一緒に、恵美の口から思いもよらぬ言葉が飛び出した。
恵美は思わず自分の口を両手で押さえた。
しかしそれは全てを吐き出したあとで、浩一にはしっかりと聞かれてしまった。
浩一は寂しそうに恵美を見つめ、何も言葉を発しなかった。
やりきれない時間だけが過ぎていった。

その頃ジュンは銀座の店『来夢』に顔を出していた。
「ジュンちゃん久ぶりね」
相変わらず派手なママはジュンの顔を見るなり抱きついた。
「ご無沙汰してます」
ジュンは丁寧に頭を下げた。
「良いのよ。貴方を引き抜いたからって、毎日のように浩二さんが顔を出してくれるの、
飲まなくてもね」
ジュンはその時初めて知ったのだ。浩二は仕事と病院の合間に、
時間を作っては店に来てくれていたのだ。ジュンは感謝の気持ちで

いっぱいだった。
「今日は飲んでいくでしょ」
ママに言われジュンは頭を下げ、カウンターに腰を下ろそうとした。
「良いの、こっちよ」
そう言ってママはボックスの良い席に案内した。
「でも、ママ……」
ジュンが断わろうとした時に、ママはジュンの前で人差し指を横に振った。
「浩二さんからの命令よ。ジュンが現れたら、私と同じに接待してくれって。
それに今日はまだ来てないから、そろそろ来るかもね」
そう言ってママはボーイを呼んだ。出されたボトルは勿論浩二の名前だった。
浩一達の急な好意を受け入れても、実際はジュンには行き場所がなかった。
そして訪れた古巣で、ジュンは人の温かさに触れた気がした。
『浩二さん、頂きます』ジュンの素直な心の声だった。

15章（3）

「なんかすっかり昼間の女ね」
ママがジュンに言った。
「そんな。まだまだです。戻ろうかと……」
一瞬ジュンの気持ちは揺らいだ。楽しい時間に酔ったのだ。
「駄目よ。せっかく足を洗おうと決めたのに、私だってきっかけさえあれば……」
ママも苦労をしたようだ。そう言ったママの目はゆっくりと店内の宙を泳いでいた。
「華やかと言っても、所詮はこんなに小さなステージしかないわ」
必死で手に入れた自分の店を、そこまで言ってしまうママには、ジュンもさすがに驚いた。
その時、新規の客が入ってきた。浩二だった。一人だが浩二は直ぐにジュンに気が付いた。
ママの動きは早い。先ほどの愚痴が嘘のようだ。
「来てたの」
ママにエスコートされ、浩二はジュンの席についた。
「ええ。急になんですけど、休んで良いよって。あっ、恵美さんが代わりに付いてます」
ジュンは浩二の心配を見抜き慌てて付け加えた。
「そうか、いつもありがとう。感謝してます」
浩二は大げさに頭を下げた。ジュンも久しぶりの酒に酔った。
仕事と違いアルコールはジュンに理性を失わせつつあった。
浩二も顔出しだけのつもりだったが、ジュンの手前かなりの酒を飲んでしまい。
二人は酔ってしまったようだ。ママが心配するほどだ。
「そろそろ閉めますよ」
時間は深夜を回るところだ。

「ああ……、そうだ、ママも一緒に次に行こう。ジュンは来るよな」
浩二は強制的にジュンに言った。
「え～。まだ飲むの。もう無理よ」
さすがにジュンの適量は越えていたようだ。声にも覇気が無かった。
「そうそう、明日も仕事でしょ、ジュンちゃんだって付き添いに戻らないと……」
ママの言葉は正しい。
「う～。そうか……そうだな。よし、帰るぞ。ジュン。送ってやる」
ジュンは返事をしなかった。見ると既にソファに寄り添い目を閉じていた。
「ママ、車、呼んでくれ」
ジュンが完全に寝入っているのを確認すると、浩二は言った。
「もう、呼んで下で待ってますよ」
ママにもわかっていたようだ。
「流石だな。また来る」
浩二はジュンを抱えて店を出た。本当は酔っていないのだ。
ジュンを楽しませようと、酔った演技をしていただけだった。
そんなこととはつゆ知らず、ジュンはかなりの量を流し込んでいた。
ジュンがそこまで飲む理由。浩二にはわかっていた。ジュンも普通の女と変わらない。
傷つきやすい女なのだ。ジュンは眠りながらも涙を流し車の揺れに任せ、浩二の寄り添った。酒の匂いと混ざってジュンの女が匂ってきた。

浩一は恵美の過剰な反応に戸惑った。恵美もまた自分の反応に苛立ちと後悔を感じていた。『待っていたのに、拒否するなんて』恵美は浩一の側から離れソファに腰を下ろした。
浩一も視線を窓へと移し自分の行動を責めていた。
『何故、あんなことを……』答えは出なかった。
衝動的とは言え、自分の感情を抑えられなかった。目の前に恵美の

唇が有った。
それは自分のものだと思ったのだ。浩一は窓を見つめじっと考えていた。
不思議と頭痛は起きなかった。恵美は浩一の言葉を待った。
ソファに座りながら背を向ける自分に、声をかけてくれることをひたすら待ち続けた。
その願いは空しく時間だけが過ぎていった。
恵美は一瞬自分を思い出したのではと、期待はしたが、
浩一のキスは恵美の知るキスとはかけ離れていた。浩一は秘書の恵美にキスをしたのだ。
必死に繕われた一時だけの人形。そう思った瞬間、恵美は浩一を突き放した。
仲良くなってから打ち明けても構わない『実は付き合っていたの』と。
その場合今の恵美はどうなるのだろう。秘書恵美を続けなくはいけない。
実際、今の浩一は秘書の恵美に恋をしたのだから……。
恵美には無理だと思った、秘書の恵美は自分の限界を超えた存在で、浩一が思い出すまでの仮の姿なのだ。
もしも浩一が思い出さなければ、仮の姿で通さなくてはならない。
それは本当の恵美が死ぬことだ。恵美はソファで泣き出した。
浩一の存在など気づかないようとでも言うように泣き出した。浩一は何も言えなかった。
それよりもその泣き声さえも記憶のどこかに、残っているように感じ、
泣き方や声などに注意向けた。
やがて恵美は眠りについたが、浩一の頭脳は回転を続けていた。
東の空が明るくなり始め黄色とオレンジ、青、黒。
同じ空にも幾つもの色があるのに気がついた。
そして差し込んだ一筋の朝日は、ソファで眠る恵美の顔を照らした。

浩一はその顔に見覚えがあった。朝日に照らされたその顔は、熱海の旅館で見た顔。
初めて結ばれた日の朝に見た顔。愛しい恵美の顔。浩一は全てを理解した。
恵美が秘書となったのも、自分から名乗らなかったのも、そして夕べのキスを拒んだのも、
その全ては自分の為だと。
浩一は声を出した。しかし声にならない。涙で声が出せないのだ。
愛しい恵美が目の前にいるにも関わらず。その顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃだった。
恵美は不意何かを感じ、眠りから覚めると同時に振り向いた。
そこには子供のように泣き続ける浩一が、水草のようにゆらゆらと立っていた。

15章（4）最終話

その日浩二はジュンを送り、二人はお互いに意識を持ち始めた。
当初は浩二狙いだったジュンの気持ちが思い起こされたのだ。
浩一と恵美の間には到底入れない。浩二は自分の事をここまで考えていてくれた。
そのうちジュンは浩二に身を預けた。しかし浩二は優しくすり抜けた。
「ジュン、酔った勢いは駄目だよ」
その一言でジュンは我を取り戻した。
「ごめんなさい。馬鹿ね、私……」
ジュンの涙は悲しみの涙ではない。浩二の心の広さに感謝したからだ。
この時ジュンは心を決めた。『私の相手は、きっとどこかにいる。
それまでは、
働くしかない』と。そしてジュンは付き添いを恵美に引継ぎ、仕事を探し始めた。
ママに言われたように昼間の仕事も当たってみたが、
経験も資格も無いジュンに世間は冷たかった。
そのことはやがて浩二の耳にも入り、お節介とは思ったが、
浩二は自分の下で働かないかと持ち出した。ジュンはこれを丁寧に断わったのだ。
「恵美さんみたいに出来ないし、資格も経験も無いの。無理よ」
とジュンは言った。
「経験など、これから積めば良い事だ。それに仕事が無くては困るだろう」
浩二は言い返した。
「そうね。私には、夜の経験しかないから……」
「じゃあ、いっそのこと夜の仕事に戻れよ」

ジュンは浩二の言葉が信じられなかった。
驚くジュンを無視するかのように、浩二は話を続けた。
「料理屋なんてどうだい」
「私に女中さんになれと言うの」
いくら浩二の言葉でも、ジュンは侮辱としか受け取れなかった。
「まあ、待てよ。ちょっと付き合え」
浩二が連れて行ったのは、かつて浩一と浩二が始めて恵美と食事をした店だった。
「食事なら御馳走になるわ」
ジュンは不貞腐れてそう言ったが、女将の挨拶を受けると、顔が変わったように店を見渡していた。
「若いのにすごいわね」
「興味あるか？」
「私？そうね。夢ね。こんな素敵なお店ならね」
まるで夢見る乙女の顔つきだった。
「そうか」
浩二はビール一杯飲み終わらないうちに、ジュンを連れ出した。
浩二はジュンの手を無言で引っ張り歩いていた。
「もう、いい加減にしてよ」
ジュンは勢い良く浩二の手を振り払った。
浩二は立ち止まるジュンの手を握り、更に２０メートルほど歩いたところで手を離した。
そして振り向き目の前の一軒の店を指差した。
「なんなのよ。ここは」
お洒落なビルの一階、しかも通りに面したところにシャッターが降りていた。
浩二は戸惑うことなくシャッターを開けると、ジュンを手招いた。
「どうだ」
浩二が店内の明かりを点けると、料亭でも思わせるような座敷と、重厚な木材で作られたカウンターと、広く綺麗なキッチンが見渡せ

た。
シンクも蛇口も新品で、ステンレスは光り輝いていた。
全体は赤と黒を基調にした色彩と、入り口脇の大きな番傘が高級感をかもし出していた、
座敷のテーブルも、カウンターの椅子も、漆塗りの立派な造りだった。
「ど、どうしたの？」
ジュンは戸惑いながらも浩二に尋ね、一歩一歩店内に足を踏み入れた。
「ここをジュンがやるんだ。女将として、不満か？」
浩二は淡々と答えた。ジュンにはまだ理解出来ずにいた。
「ちょっとまって。私がここを経営するの？」
驚きと聞き間違えでは無いかとの気持ちでジュンは聞き返した。
「そうだ。嫌か」
浩二はまるで他人事のように答えた。
「だって、私……」
ジュンの気がかりは多すぎた。浩二にはその全てが理解してあった。
「いいかジュン、良く聞いてくれ。ここは我が社の子会社にする。
君はその社長だ。
当面の経理や税制面は本社で処理する。君は経営だけに専念してくれれば良い」
浩二はジュンの両腕を掴み、心配はいらないと熱く語った。
「なんで、私に……」
「僕と兄、そして父の希望でもある。やってくれるね」
ジュンは長い間黙っていた。涙が言葉を邪魔していたのだ。
俯くジュンの顔からとめどなく涙が床に流れ落ちた。
「……はい」
ジュンはその一言を発するのが精一杯だった。
ジュンの勤めていたママの了解も得て、店は『来夢』と名づけられた。

浩一の歩行訓練も順調に進み、恵美を思い出してから2ヶ月ほどで退院が決まった。
その間恵美は秘書の仕事を辞め、浩一に付き切りの世話をしていた。
ジュンは結局夜の商売に戻ったが、康之の取り計らいで自分の店を持ったのだ。
夜の商売と言っても、女を売る商売ではない、小さな小料理屋を始めたのだ。
そこには恵美の紹介で聡子も働きに来ていた。聡子は喜んでいた。
昼は娘と過ごせる上に、旅館の給金とは問題に比べものにならないほどの、
給料を得ることが出来た。ジュンの店は繁盛していた。浩二の会社の接待や、
関連会社などが毎日のように詰め掛けていた。
板前は恵美が浩二に始めて連れて行ってもらった小料理屋の女将の紹介で、
京都から腕の良い職人が集まったのも繁盛に拍車をかけていた。
恵美も何度か邪魔をされてもらったが、ジュンの活き活きとした姿を見るのが嬉しかった。
姉のような聡子までが店にいるだけでも、恵美は嬉しきかった。
そして浩一の退院日。ジュンの店は貸切でお祝いの席が設けられた。
『家で静かに』との母の提案も『内臓が元気で動ければ、皆にも挨拶するべきだ』
との、康之の一声で決まったのだ。何よりも喜んでいたのは、父、康之かもしてない。
車椅子とはいえ、浩一はほとんど自分の事は一人でこなせるようにまで回復していた。
「今日は皆さんお集まり頂き、誠にありがとうございます。
乾杯に移る前に兄から一言挨拶があります」

浩二は全員が揃うのを見計らって口を開いた。
浩一は特別に作られた席から立ち上がり頭を下げた。
「皆さんこの半年の間、ご心配をお掛けしたことをお詫びします。ご覧の通りいささか頼りないですが、社会復帰できるまで回復しました。
皆さんの応援があればこそと、心より感謝いたしております。特に父康之には迷惑ばかりと、胸が痛む想いですがこれからの私に期待して頂きたい。
そして浩二。最大に迷惑を掛けたのは弟浩二でしょう。済まなかった。
そしてありがとう。会社のほかの重役の皆様、秘書の皆様、これからも宜しくお願いします。しかし私の心を支え続けてくれたのは、ここの女将、ジュンさん、そして恵美さん。
この二人がいなければ今も私は病院のベッドにいたかも知れません。一生、ジュンさんには頭が上がらないです。ジュンさんありがとう。恵美さんにはもっと頭が上がりません。恵美さんこちらに……」
いきなり浩一に呼ばれ、恵美は照れくさそうに浩一と並んだ。
「皆さんも御存知だとは思いますが、私は彼女を愛しています」
そう言うと浩一は恵美に向き直り、正面から話し出した。
「恵美さん、結婚してください」
浩一は恵美に頭を下げた。
「はい」
恵美の答えは短いものだが、その声ははっきりと集まった全員に届く声だった。
康之と母には予め浩一は言っておいた。『お前が決めたことだ。何も文句はない』
康之は短いながらも、顔には笑いと混じって涙も浮かんでいた。
『良いお嫁さんが来たわ』母はもっと簡単だった。しかしその身体は早くも踊りだしていた。既に、恵美の存在自体が当たり前になっていたのだ。浩二はみんなの前で照れる二人を、

心から祝福していた。浩二は恵美への気持ちが吹っ切れたのだ。
その浩二の視線の先には、女将の姿がしっかりと定着した、笑顔のジュンの姿が有った。

完

15章（4）最終話（後書き）

長い間、『別れと出会い』を呼んでいただきありがとうございました。
みんながハッピーにとは行きませんでしたが、想像出来る程度に残しておきました。ご不満もありましょうが、今回で終了となりました。
今まで、色々な御意見ご感想を頂き、心より感謝いたします。
次回作も、皆さんのご期待に添えるかどうかはわかりませんが、一生懸命書いていきたいと思います。
引き続きの応援を宜しくお願いします。
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3168d/

別れと出会い

2010年10月11日21時55分発行